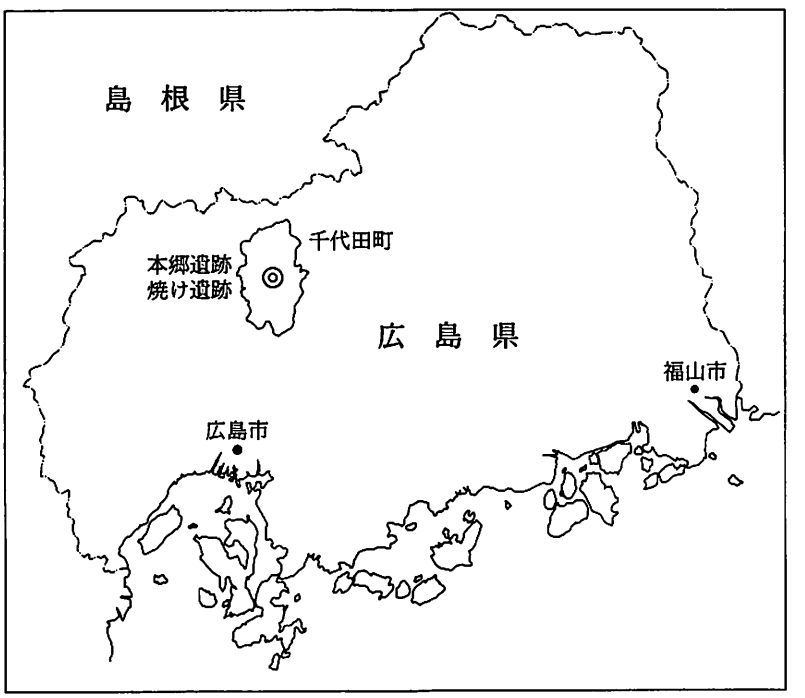
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告 第88集

本郷遺跡
焼け遺跡

1990

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

本郷遺跡
焼け遺跡



財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，平成元(1989)年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う山県郡千代田町今田に所在する本郷遺跡，焼け遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島県教育委員会と広島県可部農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．発掘調査は次の者が担当した。

　本郷遺跡　　岩井重道，道上康仁

　焼け遺跡　　沢元史代，松村昌彦

4．遺構・遺物の実測及び遺構の写真撮影は上記の者が担当し，遺物の写真撮影は，沢元と道上が行った。

5．本書の執筆は，調査担当者が分担して行い，沢元と道上が編集した。

6．本書で使用した遺構の分類記号は次の通りである。

　ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡

　ＳＫ：土壙

　ＳＤ：溝

　ＳＸ：性格不明遺構

7．挿図中の方位は，第１・２・21図は真北で，ほかはすべて磁北である。

8．第１図の「周辺主要遺跡分布図」は，建設省国土地理院発行の1/25,000地形図（八重・佐々井）を用いた。

9．図版8～11，21～24の遺物写真番号は，各遺跡の挿図中の遺物番号と同一である。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　本郷遺跡の調査 …… 5

1　遺跡の立地と現状 …… 5

2　調査の概要 …… 6

3　遺構と遺物 …… 8

(1)　竪穴住居跡 …… 8

(2)　土壙 …… 15

第Ⅳ章　焼け遺跡の調査 …… 25

1　遺跡の立地と現状 …… 25

2　調査の概要 …… 26

3　遺構と遺物 …… 28

(1)　竪穴住居跡 …… 28

(2)　掘立柱建物跡 …… 40

(3)　土壙 …… 40

(4)　溝 …… 41

(5)　性格不明遺構 …… 48

(6)　その他の遺物 …… 48

第Ⅴ章　まとめ …… 50

1　本郷遺跡 …… 50

(1)　弥生時代前期の土器について …… 50

(2)　古墳時代の土器について …… 51

2　焼け遺跡 …… 54

(1)　出土土器について …… 54

(2)　竪穴住居跡について …… 55

(3)　溝について …… 56

図 版 目 次

本 郷 遺 跡

図版 1　① 遺跡遠景
　　② 遺跡調査区全景
図版 2　① SB 1a 検出状況
　　② SB 1a 遺物出土状況
図版 3　① SB 1a 完掘状況
　　② SB 1b 完掘状況
図版 4　① SB 2a 検出状況
　　② SB 2a 遺物出土状況
図版 5　① SB 2a 完掘状況
　　② SB 2b 完掘状況
図版 6　① SK 1 検出状況
　　② SK 2・3 検出状況
図版 7　① SK 4 完掘状況
　　② SK 6 完掘状況
図版 8　出土遺物 I
図版 9　出土遺物 II
図版 10　出土遺物 III
図版 11　出土遺物 IV

焼 け 遺 跡

図版 12　① 遺跡遠景
　　② 遺跡調査区全景
図版 13　① 調査区西半部
　　② 調査区東半部
図版 14　① 調査区東半部
　　② SB 1 完掘状況
図版 15　① SB 2a・2b・3, SD 3 完掘状況
　　② 同上
図版 16　① SB 2a 炉跡土層断面
　　② SB 2b 遺物出土状況
図版 17　① SB 4 遺物出土状況
　　② SB 6・8 完掘状況
図版 18　① SK 1 土層断面
　　② SK 2 検出状況
図版 19　① SD 4a・4b 遺物出土状況
　　② SD 4a・4b 土層断面
図版 20　① SD 5 土層断面
　　② SD 5 完掘状況
図版 21　出土遺物 I
図版 22　出土遺物 II
図版 23　出土遺物 III
図版 24　出土遺物 IV

挿　図　目　次

第１図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）…… 折込み

本　郷　遺　跡

第２図　本郷遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 5
第３図　本郷遺跡調査区位置図（1/1,000）…… 6
第４図　本郷遺跡遺構配置図（1/200）…… 7
第５図　ＳＢ１a・１b 実測図（1/60）…… 8
第６図　ＳＢ１a 出土遺物実測図（1/3）…… 9
第７図　ＳＢ２a・２b 実測図（1/60）…… 折込み
第８図　ＳＢ２a 出土遺物実測図（1/3）…… 11
第９図　ＳＢ３実測図（1/60）…… 12
第10図　ＳＢ３出土遺物実測図Ⅰ（1/3）…… 13
第11図　ＳＢ３出土遺物実測図Ⅱ（1/3）…… 14
第12図　ＳＫ１実測図（1/30）…… 15
第13図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅰ（1/3）…… 17
第14図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅱ（1/3）…… 18
第15図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅲ（1/3，1/4）…… 19
第16図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅳ（1/3）…… 20
第17図　ＳＫ２・３実測図（1/40）…… 21
第18図　ＳＫ２出土遺物実測図（1/3）…… 22
第19図　ＳＫ２・３出土遺物実測図（1/3，1/6）…… 23
第20図　ＳＫ４～６実測図（1/40）…… 24

焼　け　遺　跡

第21図　焼け遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 25
第22図　焼け遺跡調査区位置図（1/2,000）…… 26

第23図　焼け遺跡遺構配置図（1/300）…… 27
第24図　ＳＢ１実測図（1/60）…… 29
第25図　ＳＢ１出土遺物実測図（1/3）…… 30
第26図　ＳＢ2a・2b・ＳＢ３・ＳＤ３実測図（1/80）…… 折込み
第27図　ＳＢ2a 出土遺物実測図（1/3）…… 31
第28図　ＳＢ2b 遺物出土状況実測図（1/20）…… 32
第29図　ＳＢ2b 出土遺物実測図（1/3）…… 33
第30図　ＳＢ2a・2b 出土遺物実測図（1/2，1/3）…… 35
第31図　ＳＢ４実測図（1/60）…… 36
第32図　ＳＢ４・６出土遺物実測図（1/3）…… 37
第33図　ＳＢ５実測図（1/60）…… 38
第34図　ＳＢ６・８実測図（1/60）…… 39
第35図　ＳＫ１・２実測図（1/30）…… 40
第36図　ＳＫ２出土遺物実測図（1/3）…… 41
第37図　ＳＤ３出土遺物実測図（1/3）…… 41
第38図　ＳＤ4a・4b 土層断面実測図（1/40）…… 42
第39図　ＳＤ4a・4b 出土遺物実測図Ⅰ（1/3）…… 44
第40図　ＳＤ4a・4b 出土遺物実測図Ⅱ（1/3）…… 45
第41図　ＳＤ５実測図（1/100）…… 46
第42図　ＳＤ５出土遺物実測図（1/3）…… 47
第43図　調査区内外出土遺物実測図Ⅰ（1/3）…… 48
第44図　調査区内外出土遺物実測図Ⅱ（1/2，1/3）…… 49

第Ⅰ章　はじめに

千代田町は中国自動車道の開通や国道261号など広域道路の整備により，広島都市圏や近畿・九州経済圏，山陰地方との連絡等交通も至便になり，工場立地が進められているため，農業の兼業化が進行している。このため，同町では昭和59(1984)年に土地基盤基本構想図を策定し，農業基盤整備事業の実施による農産物の供給力の向上や生産性の高い農業経営等を推進することになった。この度の発掘調査に伴う同町今田における県営ほ場整備事業（八重地区）もその一つである。同事業は八重地区の農地を整理改善し，合理的な水管理や営農に適した機械の効率的な運行，農地の集団化，作目別の利用集積によって優良農用地を確保し農家の育成等を行おうとするもので，昭和62年から238 haについて広島県可部農林事務所（以下「可部農林」という。）が施工している。

可部農林は同事業の施工に先立ち，昭和60年5月，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に事業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会した。このため県教委は現地を踏査し，今田氏館跡（その後平成元年11月20日に県史跡に指定）を確認するとともに，遺跡の有無の確認が必要な5か所がある旨を昭和61年4月に回答した。その後，県教委は試掘調査により本郷工区で本郷遺跡を確認し，昭和63年2月にこの旨を回答した。また，昭和63年11月に後有田工区で焼け遺跡を確認し，その取扱いについて協議した。この結果，両遺跡の大部分は設計変更等によって現状保存し，道路部分は発掘調査を行い記録保存することになった。

可部農林は平成元(1989)年1月に，文化庁長官と農林省構造改善局との覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」5項に基づき，県教委に調査を依頼し，同年2月に経費の事業者負担分（80％）の調査を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に，また，県教委は経費の農家負担分（20％）についての調査をセンターへ依頼した。以上の経過から，センターは平成元年度に可部農林と県教委からの委託をうけ，合わせて調査を実施することになった。

発掘調査は，本郷遺跡が8月28日から10月24日，焼け遺跡が8月28日から10月27日まで実施した。なお，センターと千代田町教育委員会は2月17日に遺跡報告会を開催した。

発掘調査にあたっては，県教委の指導を得たほか，可部農林，千代田町農地整備課，千代田町教育委員会，財団法人広島県農業開発公社及び地権者の下手隆弘，松本五六，尾田繁人，尾田節郎，野地正義の各氏や地元の方々から多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第です。

（松村）

第II章　位置と環境

壬生の花田植や有田神楽など芸北地域の伝統的な民俗芸能を今に伝える千代田町は，広島市の北方約 50 km に位置する。周囲を 600～800 m の中国山地に囲まれているとはいえ，古くから山陽（安芸国）と山陰（石見国）を結ぶ交通の要衝である。町の中央を流れる江の川（可愛川）・志路原川・冠川などによって，芸北の山間地の中では比較的開けた沖積地がある。また，これらの河川やこれに注ぎ込む小河川沿い及び小支谷では水田が営まれ，豊かな穀倉地帯となっている。町の中心地はこれらの河川が合流する有田・壬生地区で，市街地付近に中国自動車道千代田インターチェンジがある。また，中国横断自動車道（広島～浜田線）の建設も進行中で，従来の農村型の町から，両高速自動車道路の結節点としての交通条件を生かした内陸工業型の町へと変貌しつつある。同時に伝統文化や生活文化の保存・伝承に努め，文化の香り高い特色ある町づくりが進められている。

町内の埋蔵文化財は旧石器時代から歴史時代の遺跡が約 300 か所確認されている。その大部分は古墳で，旧石器時代と縄文時代の遺跡・遺物は少なく断片的資料が得られているにすぎない。以下，本遺跡と同時代の弥生時代・古墳時代の遺跡を中心に歴史的環境について概観することとする。

この地に旧石器時代の人々が生活していたことは，昭和 54(1979) 年に調査された歳ノ神遺跡群[1]や昭和 63(1988) 年調査の壬生西谷遺跡[2]から当該期の遺物が出土していることから推定されるが，その実態については不明である。また，縄文時代の遺跡については，本町と北接する大朝町にまたがる河原山遺跡[3]で早期末から後期頃の土器や，後期の石鏃，石錐，石斧等比較的まとまった資料が出土している他，遺物の単独出土が数例ある程度で旧石器時代同様その実態は明らかでない。

弥生時代になると遺跡数も次第に増加し，近年いくつかの発掘調査が行われ多くの資料が得られつつある。前期の遺跡としては，この度調査の本郷遺跡のほか，青木原遺跡[4]，川井遺跡[5]，塚迫遺跡群[6]などがある。青木原遺跡は冠川の沖積地に面した西向きの低丘陵緩斜面に立地し，平面形が円形の径 5 m の竪穴住居跡と土器棺墓の可能性のある径 1 m 前後の土壙が検出されている。川井遺跡は江の川沿いに広がる平地より一段高い場所に立地する集落跡と考えられ，前期後半の壺形土器が出土している。塚迫遺跡群は志路原川と冠川の合流地点にほど近い低丘陵上に立地する墳墓で，土壙墓 8 基，土器棺墓 6 基が確認されており，埋葬儀礼に伴う土器も出土している。これらの遺跡から当地域では，弥生時代前期には江の川や志路原川などの河川沿いの沖積地を生産基盤として，低丘陵や河岸段丘上

に生活を営む小単位の集団が存在したと考えられる。

後期の遺跡のうち集落跡の発掘調査例としては歳ノ神遺跡群の集落跡，三段田遺跡[7]・この度調査の焼け遺跡などがある。なかでも歳ノ神遺跡群では，墳墓群の造営に関係すると思われる同時期の竪穴住居跡が西隣の丘陵先端付近に数軒検出されている。また，遺物の散布地・包含層として三日市不動遺跡，念城遺跡などが知られている。遺跡の分布からすると，当該期の集落跡は概して小河川によって形成された谷奥に近い低丘陵上などに立地する場合が多い。これは大河川沿いの沖積地の他，水量の安定した谷奥や小河川沿いの低地が可耕地として開かれていったことと関わるのであろう。

一方，当該期の墳墓は歳ノ神遺跡群の墳墓群，中出勝負峠墳墓群[8]の第2・3号墓，壬生西谷遺跡の墳墓群などがある。歳ノ神遺跡群の墳墓群は2基の四隅突出型墳墓を含む多数の石棺や土壙からなり，なかでも四隅突出型墳墓は芸北地域で初めての確認である。また，中出勝負峠墳墓群の第2・3号墓はそれぞれ複数の埋葬施設をもつ区画墓である。壬生西谷遺跡からは，多様な埋葬施設からなる34基の墳墓が確認され，そのうちの33号墓からは後漢時代前半の「長宜子孫」銘の内行花文鏡1面，鉄鏃1本が出土している。これらの遺跡は当地域における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての墓制の変遷や社会的・政治的動向を考えるうえで学術的にも重要である。

古墳時代になると，古墳を中心に遺跡数が急激に増加するが集落跡として確認された遺跡は少なく，発掘調査された例も城が谷遺跡[9]，青木原遺跡，上日神谷遺跡[10]の3例にすぎない。城が谷遺跡は支谷の谷頭を望む低丘陵の緩斜面に立地しており，6世紀後半頃の一辺約5mの方形の竪穴住居跡が検出されている。青木原遺跡は冠川の比較的広い沖積地を望み，6世紀後半から7世紀初頭の竪穴住居跡4軒と住居跡状遺構2軒が検出されている。住居跡はいずれも平面形が隅丸方形で，一辺4m前後，主柱穴が4本である。このうち2軒はカマドを付設している。このほか集落跡の可能性がある遺跡には後山遺跡，堂の後1・2号遺跡，刈又1・2号遺跡，後有田遺跡[11]などがある。これら遺跡の大半が狭小な生産基盤である水田や小規模な氾濫原を望む位置にあることから，弥生時代に始まる農耕集落の山間地域への進出がさらに拡大していったことを窺わせる。

古墳は，現在約200基が確認されており，これらは木棺・箱形石棺・竪穴式石室を内部主体とするものと，6世紀後半以降の横穴式石室を内部主体とするものに大別される。前者には，古墳出現期の組合式木棺から連弧文昭明鏡が出土した中出勝負峠古墳群の第8号古墳，箱形石棺から鏡・管玉・鉄剣などが出土した国藤第1号墳[12]，石室の下段を箱形石棺状に組む特異な竪穴式石室の古保利第44号古墳[13]のほか，塚迫第1・2号古墳，金子第2

号古墳[10]などがある。後者の横穴式石室を内部主体とするものには，石室床面の一部に須恵器の杯類が伏せた状態で出土した有岡谷第1号古墳[15]，須恵器・鉄刀・鉄鏃の他に管玉・切子玉などの多様な副葬品が出土した尾原古墳[16]，鳥形の装飾須恵器が出土した石塚第2号古墳[17]などがある。

律令政治の展開以降は，安芸国山県郡五郷のうちの三郷が町内に比定され，古代の山県郡衙も「古保利」の地に推定されている。また，中世の遺跡では城跡や寺跡・古墓などが知られているが，これらの時期の遺跡の実態は不明である。　　(岩井)

註

(1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「歳ノ神遺跡群」『歳ノ神遺跡群　中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集　昭和61(1986)年

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『壬生西谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集　平成元(1989)年

(3) 小都隆 「山県郡大朝町河原山遺跡について」『芸備』第2集　昭和49(1974)年

(4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『青木原遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集　昭和61(1986)年

(5) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』 昭和51(1976)年

(6) 広島県教育委員会 「塚迫遺跡群」『中国縦貫自道車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57(1982)年

(7) 昭和63年度に千代田町教育委員会が調査を実施した。

(8) 註(1) 「中出勝負峠墳墓群」

(9) 広島県教育委員会 『城が谷遺跡群発掘調査報告』 昭和48(1973)年

(10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『上日神谷遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集　昭和60(1985)年

(11) 広島県教育委員会の埋蔵文化財基本台帳による。

(12) 名田富太郎 『広島県山県郡史の研究』 昭和28(1953)年

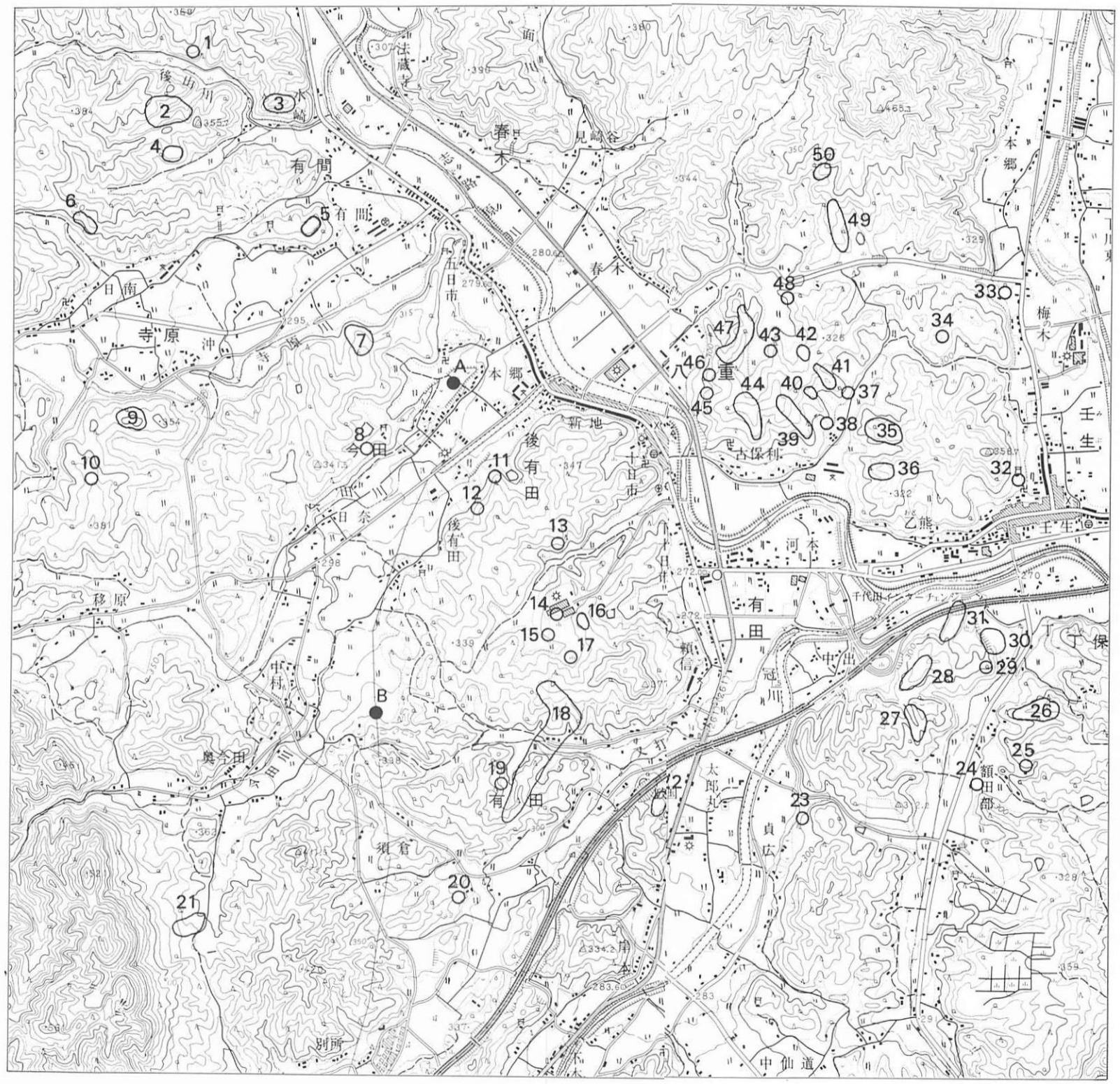
(13) 註(5)に同じ。

(14) 註(6) 「金子古墳群」

(15) 註(9)に同じ。

(16) 広島県千代田町教育委員会 『尾原古墳発掘調査報告』 昭和53(1978)年

(17) 広島県教育委員会 『石塚古墳発掘調査概報』 昭和49(1974)年



A　本郷遺跡
B　焼け遺跡
1　後山遺跡
2　悪谷古墳群
3　地蔵山古墳群
4　矢吾谷古墳群
5　宮城遺跡
6　後富士懸古墳群
7　向山古墳群
8　三日市不動遺跡
9　上が平古墳群
10　歳田平古墳群
11　後有田遺跡
12　後有田第１号古墳
13　雉子ヶ谷古墳
14　城が谷遺跡（消滅）
15　有岡谷第１号古墳（消滅）
16　城が谷古墳群（一部保存）
17　有岡谷遺跡
18　政国古墳群
19　念城遺跡
20　須倉古墳
21　奥今田古墳群
22　須倉政国古墳群
23　青木原遺跡（消滅）
24　三段田遺跡
25　天津古墳
26　国藤古墳群
27　歳ノ神遺跡群（一部保存）
28　中出勝負峠墳墓群（一部保存）
29　大国古墳
30　金子古墳群（消滅）
31　塚迫遺跡群（消滅）
32　壬生神社遺跡
33　梅木遺跡
34　壬生西谷遺跡（一部保存）
35　背子山古墳群
36　飛石古墳群
37　刈又１号遺跡
38　刈又２号遺跡
39　古保利古墳群岡田支群
40　古保利古墳群鍛冶ヶ市支群
41　古保利古墳群桧木支群
42　古保利古墳群堂の後支群
43　堂の後２号遺跡
44　古保利古墳群薬師堂裏支群
45　古保利野師西古墳
46　野師古墳
47　古保利古墳群野師支群
48　堂の後１号遺跡
49　すくもや古墳群
50　恩ヶ迫古墳群

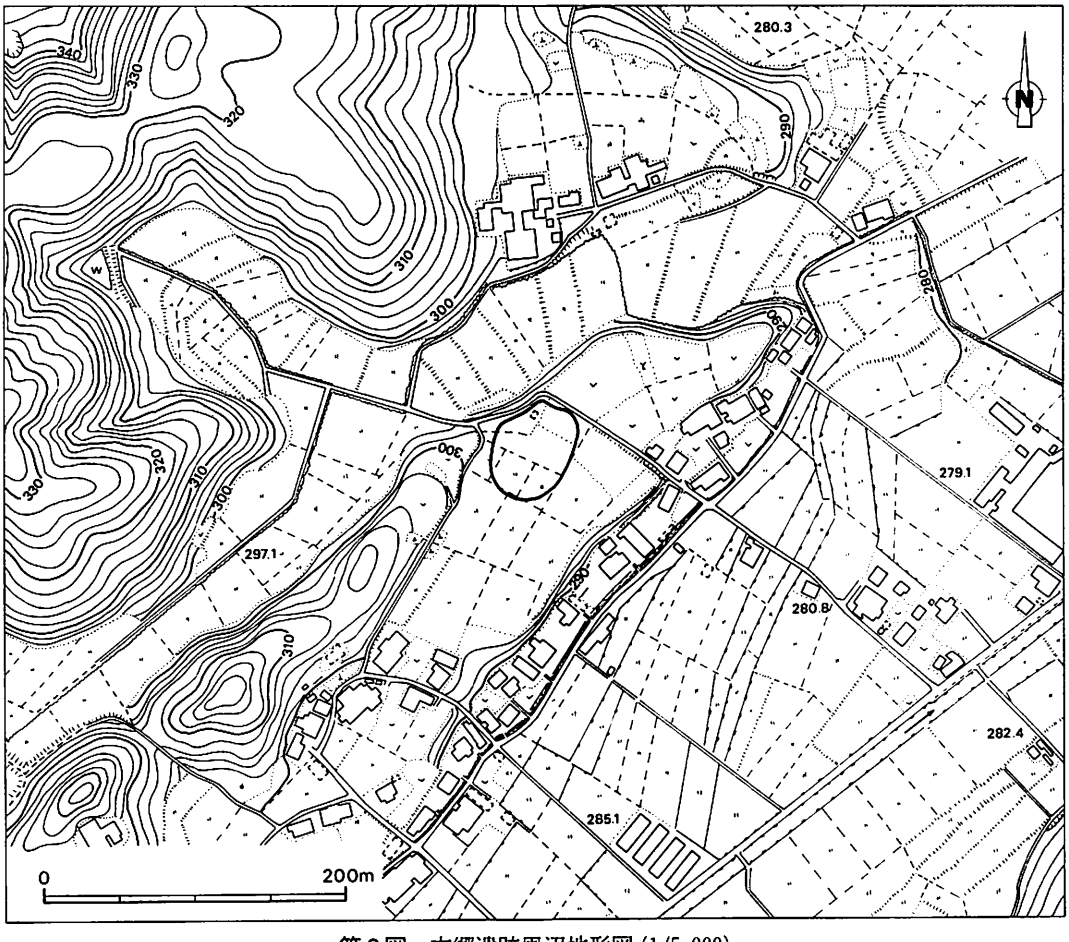
第１図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）

第Ⅲ章　本郷遺跡の調査

1　遺跡の立地と現状

本郷遺跡は，山県郡千代田町大字今田字本郷 3555 番地ほかに所在し，このたび調査を実施した焼け遺跡の北方約 1.5 km に位置している。本遺跡は，志路原川に注ぐ今田川と寺原川に挟まれた北東に延びる低丘陵群（標高 340～380 m）の一つ，今田川によって形成された沖積地をのぞむ南西から北東に延びる丘陵上（標高約 297 m）のなだらかな東側斜面に立地している。遺跡の北側は，丘陵に沿って細長く延びた谷水田がよく発達し，周辺の水田との比高は 10～20 m である。

遺跡及び遺跡周辺は，過去，耕地整理などによって客土や削平を受け，現在は段状の牧草地・水田となっており，地形は著しく改変されている。



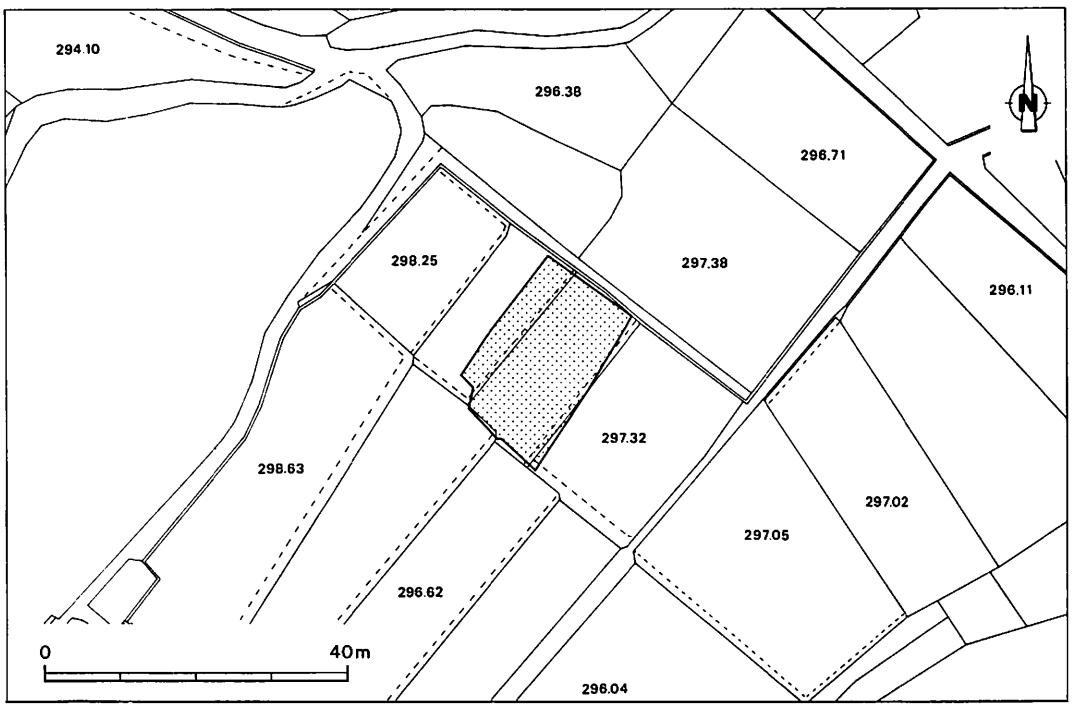
第２図　本郷遺跡周辺地形図 (1/5,000)

2　調査の概要

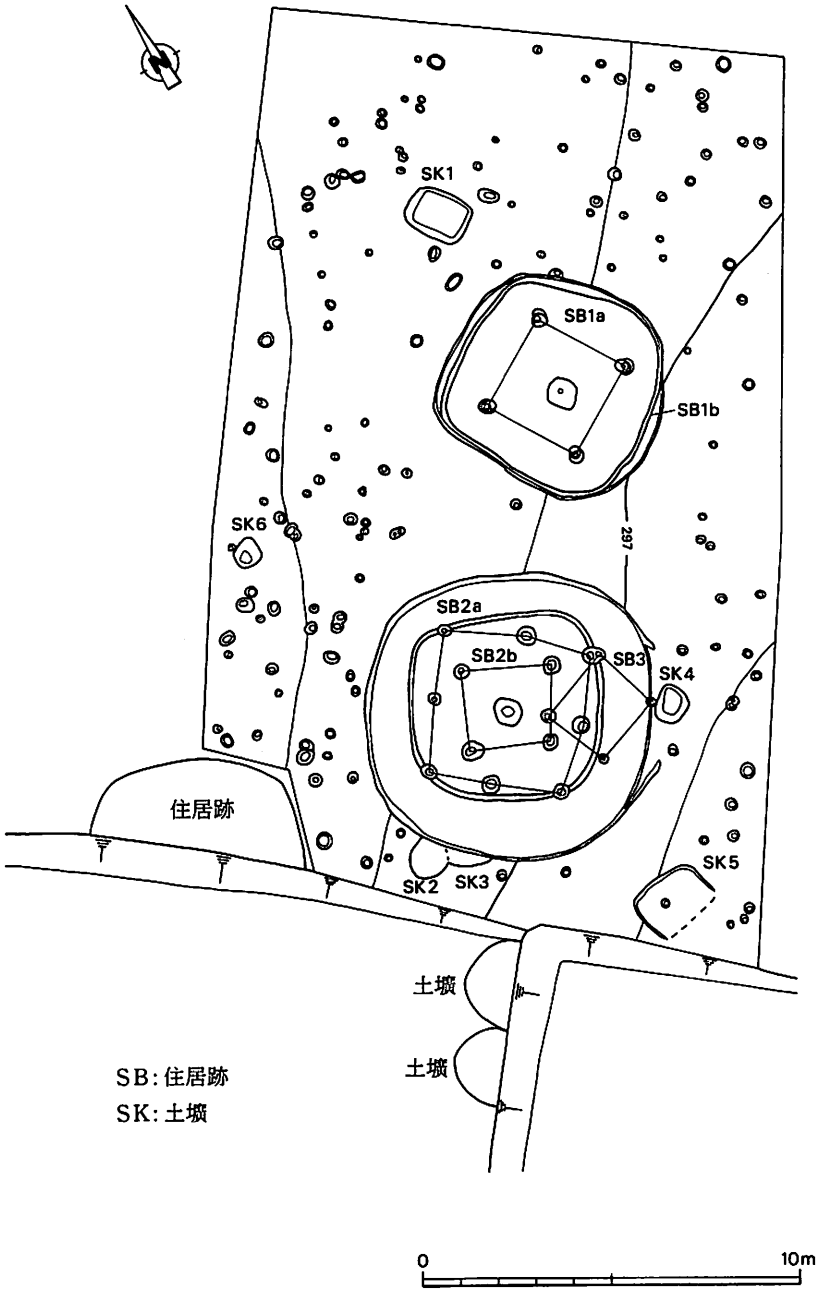
調査の対象範囲は，試掘調査の結果をもとに，道路部分に限定して行った。調査は，まず厚さ 20～40 cm の耕作土・客土を排除し，遺構を検出・確認していったが，南西側では遺構が全く存在しなかった。このため，その後の作業は調査区北端について行った。

調査の結果，弥生時代前期の土壙 3 基，古墳時代前期の竪穴住居跡 4 軒，中期の竪穴住居跡 1 軒，土壙 4 基，時期不明の柱穴群などを検出した。弥生時代前期の土壙 SK 2・3 は，袋状竪穴と呼ばれる貯蔵穴である。SB 1 は隅丸長方形の土壙で，土器が多量に出土し，一括投棄の状況を示している。遺物は土壙から壺・甕形土器などが出土している。古墳時代前期の竪穴住居跡は，建て替えが見られる。SB 1a は SB 1b の南・北側を拡張しており，柱穴・中央土壙は SB 1b と同位置にある。SB 2a は SB 2b の四方を大きく拡張し，床面積は SB 2b の約 2 倍となる。SB 3 は時期的に上記の竪穴住居跡より新しく，SB 2a を掘り込んで造り，平面形は方形である。遺物は各住居跡から土師器（壺・甕・高杯・鉢・甑形土器），須恵器（杯身・杯蓋），土玉，砥石，磨石，敲石などが出土している。

なお，調査区の西・南側で，弥生時代前期の袋状竪穴 2 基及び古墳時代前期の竪穴住居跡 1 軒を確認した。その部分は水田で盛土になるため，調査は行わなかった。



第 3 図　本郷遺跡調査区位置図 (1/1,000)　アミ目は調査区のうち遺構を確認した範囲



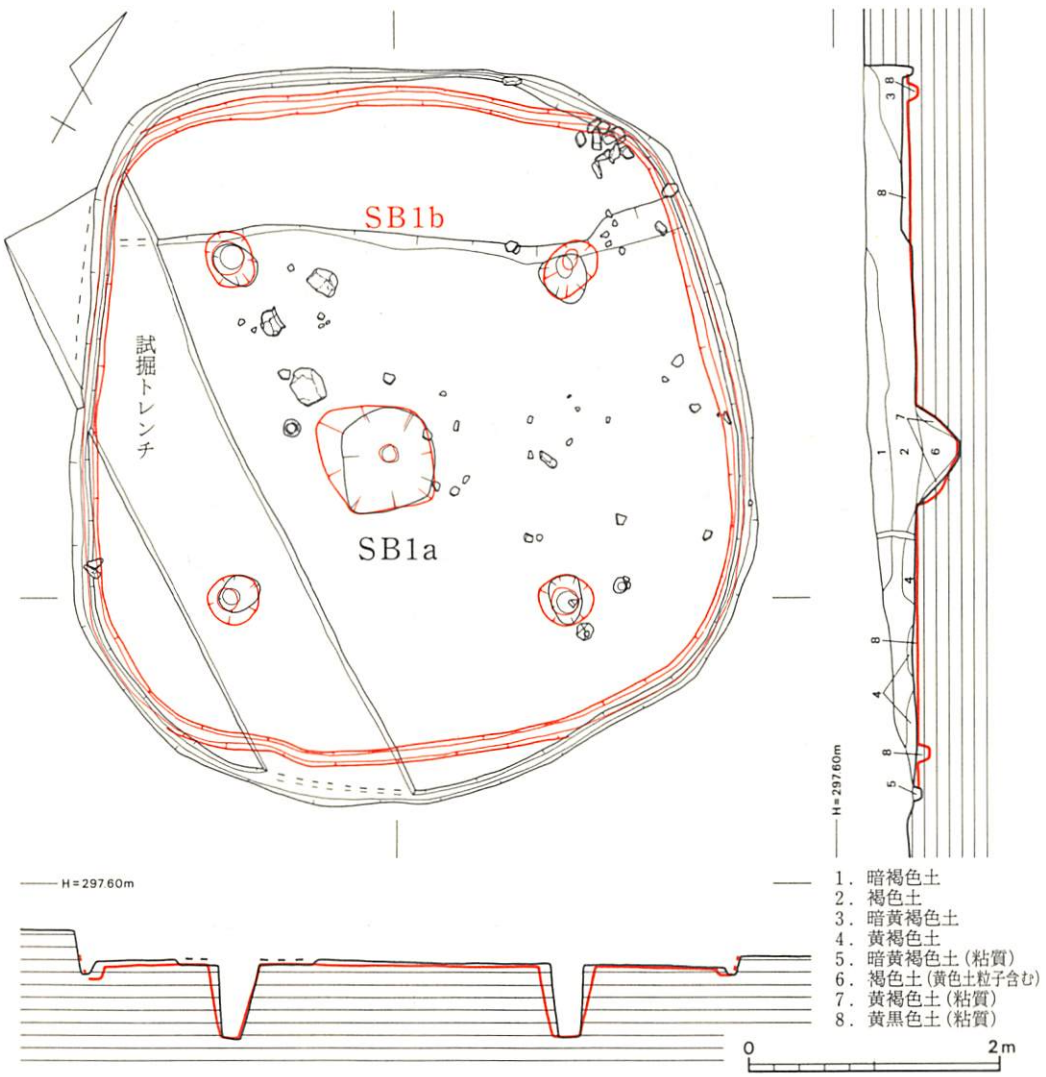
第4図　本郷遺跡遺構配置図 (1/200)

3　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

SB1a・1b（第5図）

SB1aはSB2aの北東約2mに位置し，SB1bの南・北側を若干拡張し，貼床して造っている。平面形は歪な隅丸方形を呈し，規模は5.7×5.5mである。壁は北側の最も高い所で30cmあり，壁面下には壁溝がめぐる。主柱穴は4個で，4本柱構造になる。柱穴の規模は径20×40cm，深さ50～60cmである。床面の約1/3にあたる北側は，黄黒色粘質土による高さ5～9cmの低いベッド状の段が伴う。床面中央部には長さ80cm，幅70cm，深



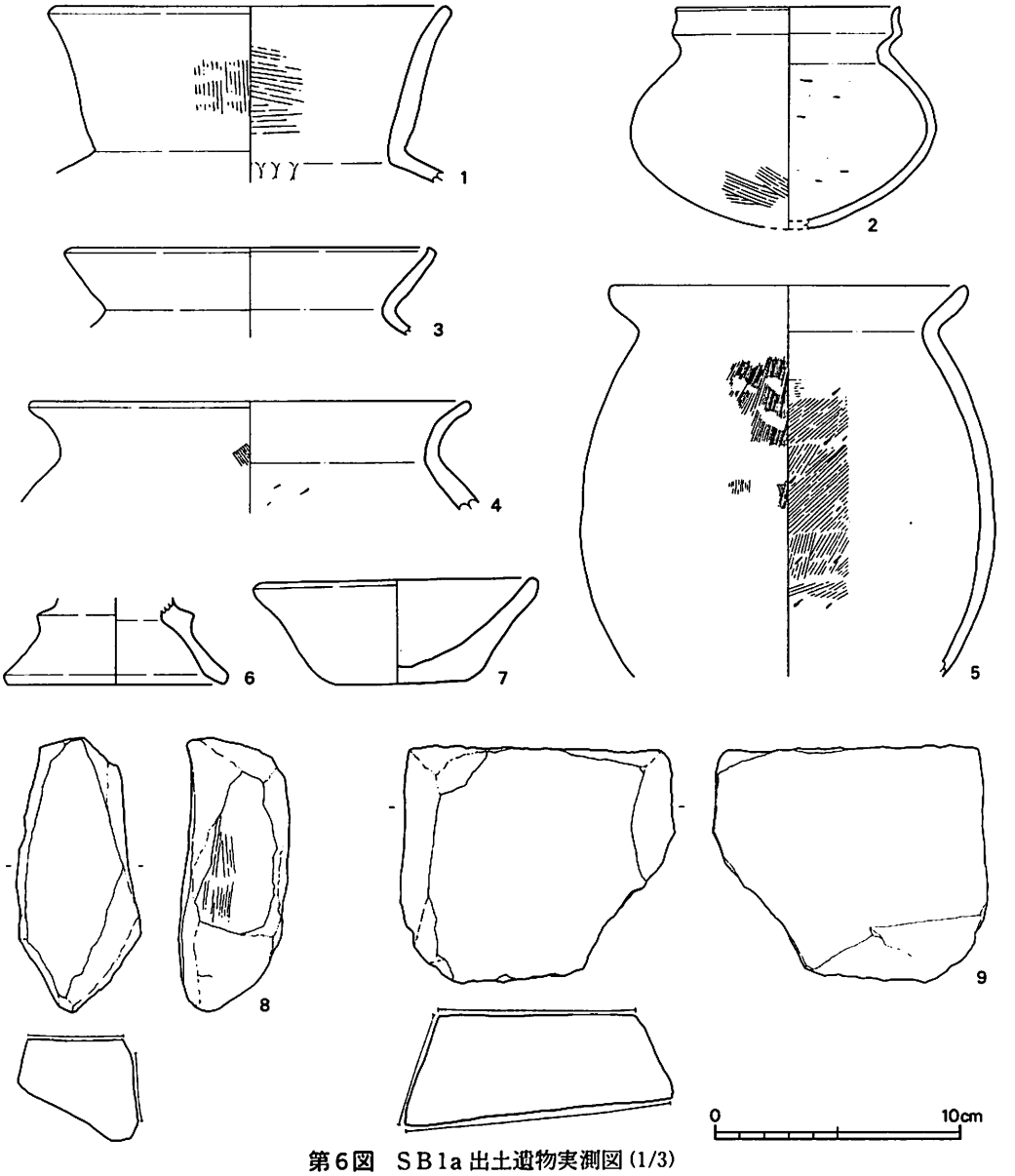
第5図　SB1a・1b実測図（1/60）

さ 41 cm の不定形土壙がある。

ＳＢ１b は基本的にＳＢ１a と平面形，柱穴及び中央土壙の位置は同じである。規模は現存で 5.4×5.2 m である。遺物は少量で，ほとんどＳＢ１a から出土し，土師器（壺・甕・高杯・鉢形土器），砥石などである。遺物のうち４・７～９は床面直上，その他は覆土中からの出土である。また，床面北側の隅部分で礫が集中して出土している。

出土遺物（第６図）

１は復元口径 15.9 cm，壺形土器である。口縁部は直線的に外傾し，端部付近で外方へひ



第６図　ＳＢ１a 出土遺物実測図 (1/3)

らく。口縁部内外面の調整はハケメののちヨコナデである。2～5は甕形土器である。2はほぼ完形の二重口縁を有する土器で，口径9.1cm，器高9.0cm，胴部最大径12.5cmである。口縁部は擬口縁から内傾して外方へ拡がり，端部は尖り気味に終わる。胴はよく張り胴部中位に最大径がある。3は復元口径14.5cm，口縁端部は内厚して稜を持つ。4は復元口径17.8cmである。口縁部は端部付近でさらに外方に拡がる。5は復元口径14.4cm，短い口縁部をもち，胴はあまり張らない形態である。胴部外面の調整は細かいハケメ，内面はヘラケズリののちハケメを施す。6は高杯形土器で，復元脚径8.8cmである。7は口径11.0cm，器高4.3cm，底径5.4cm，完形の鉢形土器である。厚手のつくりで，調整はナデで仕上げる。8は軟質の石材を素材とする砥石である。平面形は舟形を呈し，作業面は表・側面の二面で，側面に条痕が明瞭に残る。長さ11.1cm，幅5.0cm，重量283gである。9は方形の砥石で，断面は台形を呈する。作業面は表・裏・側面の三面である。長さ9.7cm，幅11.0cm，重量760gである。

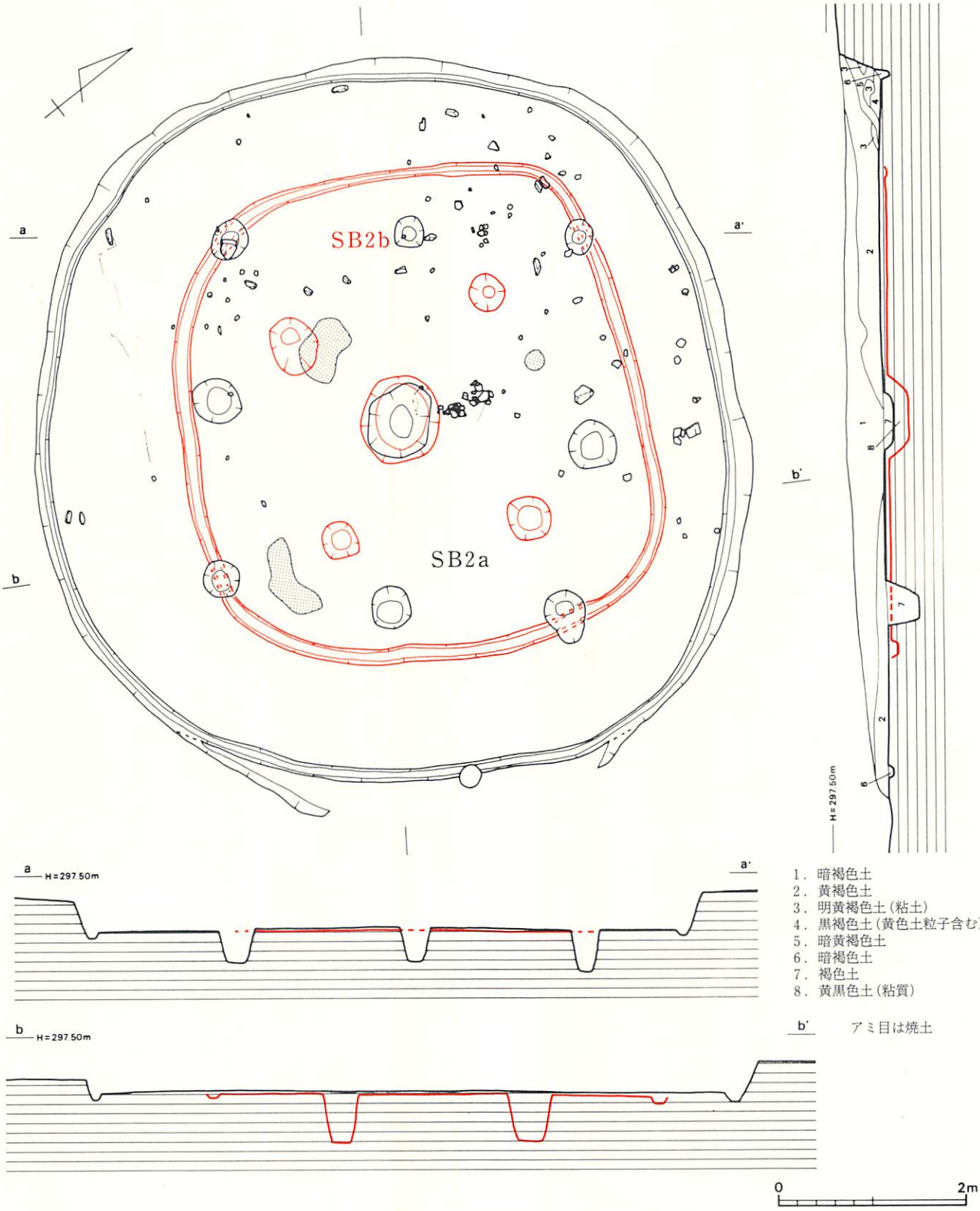
SB2a・2b（第7図）

SB2aはSB1aの南西約2mに位置し，住居跡の東側はSB3によって切られている。西側はSK2・3を切っている。SB2aはSB2bの四方を拡張，貼床して造り，床面積はSB2bの約2倍となる。平面形は円形に近い隅丸方形を呈し，規模は7.6×7.5mと大型である。壁は西側の最も高い所で43cmあり，壁面下には壁溝がめぐる。主柱穴は四壁面に平行する配置で，ほぼ等間隔に8個並び，8本柱構造となる。柱穴の規模は径30～50cm，深さ26～42cmである。床面中央部には径80×70cm，深さ25cmの楕円形土壙がある。また，床面の2箇所で焼土を検出した。

SB2bの平面形はSB1a・1bと同様，歪な隅丸方形である。規模は現存5.2×4.9m，幅10～20cmの壁溝がめぐる。主柱穴は4個で，4本柱構造となる。柱穴の規模は径36～60cm，深さ46～50cmである。床面中央部には径90×82cm，深さ23cmの楕円形土壙がある。遺物は少量で，ほとんどSB2aから出土し，土師器（甕・高杯形土器）などである。遺物10・14～16は床面直上，その他は覆土中からの出土である。

出土遺物（第8図）

10～16は甕形土器である。10は復元口径16.6cm，二重口縁を有する土器である。口縁部は擬口縁から湾曲して外方へ拡がり，端部は矩形を呈する。11・12は「く」字状に外反する口頸部をもち，端部は丸く終わる。11は復元口径13.2cm，12は復元口径13.6cmである。13は復元口径21.5cm，頸の締まらない形態である。口頸部は緩やかに外反し，端

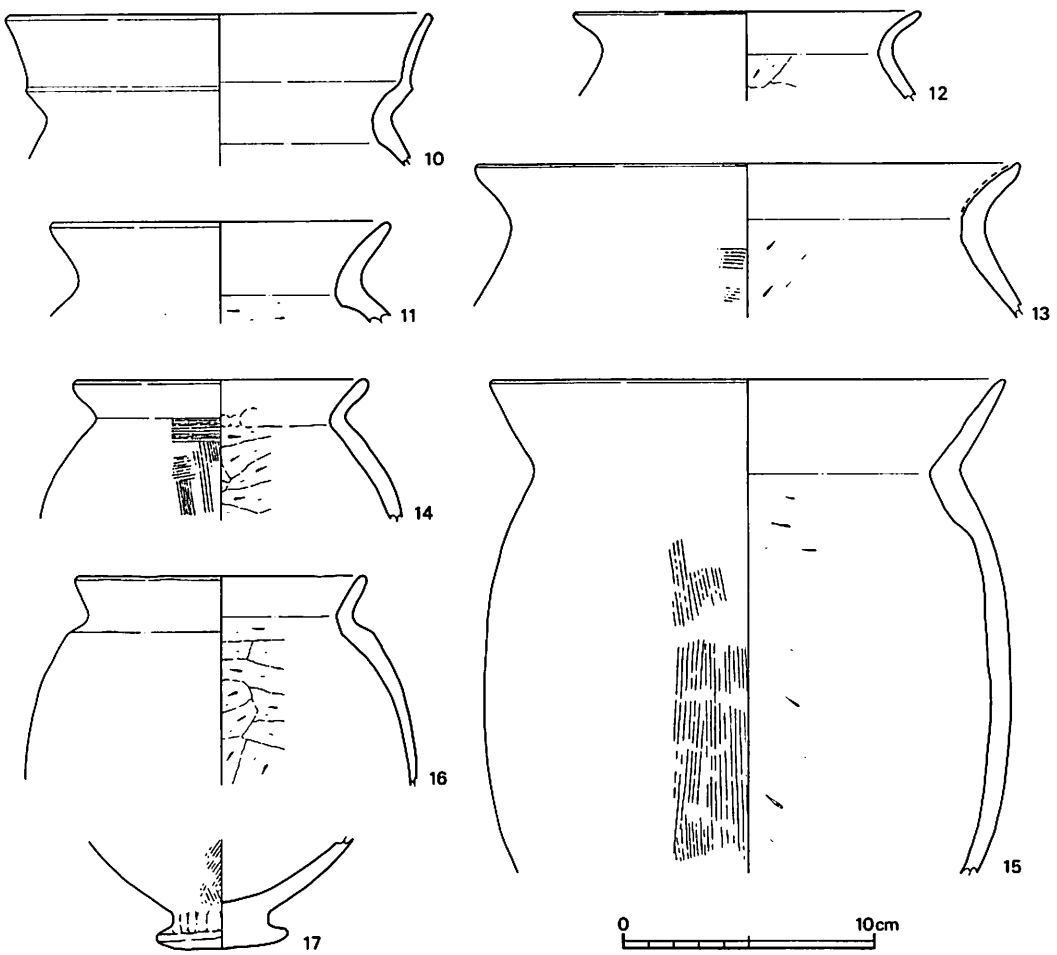


第７図　ＳＢ2a・2b 実測図（1/60）

部は尖り気味に終わる。14 は復元口径 11.4 cm である。口頸部は「く」字状に外反し，端部は丸く終わる。頸部内面に指頭圧痕が残る。15 は復元口径 20.3 cm，胴は張らず長胴の形態である。口縁部は短く直線的に外傾し，端部は尖り気味に終わる。16 は復元口径 11.4 cm で，肩部を有する。口縁部は短く直線的に外傾し，端部は丸く終わる。胴部外面の調整はナデ，胴部内面はヘラケズリである。17 は脚径 5.2 cm，脚台付の鉢形土器である。体部と脚台部の境に指頭圧痕が残る。

SB 3（第 9 図）

SB 3 は SB 2a の東隅から南隅部分に位置し，SB 2a を掘り込んで造っている。SB 2a の床面で検出したため，規模などの詳細は不明である。平面形は現存している東・南側辺及び遺物の出土状況から推定すると方形になり，規模は約 4.5×4.5 m である。主柱穴は

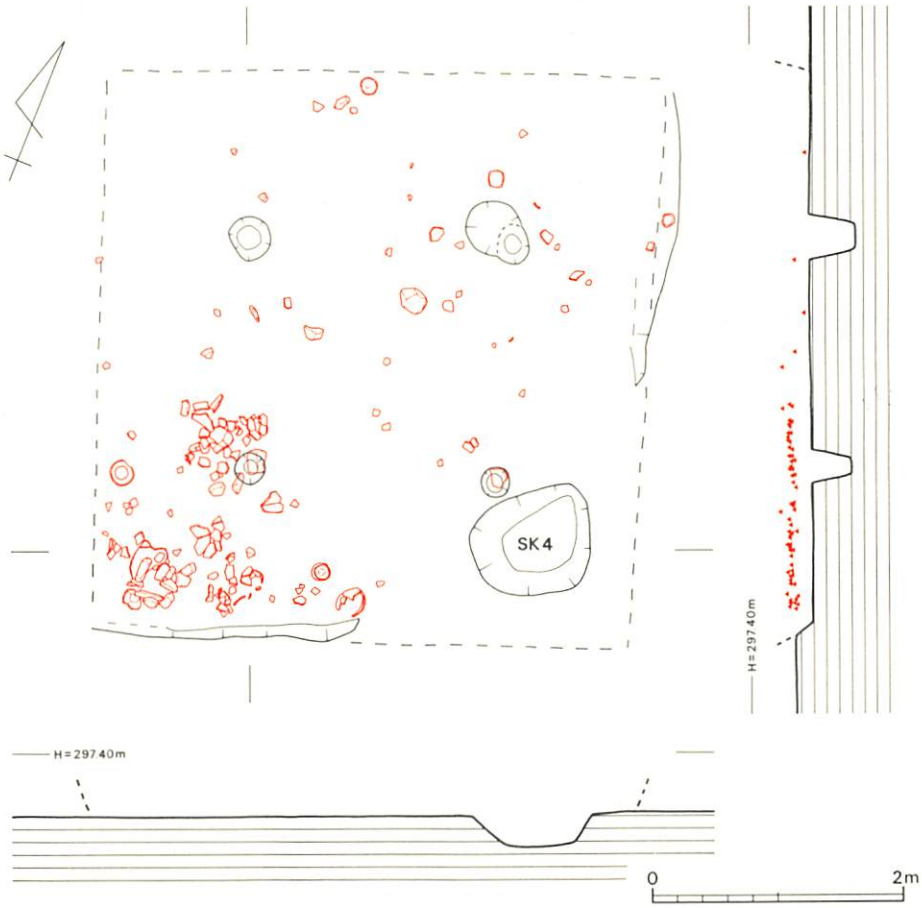


第 8 図　SB 2a 出土遺物実測図 (1/3)

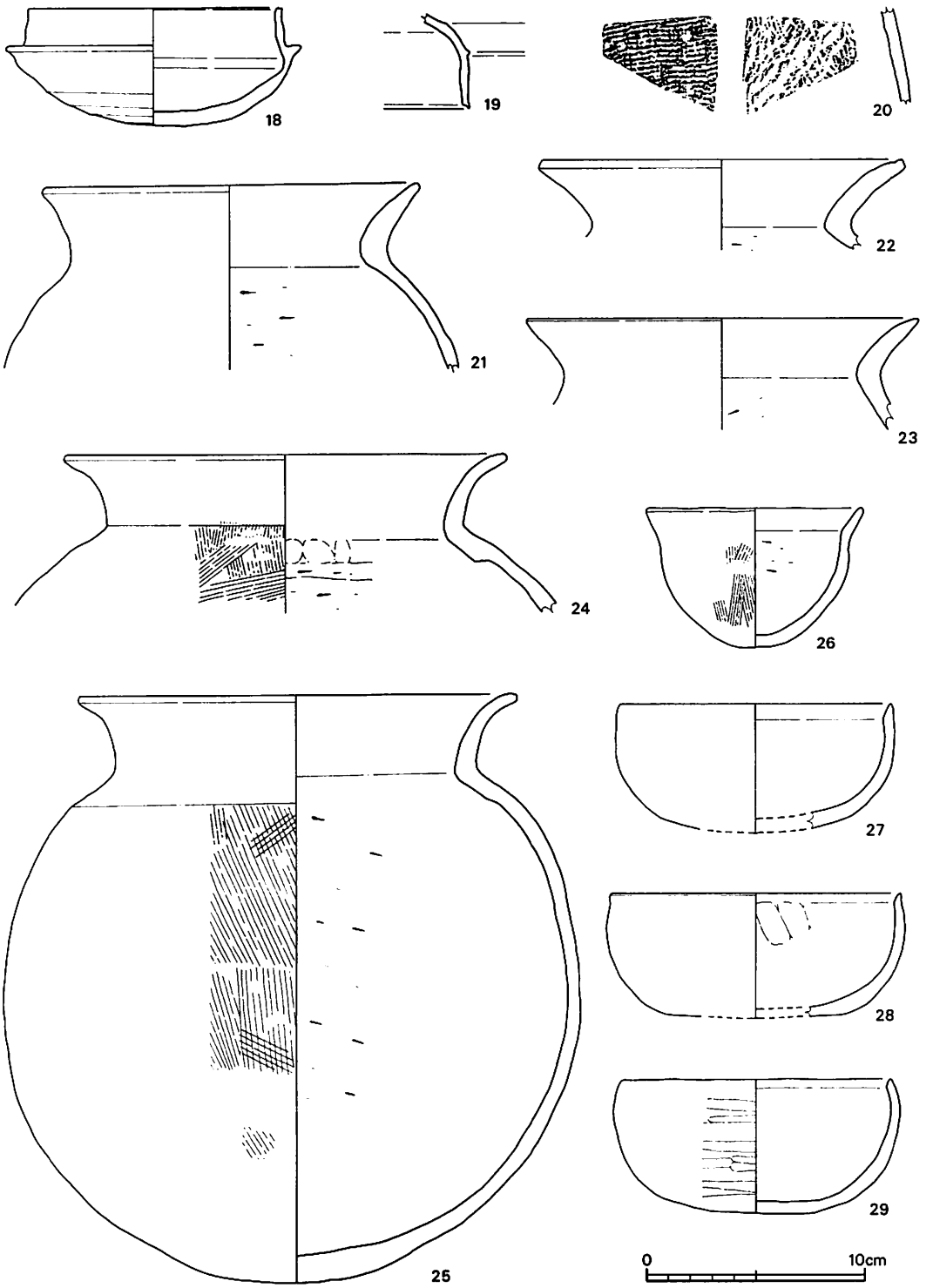
4個で，4本柱構造となる。柱穴の規模は径22～34 cm，深さ32～40 cmである。床面東隅付近では長さ96 cm，幅81 cm，深さ26 cmの不定形土壙（SK 4）を検出したが，住居跡に伴うかどうかは不明である。遺物は比較的多く，須恵器（杯身・杯蓋・甕），土師器（甕・鉢・甑形土器），土玉，敲石，磨石などがあり，ほとんどは床面直上及び床面から20 cm以内，とりわけ住居跡の南隅部分で集中して出土している。

出土遺物（第10・11図）

18～20は須恵器である。18は口径11.2 cm，受部径13.6 cm，器高5.4 cmのほぼ完形の杯身である。立ち上がり端部はナデにより若干窪み，底部は丸みを持つ。19は杯蓋である。口縁部はやや湾曲し，端部はナデにより尖り気味に終わる。口縁部と天井部の境界に稜がめぐる。20は甕の体部片で，外面は平行線状タタキ，内面は同心円状タタキである。21～25は土師器の甕形土器で，「く」字状に外反する口頸部を持つ。21は復元口径17.0 cm，22は復元口径16.4 cm，23は復元口径17.8 cmである。24・25の口頸部は「く」字状に外

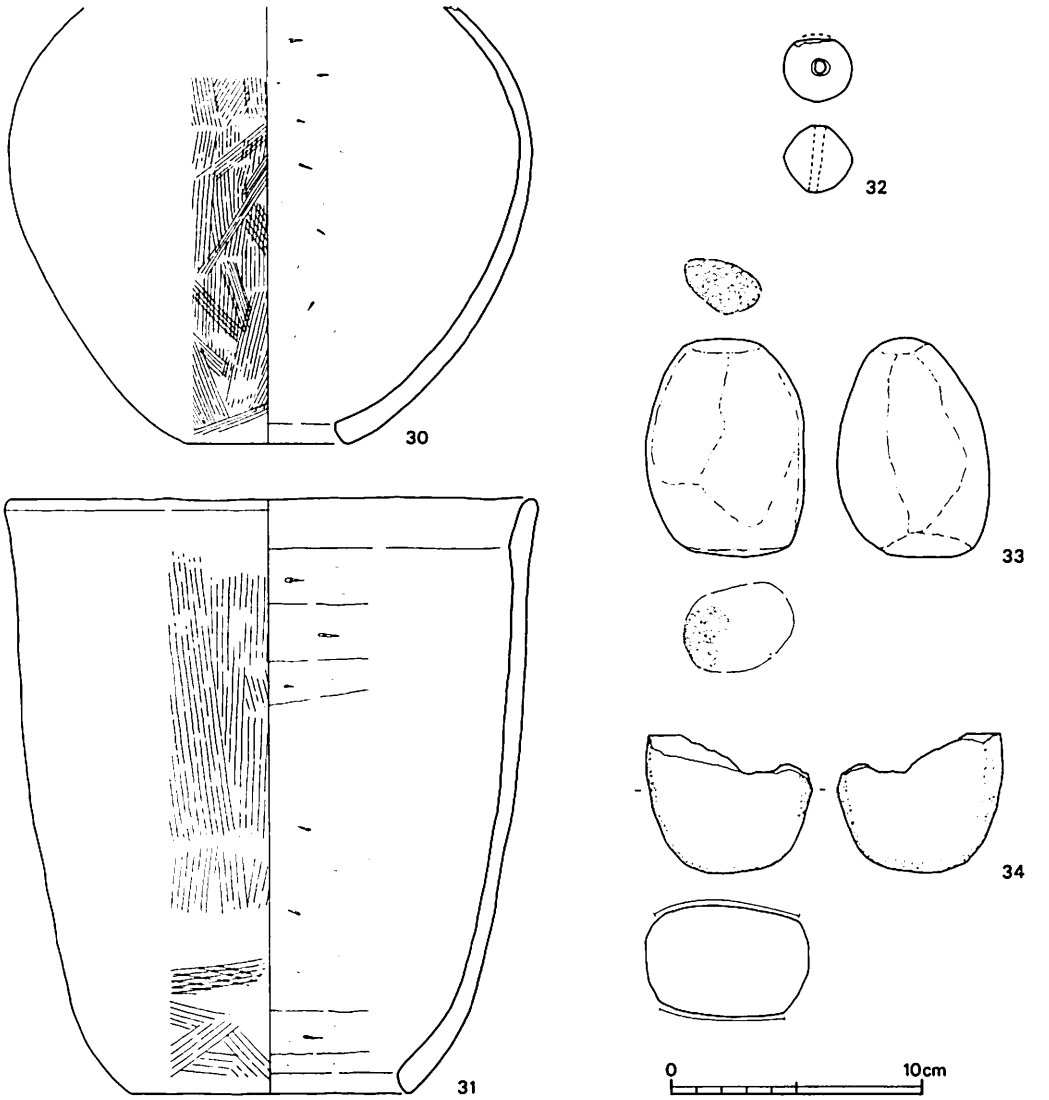


第9図　SB3実測図（1/60）



第10図　ＳＢ３出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

反し，端部付近でさらに外方へ拡がり，端部は丸く終わる。24 は復元口径 20.0 cm，頸部内面に指頭圧痕が残る。25 は完形に近く，口径 20.0 cm，器高 26.6 cm，胴部最大径 26.4 cm である。26～29 は土師器の鉢形土器である。26 はほぼ完形で，口縁部は外方へひらき，胴は張らない。底部は不安定な丸底となる。口径 9.7 cm，器高 6.4 cm である。27～29 は内湾して立ち上がる胴部に，直口ないし内湾する口縁部を持ち椀状となる。口縁端部は尖り気味に終わり，底部は平底となる。調整は内外面ともナデ，28 は内面に指頭圧痕が残る。27 は復元口径 12.4 cm，器高 5.9 cm，28 は復元口径 13.3 cm，器高 5.7 cm，29 は完形で，口径 12.3 cm，器高 6.1 cm である。30・31 は土師器の把手の付かない甑である。胴部外面



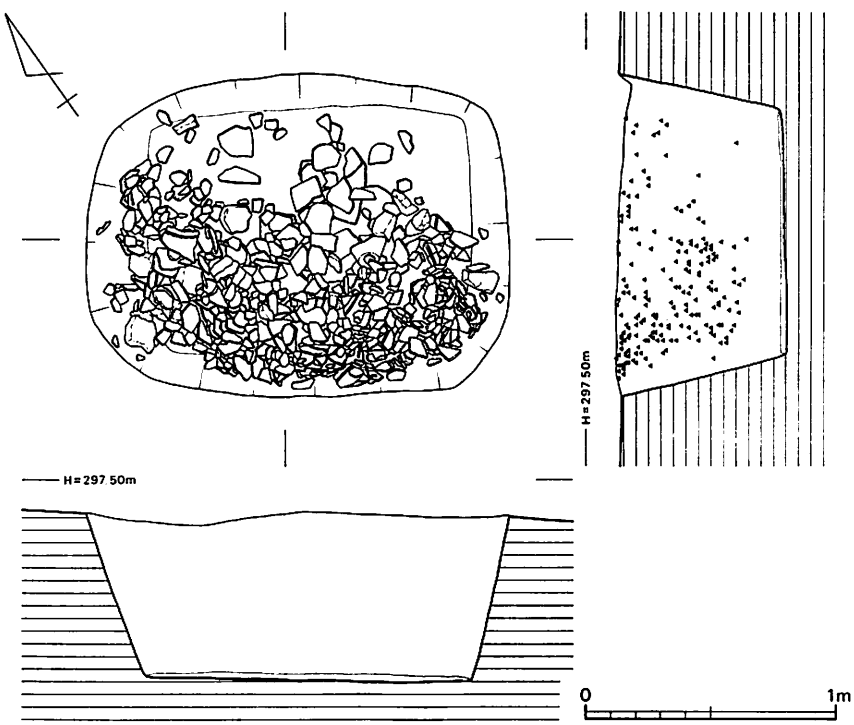
第 11 図　ＳＢ３出土遺物実測図 II (1/3)

の調整はハケメ，胴部内面はケズリである。30 は体部は甕形土器と同様の器形を呈し，口縁部を欠損している。底部から内湾しながら立ち上がり最大径は胴部上半にある。底径 6.5 cm，現高 17.2 cm である。31 は復元口径 20.9 cm，底径 11.2 cm，器高 23.5 cm である。底部から内湾して立ち上がり，胴部はやや外傾し直線的に延び口縁部にいたる。32 は土製の玉で，側面及び下端をやや欠損する。長さ 2.6 cm，径 2.7 cm，孔径 0.4 cm，重量 17.5 g である。33 は硬質の石材を素材とする柱状の敲石である。上端に敲打痕，下端に敲打痕及び磨痕を留める。長さ 8.7 cm，幅 6.3 cm，重量 518 g である。34 は比較的軟質の石材を素材とする楕円形の磨石で，約 1/2 を欠損している。作業面は表裏二面で，側面に敲打痕を留める。現存長 5.5 cm，幅 6.6 cm，重量 229 g である。

(2) 土壙

SK1（第 12 図）

SK1 は SB1a の北側約 2 m に位置している。平面形は隅丸長方形で，規模は長さ 1.68 m，幅 1.27 m，深さ 66 cm である。底面は平坦で南西側に向かってやや下がり，横・縦断面はいずれも逆台形である。遺物は多量に出土し，土壙の南西半に偏り，土器片及び礫な



第 12 図　SK1 実測図 (1/30)

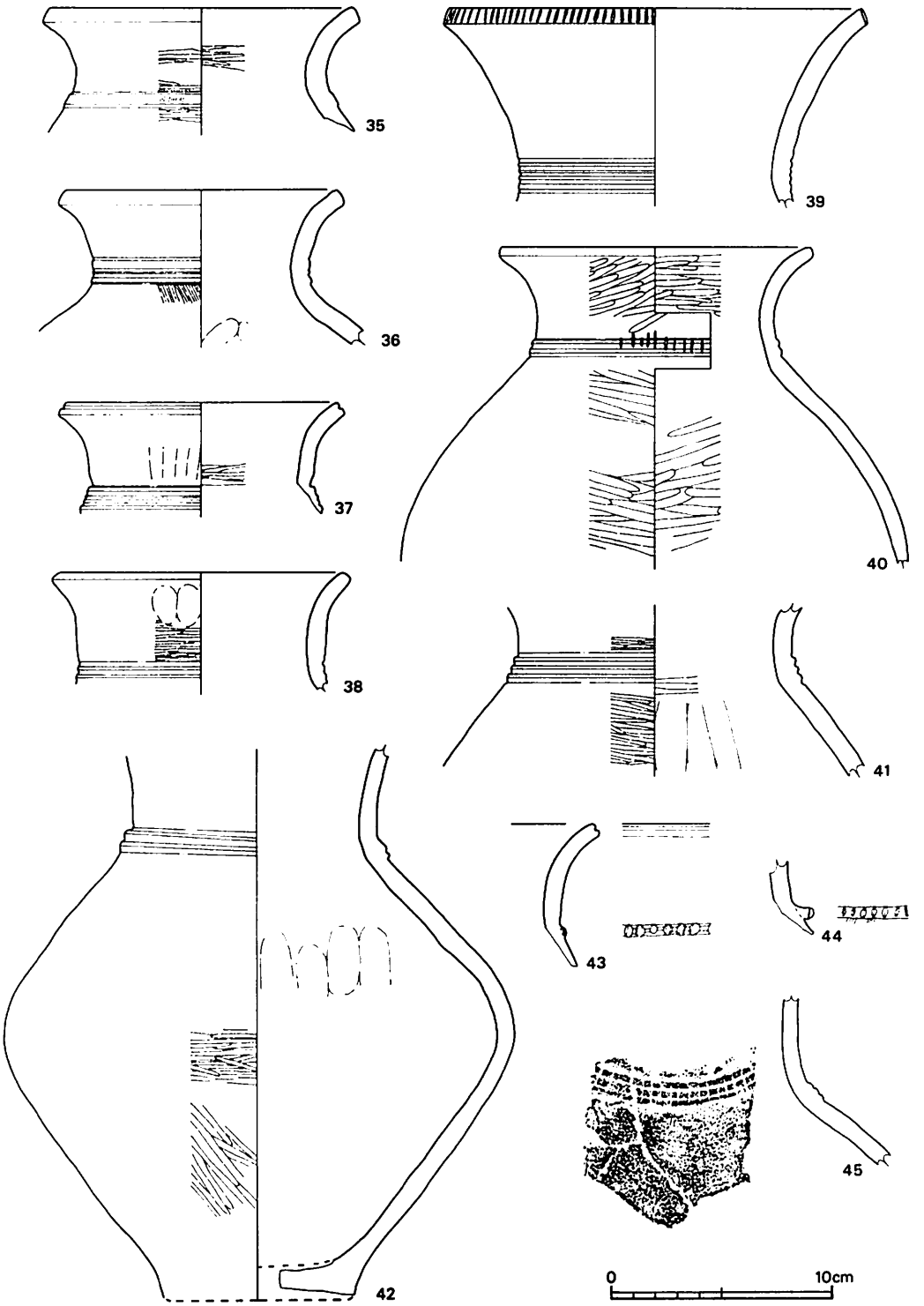
ど一括投棄した状況を示している。遺物には弥生時代前期の壺・甕形土器がある。

出土遺物（第 13～16 図）

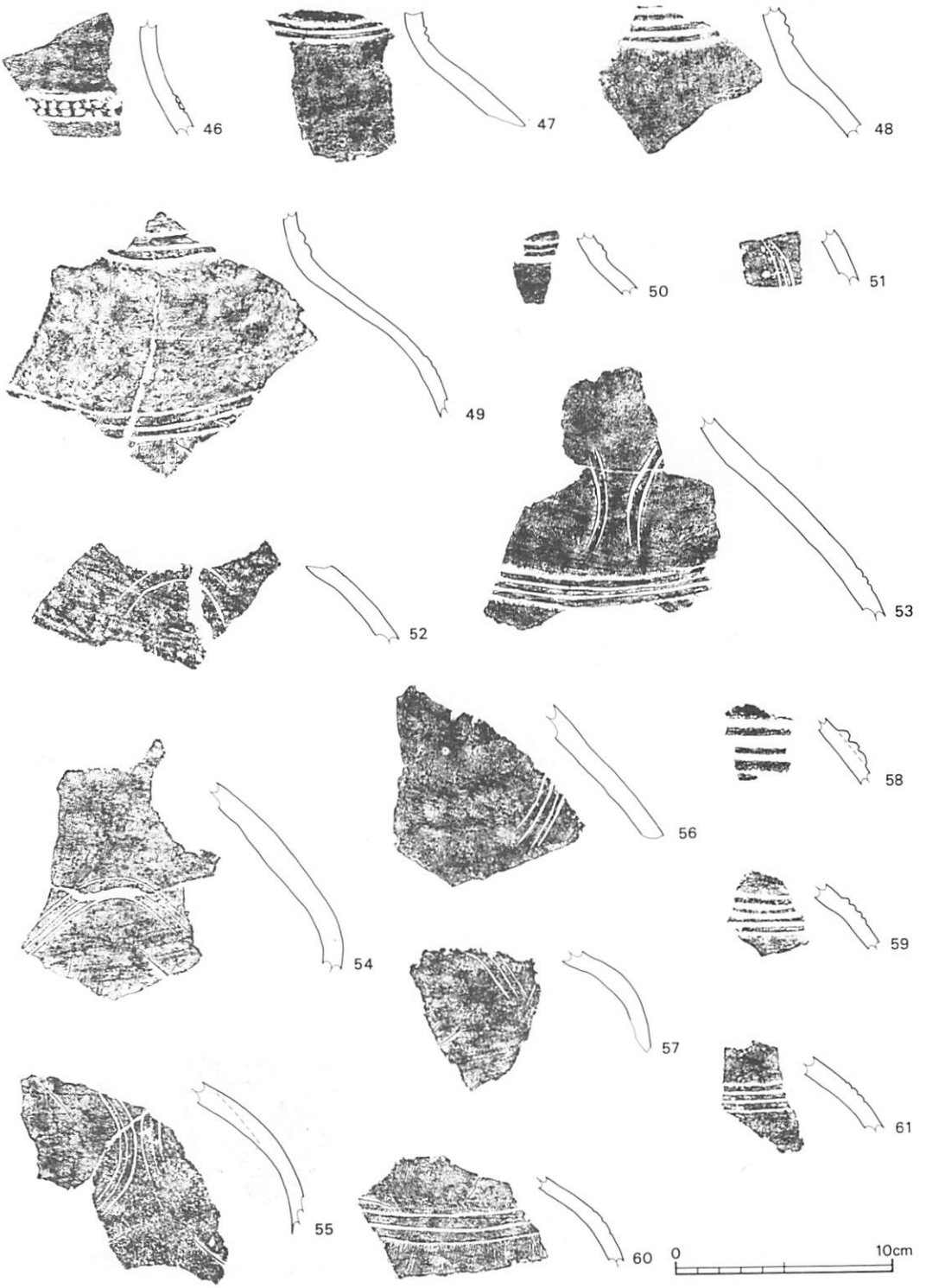
35～73 は壺形土器である。35 は復元口径 13.6 cm で，頸部に削出突帯を持ち，削出突帯付近にハケメが残る。36～42・45～50 は頸部にヘラ描沈線を施す。38 は復元口径 12.8 cm である。37・40・42・48～50 は削出突帯に 1 条ないし 2 条のヘラ描沈線をめぐらす。37 は復元口径 12.3 cm，外面に板状工具痕が残る。40 は復元口径 14.0 cm である。42 は復元胴部最大径 23.1 cm，復元底径 8.6 cm である。内面に指頭圧痕が残る。36・41・46・47 は頸部にヘラ描沈線を施し，その上下部あるいは上・下部の沈線をヘラミガキ・ハケメなどで押さえて削出突帯を表している。36 は復元口径 12.2 cm，削出突帯下位にハケメが残る。37・43 は口縁端部に 1 条のヘラ描沈線をめぐらす。39 は口径 18.7 cm，口縁部は大きく開き，口縁端部に刻目，頸部には 5 条のヘラ描沈線をめぐらす。40・45 は削出突帯に沈線をめぐらせ刻目を加える。43 は頸部に断面が台形の刻目を持つ貼付突帯をめぐらす。46 はヘラ描沈線の間に二段の円形刺突文を施す。50 は黒色のスリップがある。51～70 は胴部の破片である。51～57 は 2・3 ないし 4 条の重弧文を施す。53 は胴部にヘラ描沈線を施し，その上下をハケメにより押さえて削出突帯状とする。その上部に 2 条の「x」字状重弧文を施す。55 も 53 と同様，3 条の「x」字状重弧文を施す。58 は貼付突帯に 2 条の沈線をめぐらす。59～63・66 はヘラ描沈線を施し，その上下部の沈線をヘラミガキ・ハケメなどで押さえて低い削出突帯状とする。62 は 4 条のヘラ描沈線に縦方向の沈線を加える。60 は 1 条，61・63 は 2 条，59 は 3 条，66 は 6 条のヘラ描沈線をめぐらす。64・65・67～69 はヘラ描沈線のみで，68 は 1 条，65 は 4 条，64・67・69 は多条化し 6 条である。70 は貼付突帯に二段の刻目を施す。71～73 は大型の壺形土器である。71 は胴部に 6 条のヘラ描沈線をめぐらす。72 は口縁部の内面に断面三角形の貼付突帯をめぐらす。73 は復元口径 57.8 cm，口頸部は「く」字状に外反し，端部に 1 条のヘラ描沈線をめぐらせ刻目を加える。頸部外面下位には 5 条のヘラ描沈線，頸部内面は断面三角形の刻目をもつ貼付突帯をめぐらす。この貼付突帯は途中で口縁端部に向かって屈曲し，屈曲部は 2 箇所になると推定される。

74～78 は甕形土器である。74～76 は胴の膨らむ形態である。74 は緩やかに外反する口頸部を持ち，頸部外面下位は浅い段を残す。75・76 は短く屈曲する口頸部を持つ。74・75 の調整は内外面ともヘラミガキ，76 の外面は粗いハケメである。74 の内面に板状工具痕が残る。77・78 は頸部下位部にヘラ描沈線を施している。77 は 5 条のヘラ描沈線，78 は口縁端部に刻目を加え，頸部下位部に 3 条のヘラ描沈線をめぐらす。

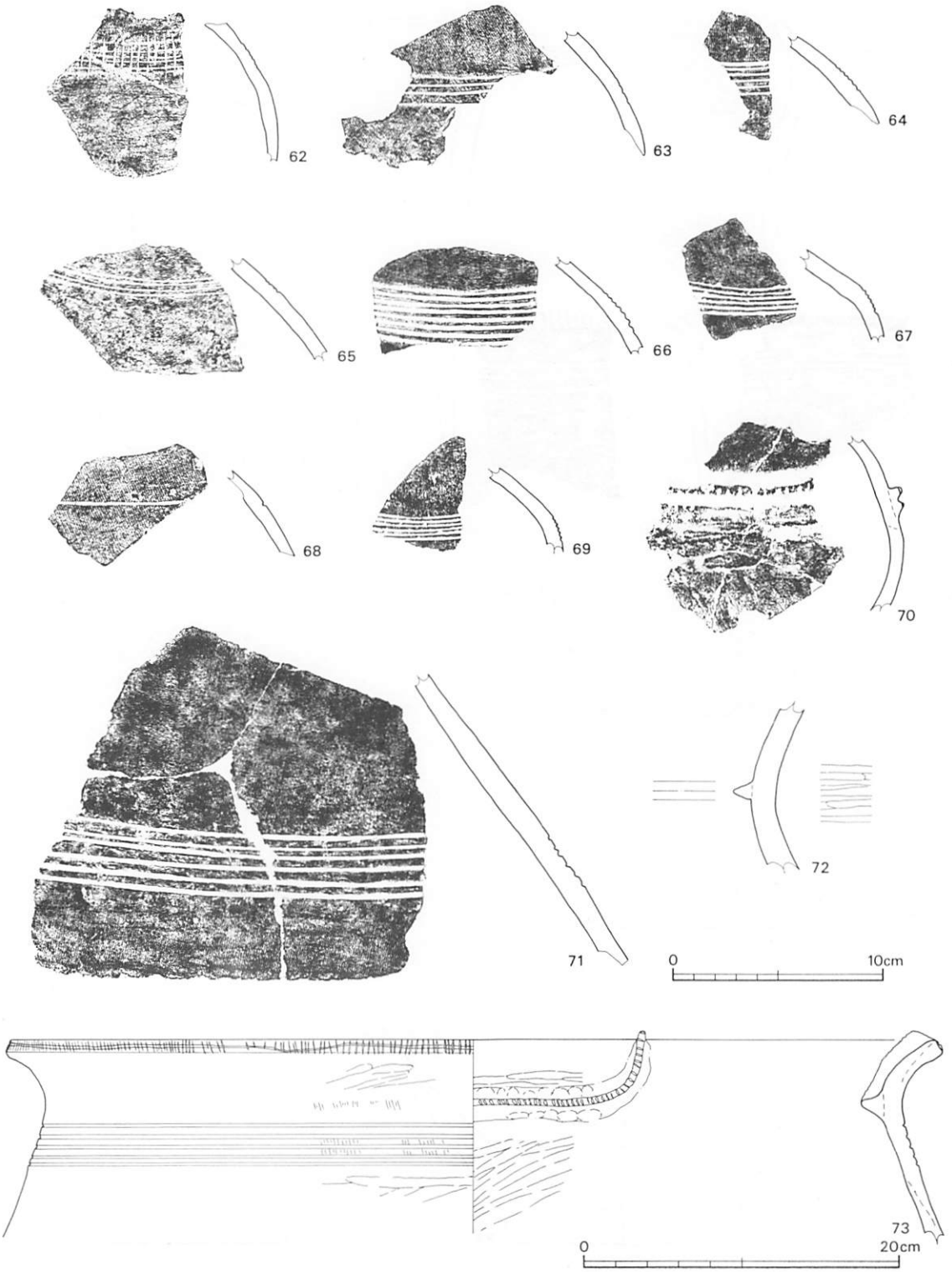
79～85 は壺・甕形土器の底部である。79・80・84・85 は平底，81～83 はやや凹み底と



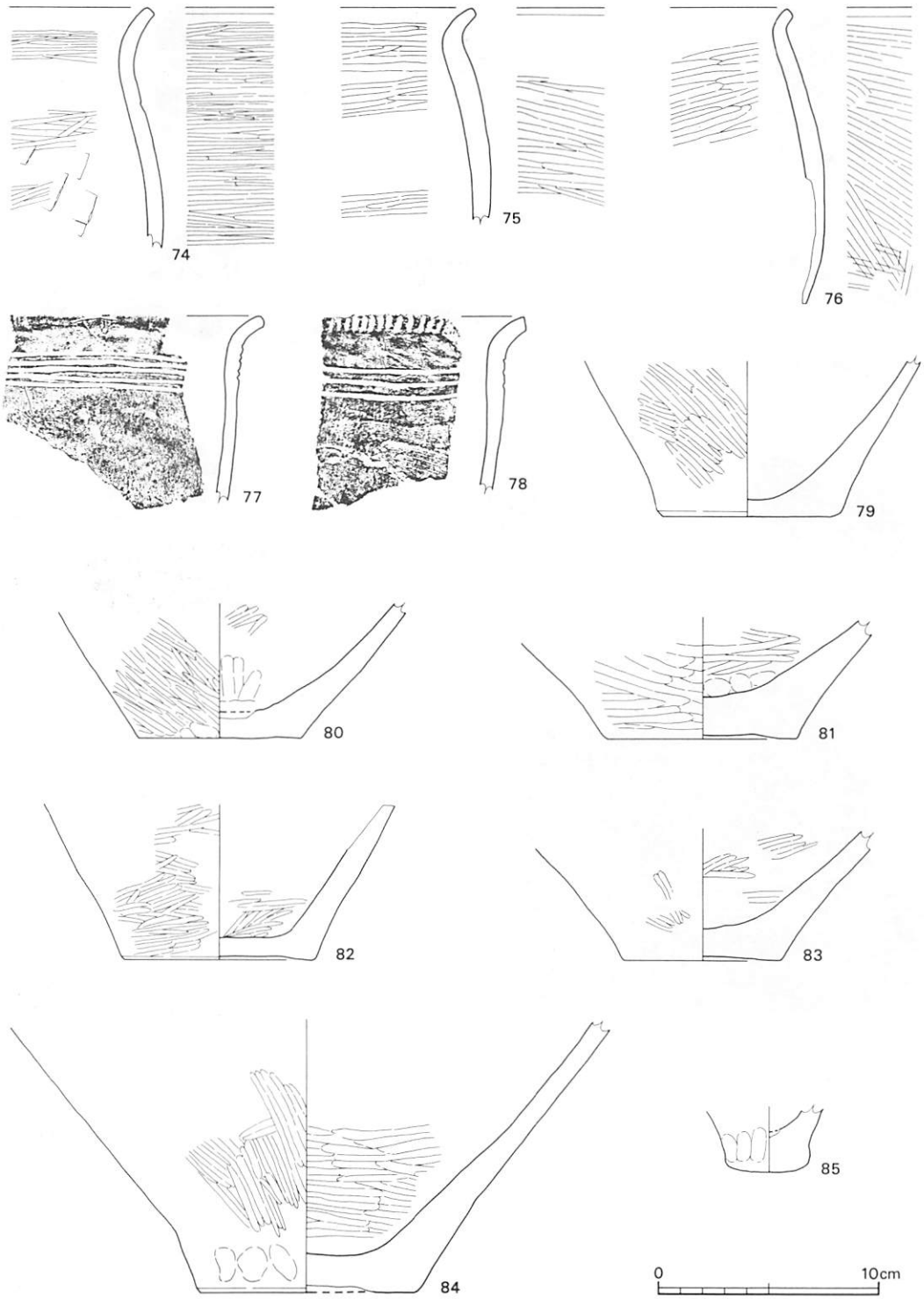
第13図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅰ（1/3）



第14図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅱ (1/3)



第15図　ＳＫ１出土遺物実測図 III (1/3, 1/4) 62～72 は 1/3, 73 は 1/4



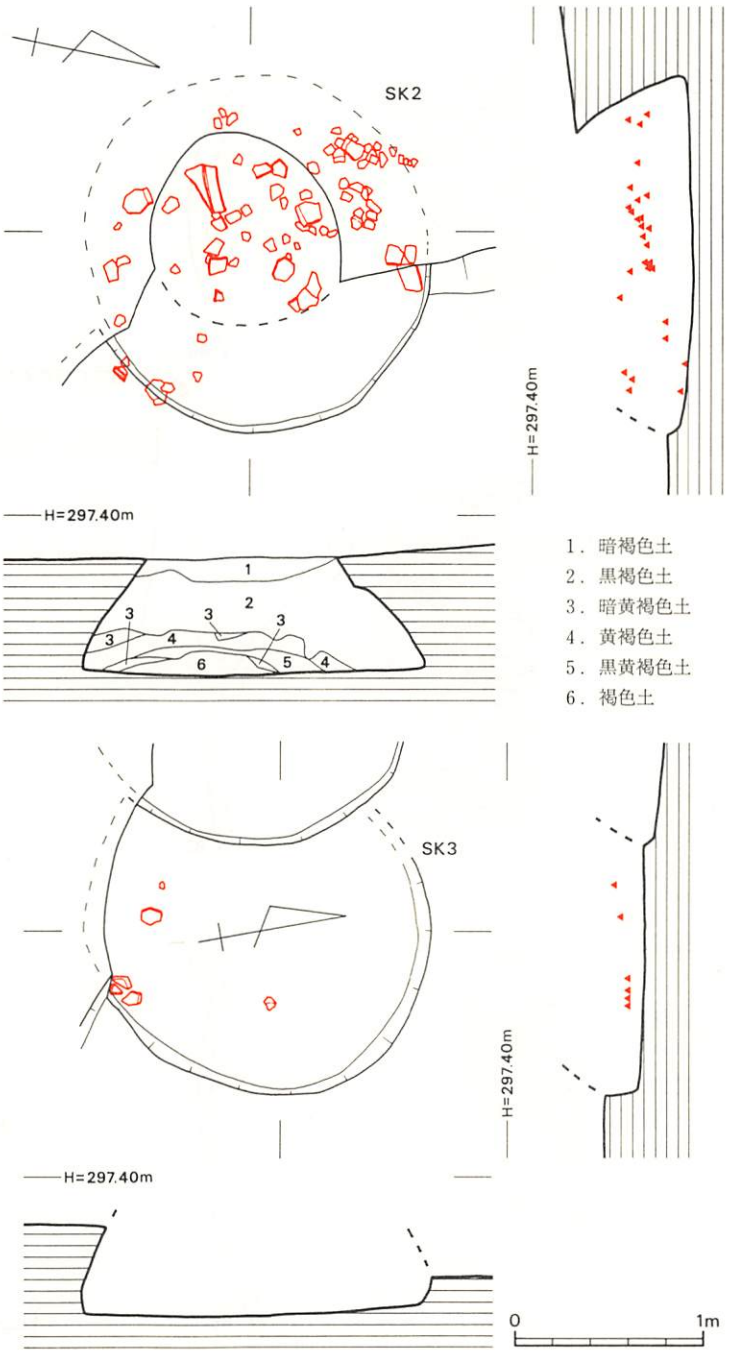
第16図　ＳＫ１出土遺物実測図Ⅳ (1/3)

なる。80・81 は内面に指頭圧痕，84・85 は外面に指頭圧痕が残る。79 は底径 7.6 cm，80 は底径 7.4 cm，81 は底径 8.6 cm，82 は復元底径 8.6 cm，83 は底径 7.2 cm，84 は底径 9.6 cm，85 は底径 3.8 cm である。

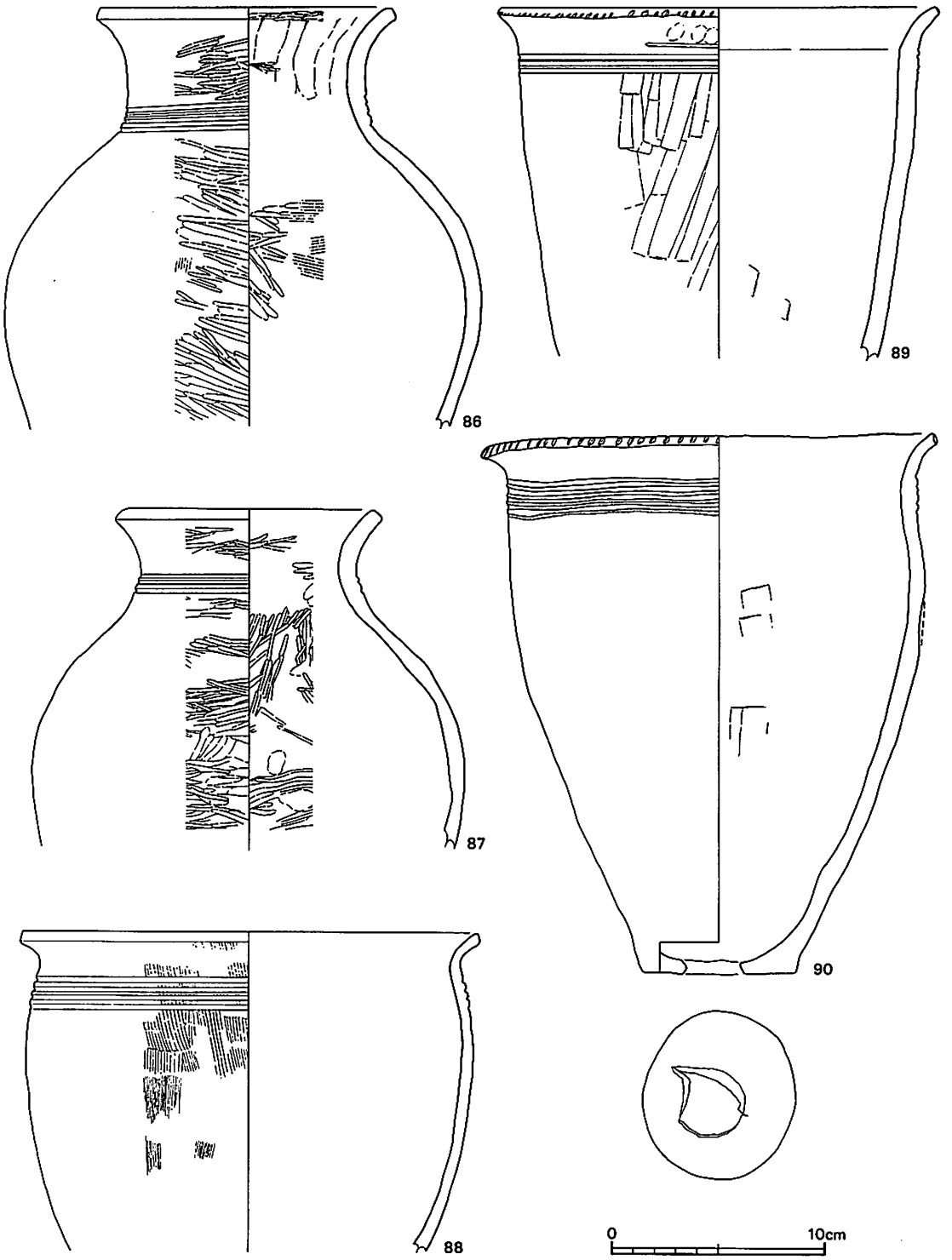
ＳＫ２・３（第 17 図）

ＳＫ２・３はＳＢ１の南西約 16 m に位置する，いわゆる「袋状竪穴」と呼ばれる貯蔵穴である。ＳＢ２a によって切られている。ＳＫ２の底面は円形を呈し，径 1.88 m である。断面形はフラスコ状と推定される。入口は底面の真上にあり，深さは検出面から 62 cm，最大径は底面から 10 cm 上部のところにある。遺物はほとんど２層（黒褐色土層）から出土し，弥生時代前期の壺・甕形土器（86～93）がある。

ＳＫ３はＳＫ２及びＳＢ２a によって切られている。底面は円形を呈し，径 1.78 m である。深さは検出面から 50 cm，最大径は底面から 12 cm 上部のところにある。遺物は少なく弥生時代前期の壺・甕形土器の底部（94～96）が出土している。



第 17 図　ＳＫ２・３実測図（1/40）

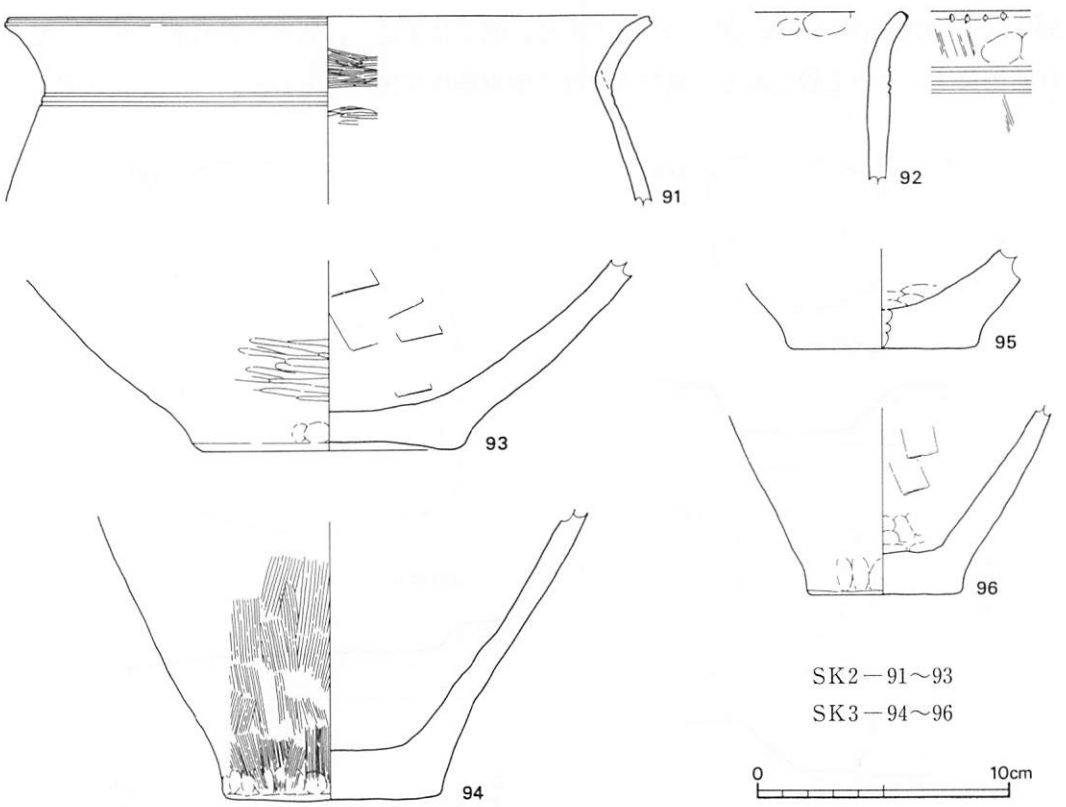


第18図　ＳＫ２出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第 18・19 図）

86・87・91 は壺形土器である。いずれも頸部にヘラ描沈線を施す。86 は口径 13.5 cm，復元胴部最大径 22.2 cm，頸部に 4 条のヘラ描沈線をめぐらす。胴部内外面にハケメを残す。87 は口径 11.3 cm，復元胴部最大径 20.3 cm，頸部に 3 条のヘラ描沈線をめぐらす。91 は復元口径 50.7 cm，大型のものである。口頸部は「く」字状に外反し，端部に 1 条，頸部に 2 条のヘラ描沈線をめぐらす。

88～90・92 は甕形土器である。いずれも頸部下位にヘラ描沈線を施す。88 は復元口径 21.3 cm で，やや胴は膨らむ。頸部に 4 条のヘラ描沈線をめぐらす。89 は復元口径 20.4 cm，胴の張らない形態である。口縁端部に刻目，頸部に 3～4 条のヘラ描沈線をめぐらす。口縁部外面に指頭圧痕，沈線下部及び内面に板状工具痕が残る。90 はほぼ完形で，底部に焼成後の穿孔がある。口径 21.3 cm，底径 7.2～7.8 cm，器高 25.0 cm，胴部最大径 19.3 cm である。口縁端部に刻目，頸部に 5 条のヘラ描沈線をめぐらす。全体的に磨滅が著しく調整は不明である。胴部内面に板状工具痕が残る。底部は平底となる。92 は口縁端部に刻目，頸



第 19 図　SK 2・3 出土遺物実測図（1/3，91 は 1/6）

部に3条のヘラ描沈線をめぐらす。

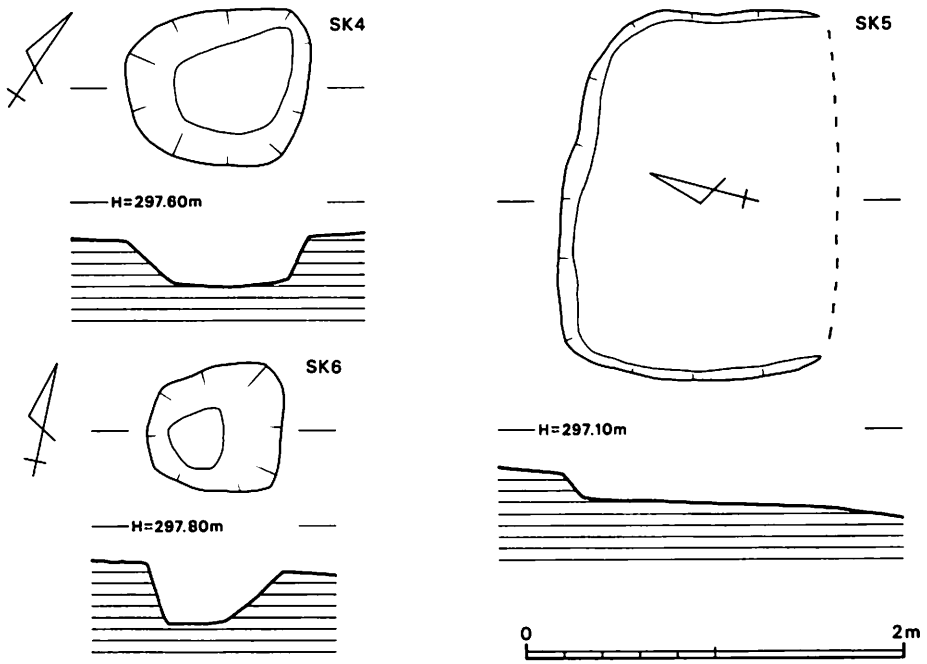
93～96は壺・甕形土器の底部である。93はやや凹み底，94～96は平底である。93は底径10.0 cm，底部～胴部にかけて立ち上がる状況から，大型の壺形土器底部と推定される。底部外面に指頭圧痕，内面に板状工具痕が残る。94は底径8.7 cm，調整はハケメで，底部外面に指頭圧痕が残る。95は復元底径7.4 cm，内面に指頭圧痕が残る。96は底径6.2 cm，内面に板状工具痕及び指頭圧痕が残る。

SK4～6（第20図）

SK4はSK5の北東約4 mに位置する不定形の土壙で，SB3の床面で検出した。規模は長さ96 cm，幅81 cm，深さ26 cmである。底面は平坦で，断面は逆台形である。覆土は暗黄褐色土の単一土層である。遺物は出土していない。

SK5はSB2aの南側約2 mに位置する長方形の土壙である。南側は流失している。規模は長さ1.96 m，幅1.46 m，深さ13 cmである。遺物は出土していない。

SK6はSB2aの北西約4 mに位置する台形の土壙である。規模は長さ71 cm，西側辺幅42 cm，東側辺幅64 cm，深さ32 cmである。底面は平坦で，断面は逆台形である。覆土は暗褐色土の単一土層である。遺物は少なく須恵器片が出土している。（道上）



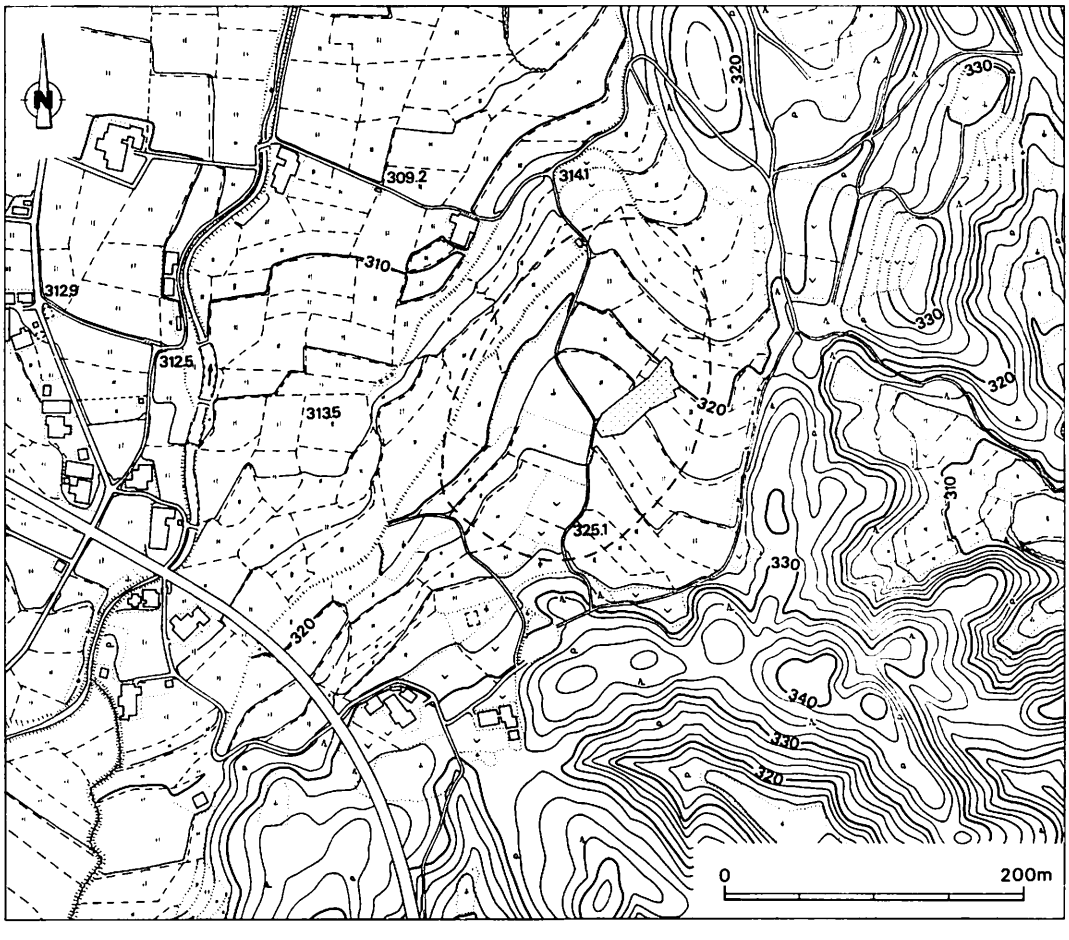
第20図　SK4～6実測図（1/40）

第Ⅳ章　焼け遺跡の調査

1　遺跡の立地と現状

焼け遺跡は，山県郡千代田町今田字焼け 1650 番地ほかに所在し，今回調査を行った本郷遺跡の南西約 1.5 km に位置している。本遺跡は，志路原川の支流である今田川の右岸に広がる低丘陵上の北向きの緩斜面（標高約 320 m）に立地しており，この低丘陵は西側を流れる今田川まで緩やかに下っていく。眼下には今田川が形成する沖積地を望むことができ，谷との比高は 10 m 前後である。

周囲は低丘陵の傾斜変換線付近まで水田による開墾が行われており，本遺跡の現状も水田である。このため遺構はかなりの削平を受けている。



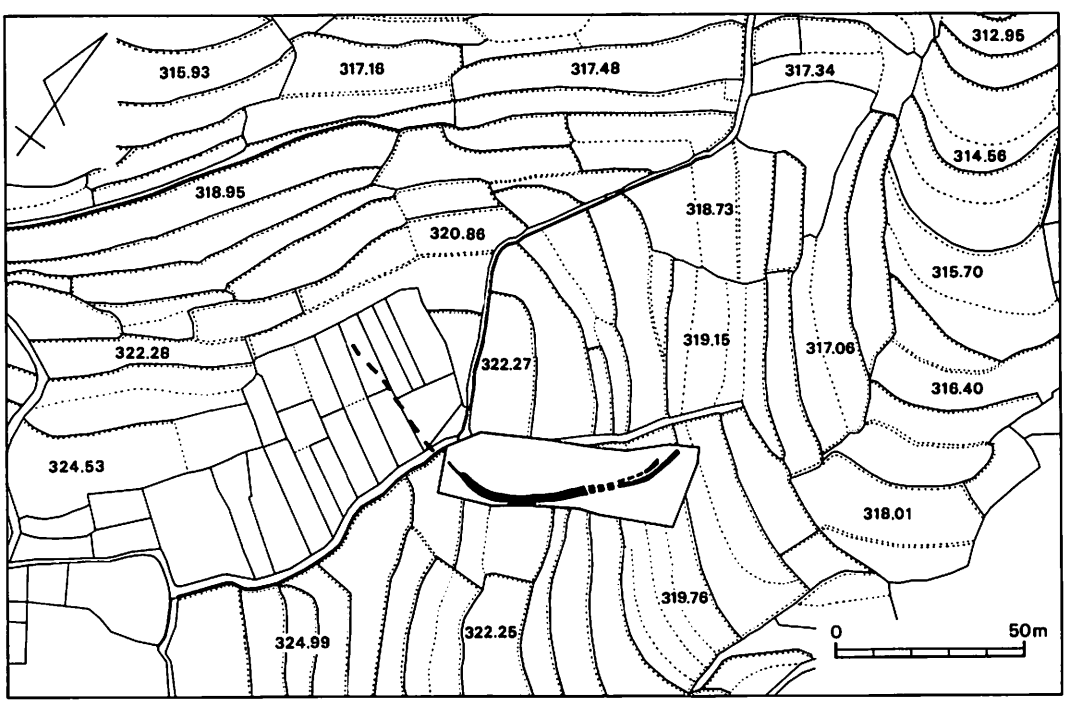
第 21 図　焼け遺跡周辺地形図 (1/5,000) アミ目は調査区

2　調査の概要

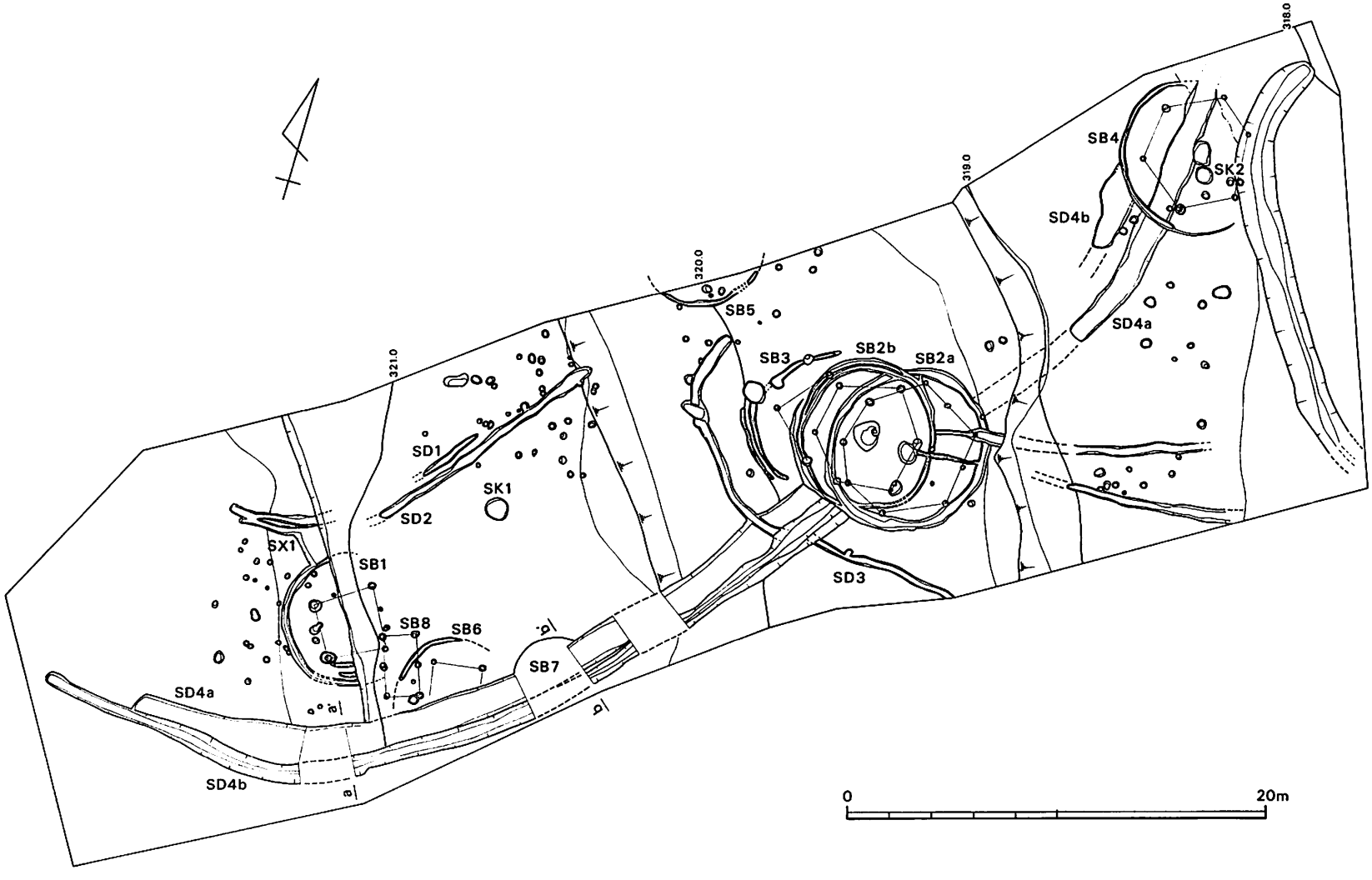
調査はまず，上部の耕作土を重機で排除し，そのあと人力によって遺構の検出を行った。土層の堆積状況は上層から耕作土，床土，黄褐色粘質土（地山）で，遺構はこの地山面で確認した。調査区の北西側では地山土は礫を多く含む砂質土である。

調査の結果，弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡７軒（ＳＢ１～7），掘立柱建物跡１棟（ＳＢ８），土壙２基（ＳＫ１・２），溝５条（ＳＤ１～5）などを検出した。遺構は調査区内のほぼ全域に広がり，重複するものや調査区外に延びているものも多い。竪穴住居跡は平面形がいずれも円形で，建て替えを行っているもの（ＳＢ１・２）や，竪穴住居跡外に長く延びる排水溝をもつＳＢ２ａ・２ｂがある。大溝は集落を囲むと思われるＳＤ４ａ・４ｂが，調査区の西端～北東端にかけて弧状にめぐる。また，この他調査区の東端でも調査区外に延びる大溝（ＳＤ５）を確認した。

出土した遺物には，遺構から弥生土器・土師器（壺・甕・高杯・器台・注口土器・甑），石器（スクレイパー），ガラス製小玉などが，遺構に伴わないものに石器（磨製石斧），剝片等がある。また，調査区外からは甑形土器の把手や，剝片等が出土している。



第22図　焼け遺跡調査区位置図（1/2,000）



第23図　焼け遺跡遺構配置図 (1/300)

3　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

ＳＢ１（第 24 図）

ＳＢ１は調査区西側の斜面上方に位置し，ＳＢ６・８と重複している。東側半分は後世の削平のため残存しない。また，北側はＳＸ１に切られ，南側も一部攪乱を受けているなど遺存状況は不良である。

平面形は不明確であるが円形と思われ，規模は径約 6.5 m である。壁高は最も状態の良い斜面上方の西側で 22 cm で，壁面下には，幅 30～40 cm，深さ 7 ～10 cm の壁溝が巡る。また，南側に幅 20 cm，深さ 5 cm の壁溝の一部が 2 本残っており，Ｐ４付近で攪乱のため途切れる。柱穴はＰ１～Ｐ８で，規模は径 38～70 cm，深さ 45～55 cm で，このうちＰ１・Ｐ４には径 20～30 cm の柱痕がみられる。竪穴住居跡のほぼ中央には径 40～60 cm，深さ 7 cm の不整楕円形の土壙があり，底面から土器片が出土した。また，Ｐ５の西側の床面では，焼土と炭がそれぞれ径約 10 cm の範囲で確認できた。

竪穴住居跡の外側に，径約 25 cm，深さ 10～15 cm の柱穴がほぼ等間隔で並んでおり，竪穴住居跡に伴う可能性もある。

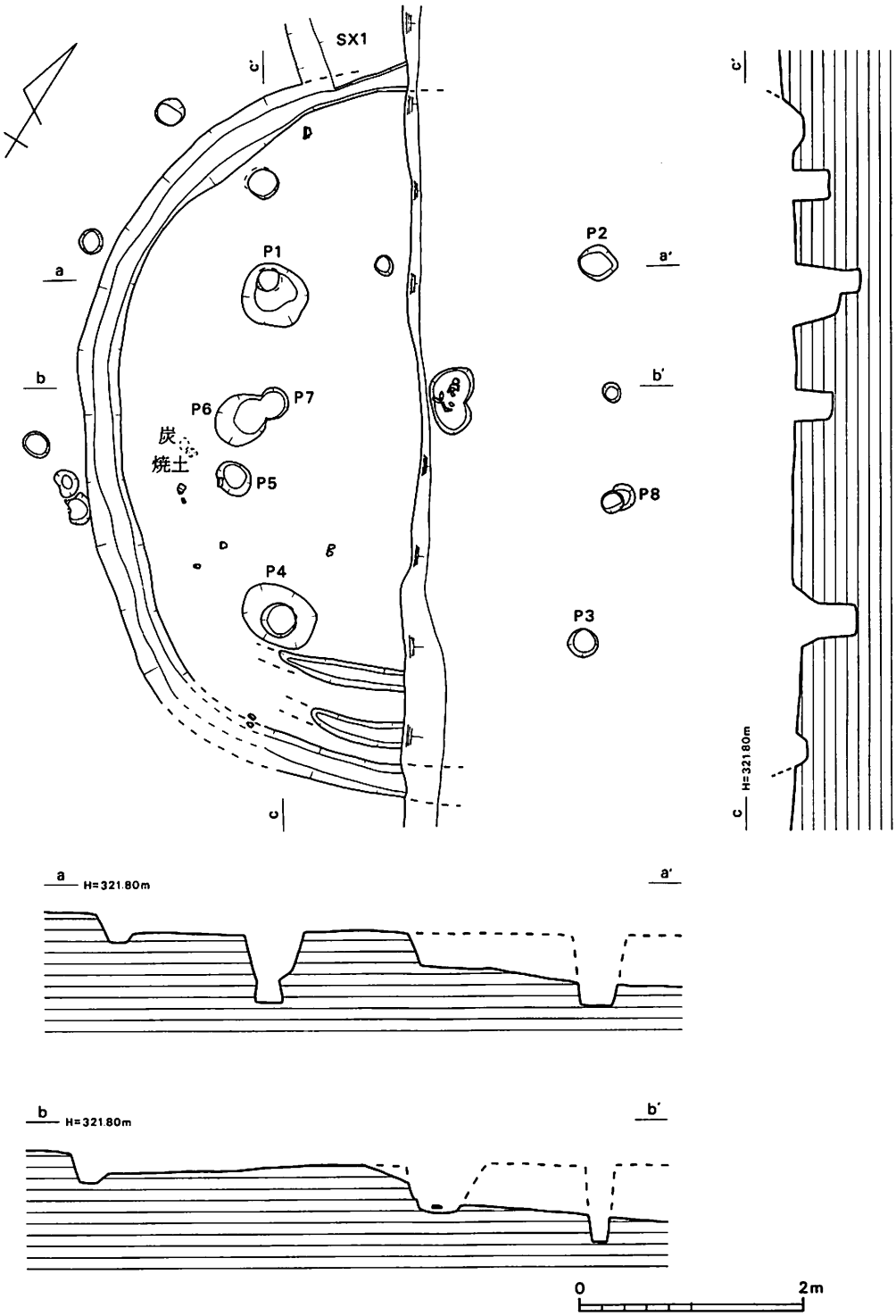
壁溝のあり方から 3 軒の重複が窺えるが，対応する柱穴については不明である。壁溝からの距離等から判断すると，外側の竪穴住居跡についてはＰ１～Ｐ４の４個と思われる。

竪穴住居跡内の覆土は黒褐色土の単一層である。出土遺物は少なく，床面や壁溝内・柱穴から弥生時代後期の甕形土器片が出土した。

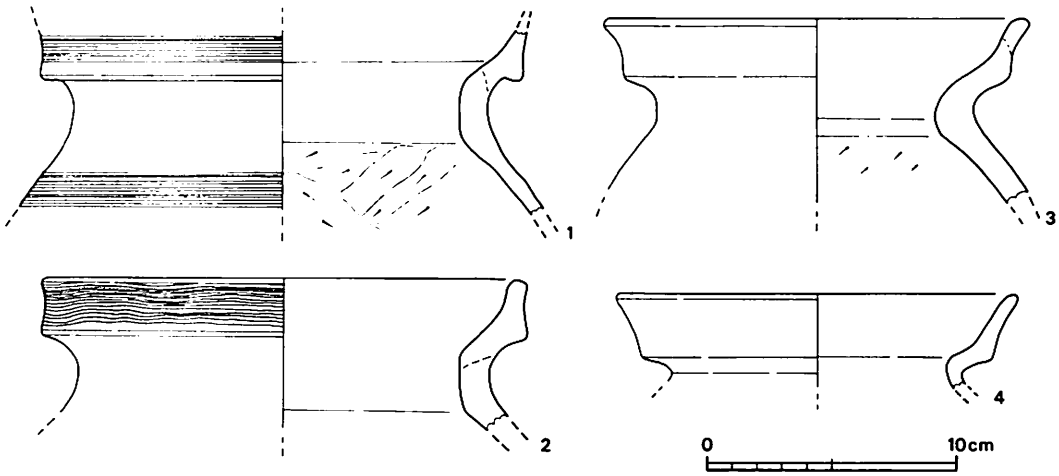
出土遺物（第 25 図）

1～4 は二重口縁の甕形土器である。2 は覆土中から，その他は床面直上から出土した。

1 は口縁部～胴部上半の破片で，口縁端部を欠損する。口縁部は，外反気味に立ち上がり，端部は丸く終わる。口縁部外面には 5 条，胴部上半には 6 条以上の櫛描文をめぐらす。口縁部内面の調整はヨコナデで，外面は摩滅のため不明である。胴部内面は斜め方向のヘラケズリである。2 は口縁部破片である。口径は 18.4 cm，口縁部は内湾気味に直立し，端部は丸く終わる。口縁部外面に 7 条の櫛描文をめぐらす。調整は口縁部内外面ともヨコナデである。3 は口縁部～胴部上半の破片で，復元口径は 16.2 cm である。口縁部は短く外反し，口縁端部は丸く終わる。調整は摩滅のため不明である。胴部内面はヘラケズリである。4 は口縁部片で，復元口径は 15.6 cm である。口縁部は直線的に外方へ開き，端部は丸く終わる。調整は口縁部内外面ともヨコナデで，外面には煤が付着している。



第24図　ＳＢ１実測図(1/60)



第25図 ＳＢ１出土遺物実測図 (1/3)

ＳＢ２a（第26図）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ２b及びＳＤ４a・４b と重複している。西側に建て替えたＳＢ２b と床面の一部を共有する。

平面形は円形で，規模は径約 8.0 m である。壁は最も良好な状態にある南側で 15～20 cm，東側や南側はほとんど残らない。壁面下には幅 33～40 cm，深さ 8 ～14 cm の壁溝が巡る。主柱穴はＰ１～Ｐ９の９個で，規模は径 20～42 cm，深さ 18～42 cm である。床面のほぼ中央には，平面形が楕円形で，長径 110 cm，短径 90 cm，深さ 22 cm の炉跡が存在する。底面はほぼ平坦で，覆土には炭化物を多く含んでおり，その上層には黄褐色土の貼床状況が見られる。炉跡から東側に向かって幅約 20 cm，深さ約 10 cm の溝が延びており，さらに斜面下方の住居跡外に向かって延びる。この溝は後世の削平のため一部途切れているが，斜面下方のＳＤ５付近では幅 60 cm，深さ 40 cm となっている。

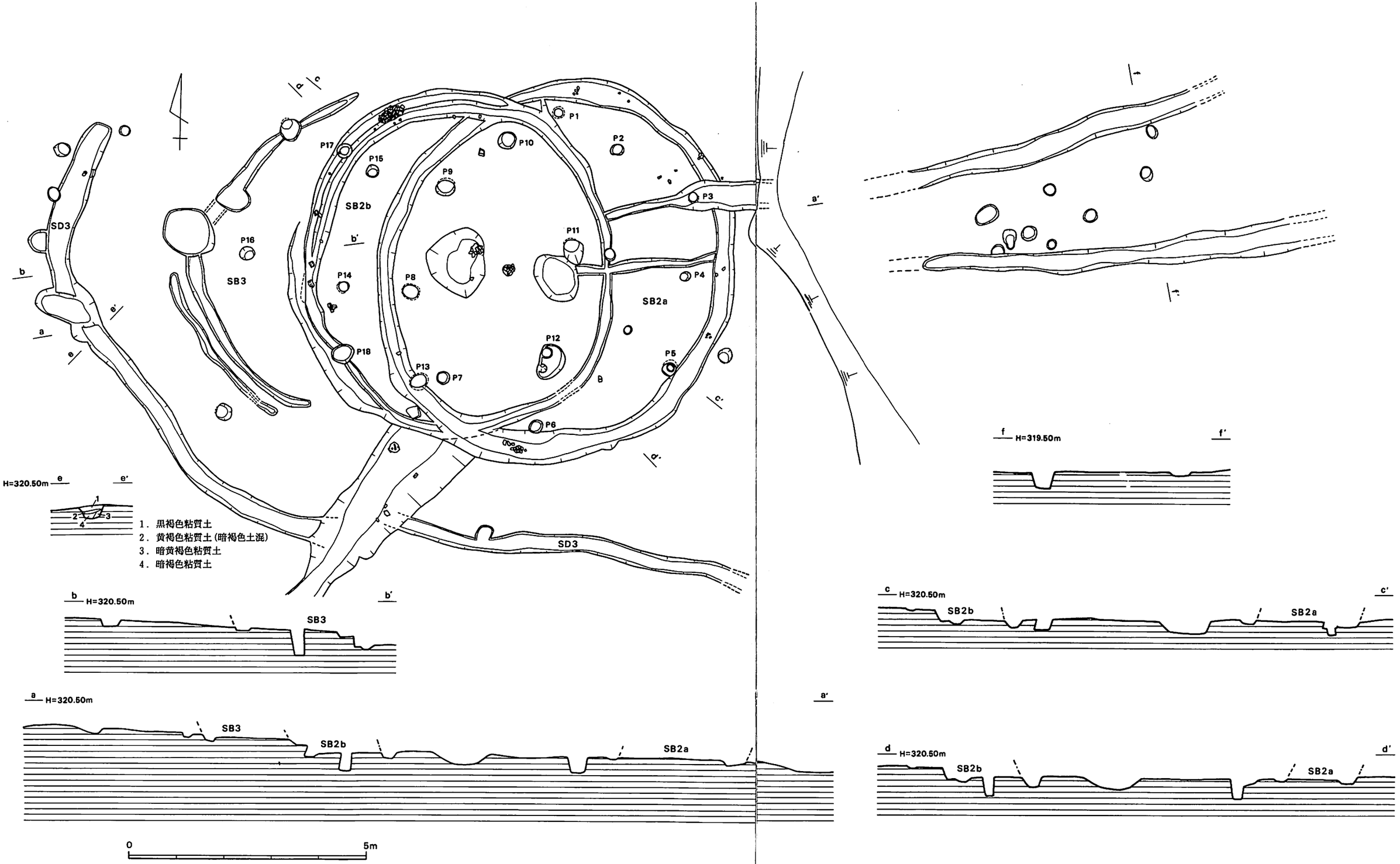
住居跡内の覆土は黒褐色土の単一層で，遺物は相対的に少なく，壁溝内から弥生時代終末から古墳時代初頭の壺・甕・器台・甑形土器等が出土したほか，炉跡内覆土からガラス製小玉１点が出土した。また，炉跡から外側に延びる溝の底面から甕形土器が出土した。

ＳＢ２b との新旧関係は，ＳＢ２b と重複している壁溝及び炉跡などに，厚さ５～６cm の黄褐色粘質土を貼ってＳＢ２b の床面としていることから，本住居跡が古い。

出土遺物（第27図）

7・13 は外側に延びる溝から，その他は床面直上および壁溝内から出土した。

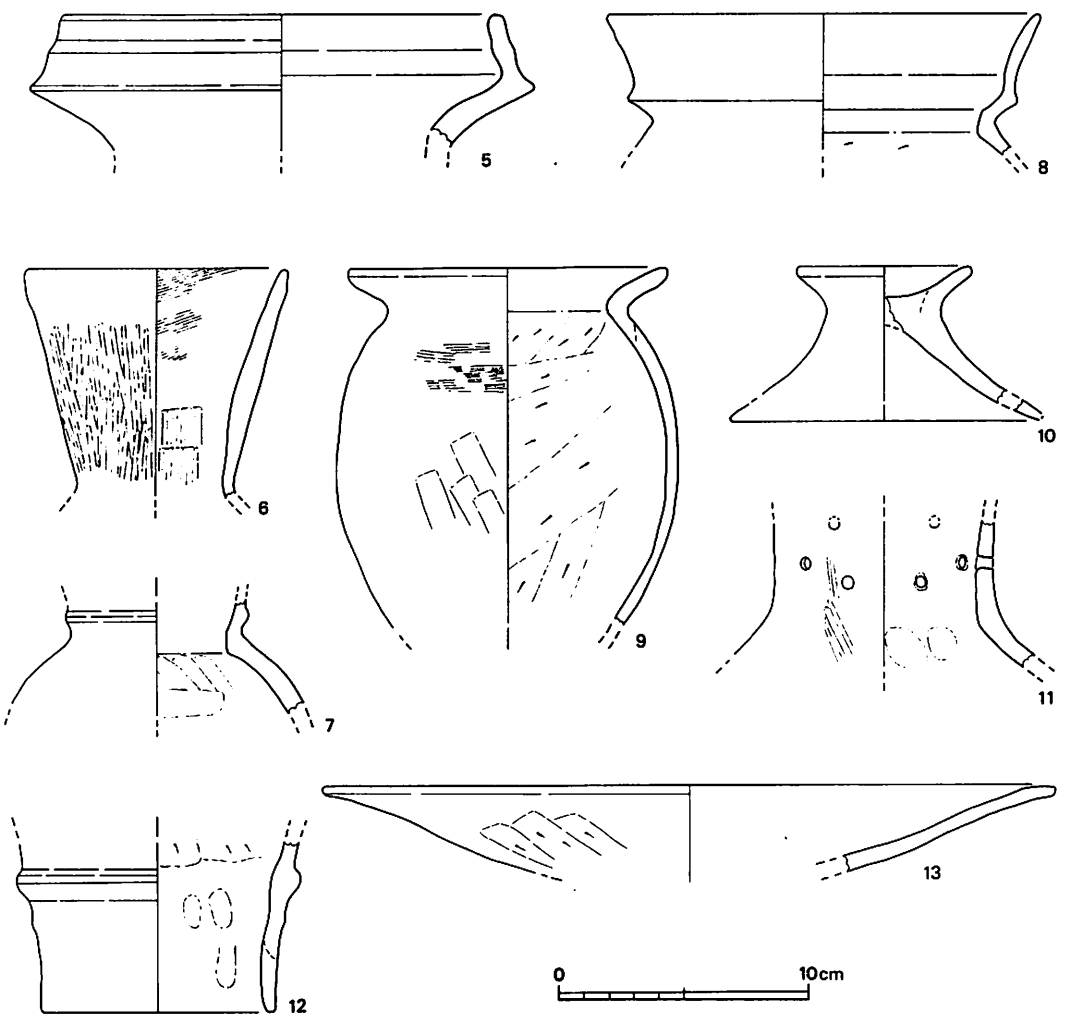
5～7 は壺形土器である。5 は二重口縁の口縁部片で，復元口径は 16.8 cm である。口縁部は擬口縁から内傾して立ち上り，端部は丸く終わる。外面に凹線状のくぼみがめぐる。



第26図　ＳＢ2a・2b・ＳＢ3・ＳＤ3実測図 (1/80)

調整は内外面ともヨコナデである。6は長頸壺の口縁部片で，復元口径は10.0cmである。口縁部は外反し，端部は丸く終わる。調整は口縁部の内面は横方向のハケ，頸部付近は板状工具によるナデである。外面は縦方向のヘラミガキの後，口縁端部はヨコナデを加える。7は頸部～胴部上半の破片で，胴部は肩が張る。調整は内面はナデで，そのほかは摩滅のため不明である。

8・9は甕形土器である。8は二重口縁の口縁部片で，口径は17.0cmである。口縁部は擬口縁から外反して立ち上がり，端部は丸く終わる。口縁部の調整は内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。9は口縁部～胴部下半の破片で，復元口径12.6cm，胴部最大径は13.5cmである。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部は水平気味に開く。口縁



第27図　SB2a出土遺物実測図(1/3)

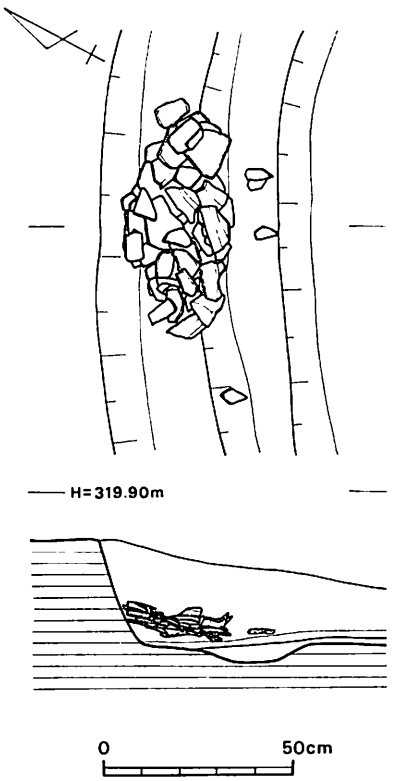
端部は丸く終わる。最大径は胴部のほぼ中位にある。調整は，口縁部は内外面ともヨコナデで，胴部の外面は上半が横方向のハケメ，下半が板状工具によるナデである。胴部の内面は，縦～斜め方向のヘラケズリである。外面には煤が付着している。

10・11 は器台形土器である。10 は口径 7 cm，器高 6.1 cm，底径 12.4 cm である。受部は短く立ち上り，裾部は緩やかに広がる。調整は内外面とも摩滅が著しく不明である。11 は胴部片で，柱状部は筒状で，径 0.5 cm の円形の透かしが 3 箇所残る。調整は，外面はヘラミガキで，内面は指頭圧痕がみられる。

12 は甑形土器の底部で，やや外反しており，端部は丸い。基部から 4.5 cm 上方には幅約 1.0 cm の凸帯を貼りつけている。調整は内面下部はナデで，外面は摩滅のため不明である。内面の上部はヘラケズリである。

13 は形態不明の土器である。調整は内面がヨコナデで，外面はヘラケズリである。

ガラス製小玉は，炉跡のほぼ中央の底面から約 10 cm 上で検出した。破片のため規模等は不明である。色調は淡青色である。



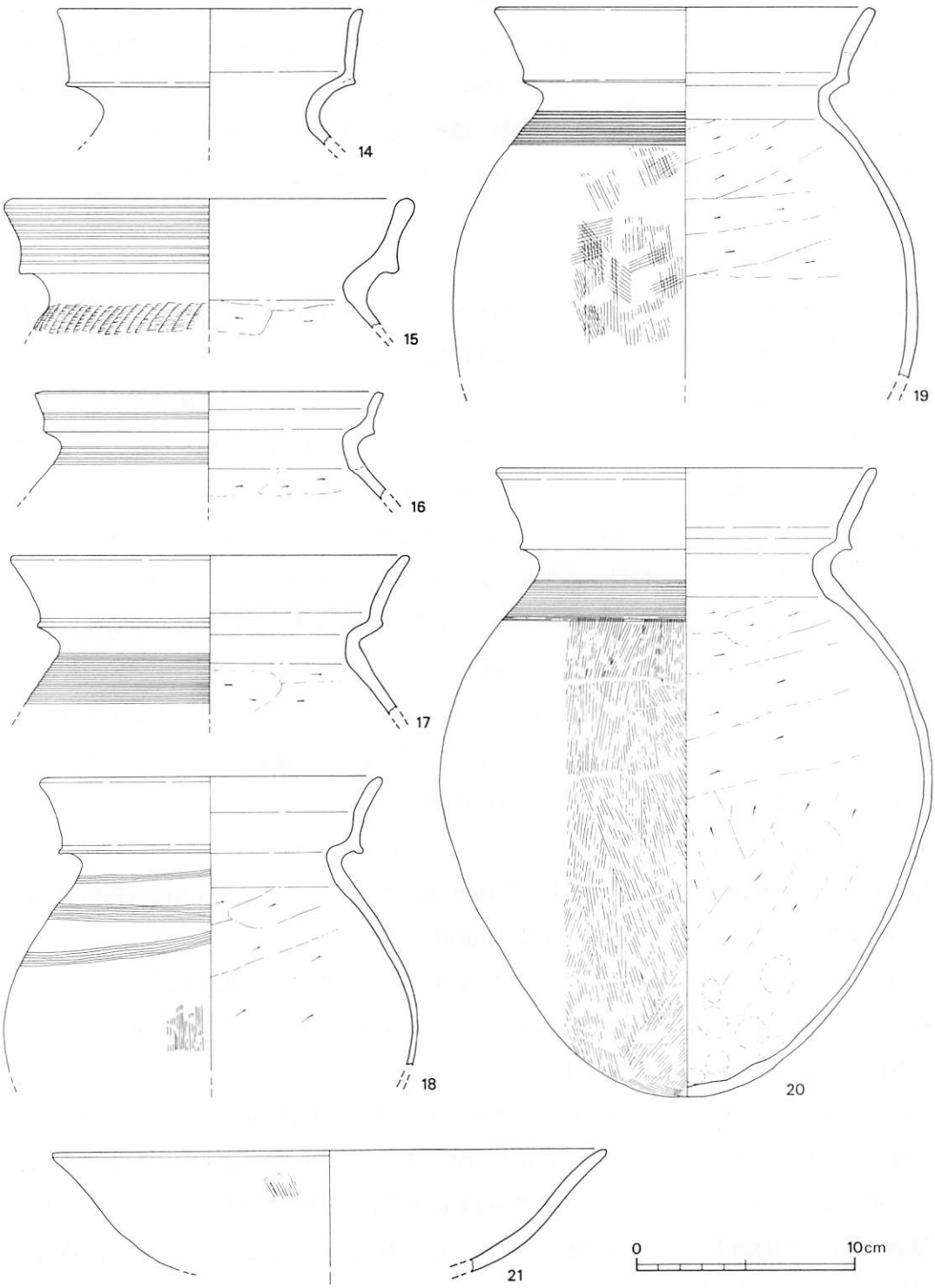
第 28 図　ＳＢ２b 遺物出土状況実測図 (1/20)

ＳＢ２b（第 26 図）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ２a・３及びＳＤ４と重複している。ＳＢ２a を西側に建て替えたものがＳＢ２b で，床面の一部を共有している。

平面形は円形で，規模は径約 7.0 m である。西側に幅約 25 cm，床面からの高さ 10～20 cm のテラスを設けている。壁高は南側の最も高いところで 30 cm で，東側は残らない。壁面下には幅 15～25 cm，深さ約 10 cm の壁溝がめぐるが，北側では幅 20～28 cm，深さ 4～7 cm と幅 30 cm，深さ 6～13 cm の 2 条となる。この 2 条の壁溝の覆土はいずれも黒褐色土の単一層で，新旧関係は見られない。また土器の出土状況を見ると，2 条の溝にまたがって出土していることから 2 条同時に存在していたものと思われる。

主柱穴は P 10～P 15 の 6 個で，規模は径 22～52 cm，深さ 34～39 cm である。床面のほぼ中央には，平面形が不整円形で，規模が長軸 140 cm，短軸 125



第29図　ＳＢ２ｂ出土遺物実測図 (1/3)

cm，深さ約 10 cm の炉跡があり，覆土に少量の炭化物がみられる。また，住居跡の東壁から東側に向かって幅約 20 cm，深さ 5～10 cm の溝が，ＳＢ２a の壁溝付近で幅 50 cm と広がりながら斜面下方へと延びる。住居跡内の覆土は黒褐色土の単一層で，遺物は炉跡側の床面直上から弥生時代終末から古墳時代初頭の甕形土器が転倒した状況で出土したほか，北側の壁から甕形土器 2 個体分が破砕された状況で出土した。また，炉跡内からは甕・高杯形土器が出土した。

出土遺物（第 29 図）

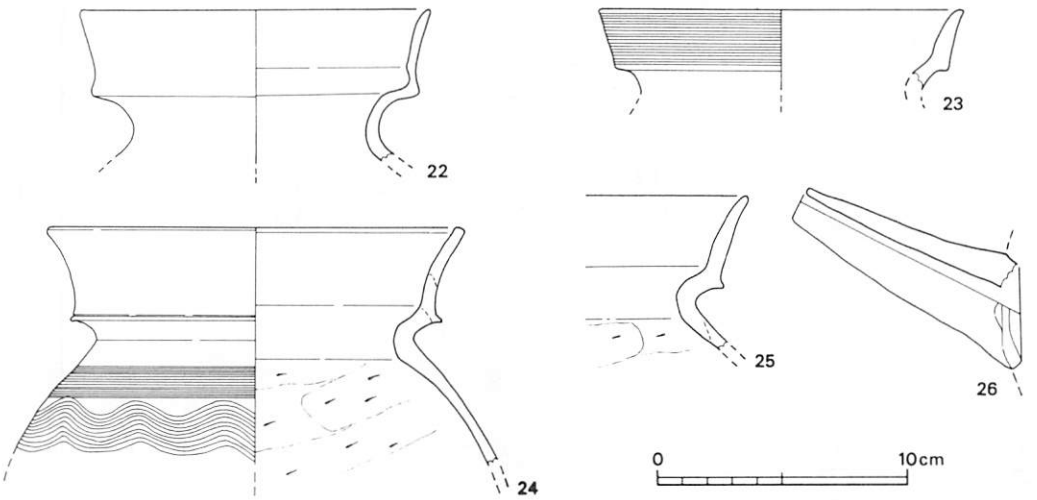
14 は住居跡のほぼ中央の床面直上で，18・20 は北側の壁溝内から一括して出土した。14 は二重口縁の壺形土器である。復元口径は 14.0 cm で，口縁部は擬口縁から直立し，口縁端部は外反し，丸く終わる。調整は外面がナデで，内面は摩滅のため不明である。

15～20 は二重口縁の甕形土器である。15 は口縁部片で，復元口径は 18.0 cm である。口縁部は擬口縁から外反して立ち上り，端部は丸く終わる。外面には 8 条の櫛描文を，肩部には櫛歯状工具による押引文がめぐる。口縁部内面の調整はヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。16 は口縁部～肩部片で，復元口径は 15.2 cm である。口縁部は短く外反し，端部は矩形である。口縁部外面には 2 条，頸部には 4 条の櫛描文をめぐらす。胴部内面はヘラケズリである。17 は口縁部～胴部上半，18・19 は口縁部～胴部中央の破片，20 はほぼ完形のものである。17～20 の口縁部は擬口縁から外反して立ち上り，口縁端部は 17 が矩形であるが，ほかは丸く終わる。頸部下には 11～13 条の櫛描文がめぐり，18 は 3 条と 4 条の櫛描文を 3 段にめぐらす。調整は口縁部内外面ともヨコナデで，胴部外面は縦～斜め方向のハケメである。胴部内面はヘラケズリである。復元口径は 17 が 17.4 cm，18 が 15.5 cm，19 が 17.0 cm である。20 は口径 16.8 cm，器高 28.7 cm で，最大径は胴部中央にある。底部は丸底で，内面の底部付近には指頭圧痕が残る。

21 は高杯形土器の杯部で，復元口径は 25.4 cm である。椀状の杯部から，口縁部は緩やかに外反する。調整は摩滅が著しく不明であるが，外面に一部ヘラミガキの痕跡が残る。

ＳＢ２a・２b 覆土出土遺物（第 30 図）

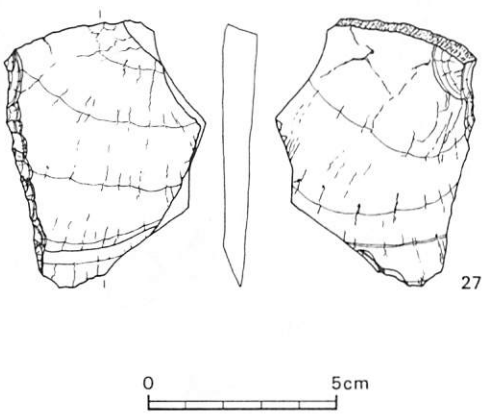
22 は二重口縁の壺形土器の口縁部片である。復元口径は 13.8 cm で，口縁部は擬口縁から外反して立ち上り，端部は丸い。調整は外面はヨコナデで，内面は不明である。23～25 は二重口縁の甕形土器である。23 は口径が 14.6 cm で，口縁部は外方に開いて立ち上り，端部は丸い。口縁部外面に 9 条の櫛描文がめぐる。調整は内外面ともヨコナデで，外面には煤が付着する。24 は口縁部～胴部上半で，復元口径は 16.6 cm である。口縁部は擬口縁から外反して立ち上り，端部は矩形である。肩部に 8～9 条の櫛描直線文と 12 条以上の櫛



描波状文がめぐる。調整は口縁部は内外面ともヨコナデである。胴部の内面はヘラケズリである。25 は口縁部片で，擬口縁から外反して立ち上る。調整は内外面ともヨコナデである。胴部の内面はヘラケズリである。

26 は注口付土器で，注ぎ口は径 1.5 cm，根もとは 4.0 cm，長さ 10.5 cm で，調整はナデである。

27 は刃部が左側辺にあるスクレイパーで長さ 6.9 cm，幅 5.3 cm である。

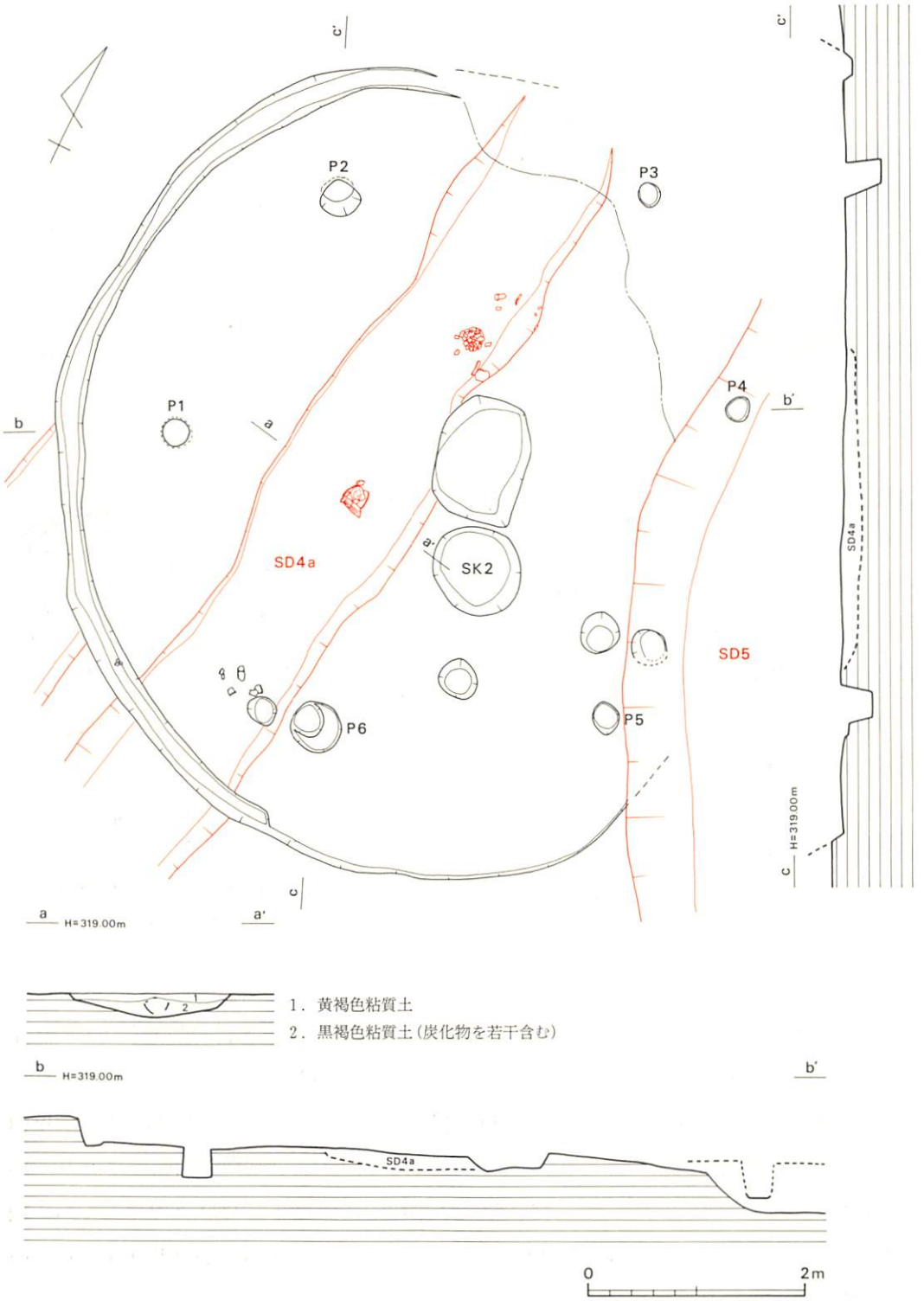


第 30 図　ＳＢ2ａ・2ｂ出土遺物実測図
(1/3，27 は 1/2)

ＳＢ３（第 26 図）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ2ｂと重複している。上面は後世の削平のため残らない。また，東側半分はＳＢ2ｂに切られているため全容は明らかでないが，平面形は隅丸方形で，規模は一辺約 4.5 m と思われる。壁高は西側が 5.0 cm で，北東側は残らない。壁面下には，幅 10～30 cm，深さ 5～10 cm の壁溝がめぐる。また，住居跡の西側には幅 10～20 cm，深さ 2～8 cm の溝が壁溝に沿って残存する。主柱穴はＰ16～Ｐ18 のありかたから 4 個と思われ，規模は径 30～45 cm，深さ約 55 cm である。住居跡内の覆土は黒褐色土の単一層で，遺物は出土していない。

ＳＢ2ｂとの新旧関係は本住居跡よりＳＢ2ｂの方が新しい。



第31図　ＳＢ４実測図（1/60）

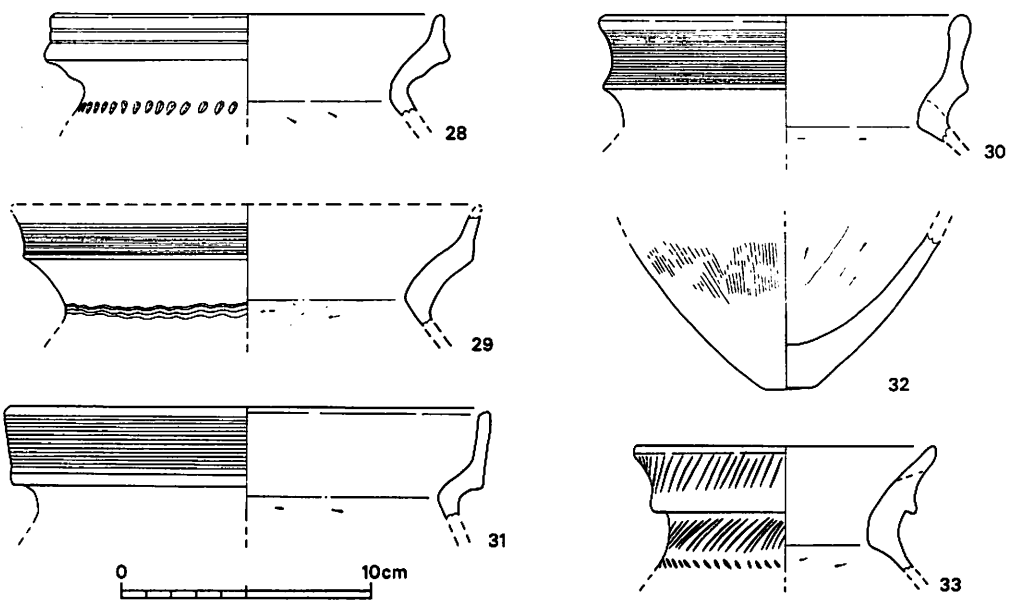
SB 4（第 31 図）

調査区の北東端に位置し，SD 4a・4b・5 と重複している。後世の削平のため，住居跡の北東及び東側部分は残存せず，また壁も斜面上方の西側を除いてほとんど残らないなど，遺存状況は不良である。

平面形は不明確であるが円形と思われ，規模は径 7.3 m である。壁高は最も良く残る北西側で約 50 cm，壁面下には幅 20～30 cm，深さ約 10 cm の壁溝がめぐり，南側は残らない。主柱穴は P 1～P 6 の 6 個で，規模は径 20～40 cm，深さ 35～40 cm である。住居跡のほぼ中央に長さ 1.1 m，幅 0.8 m，深さ 0.2 m，平面形が楕円形の炉跡がある。底面はほぼ平坦で，覆土には炭化物が若干みられた。住居跡の覆土は黒褐色土の単一層である。壁溝内や床面から弥生時代後期の甕形土器片が出土したが，削平を受けていることもあって量的には少ない。SD 4 との新旧関係は，本住居跡の中央を横切る SD 4a の上層に，約 10 cm ほど黄褐色粘質土を貼って本住居跡の床面を形成しており，本住居跡は SD 4a より新しい。また，SD 5 との新旧関係は上面が削平を受けているため不明である。

出土遺物（第 32 図）

28～31 は甕形土器の口縁部片である。28 は復元口径 15.6 cm で，口縁部は上方に拡張している。口縁部外面には 2 条の凹線文を施し，肩部にはヘラ状工具による刺突文をめぐらす。29～31 は二重口縁を有する。29 は口径は推定で 18.2 cm で，口縁部は上方に短く外反



第 32 図　SB 4・6 出土遺物実測図 (1/3)

して立ち上る。口縁部外面に8条の櫛描直線文，頸部には3条の櫛描波状文をめぐらす。30は復元口径14.4cmで，口縁部は外湾気味に直立し，端部は丸く終わる。外面には10条の櫛描文をめぐらす。31は復元口径19.2cmで，口縁部は直立して立ち上り，端部は丸い。外面には10条の櫛描文をめぐらす。28～31の調整は，口縁部内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。

32はやや凹み底の底部で，底径は1.6cmである。調整は外面は縦方向のハケメである。内面はヘラケズリである。

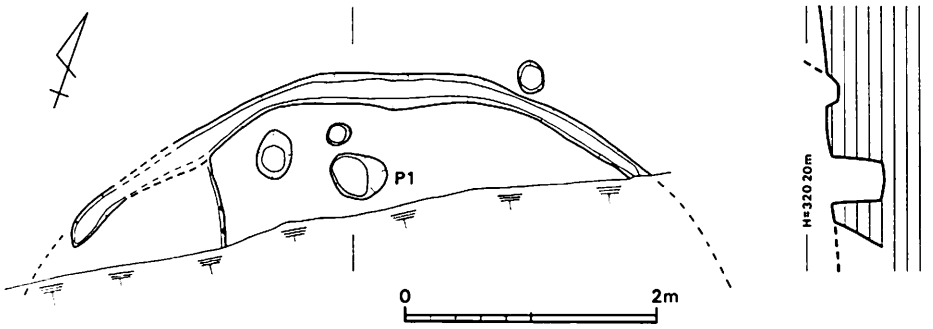
SB5（第33図）

調査区のほぼ中央部にあり，SD3の約1.5m北側に位置する。大部分が調査区外のため，全容は不明である。また，後世の削平のため壁は存在せず，床面も西半分は残らないなど，遺存状況は不良である。壁溝の規模は幅20～40cm，深さ3～10cmである。主柱穴は不明であるが，壁溝からの距離・深さ等からP1が伴うと思われ，規模は径40cm，深さ40cmである。遺物は出土していない。

SB6（第34図）

調査区の西側に位置し，SB8・SD4aと重複している。後世の削平のため遺存状況は悪く，壁溝の一部と柱穴のみを確認した。

平面形は不明確であるが円形と思われ，規模は径5.5m前後と推定される。壁溝の規模は幅25～30cm，深さ8cmである。主柱穴は残存するP1・P2の2個の状況から4個と思われ，規模は径25～35cm，深さ約25cmである。遺物は壁溝内から弥生時代後期の壺形土器が出土している。SB8・SD4との新旧関係は不明である。



第33図　SB5実測図（1/60）

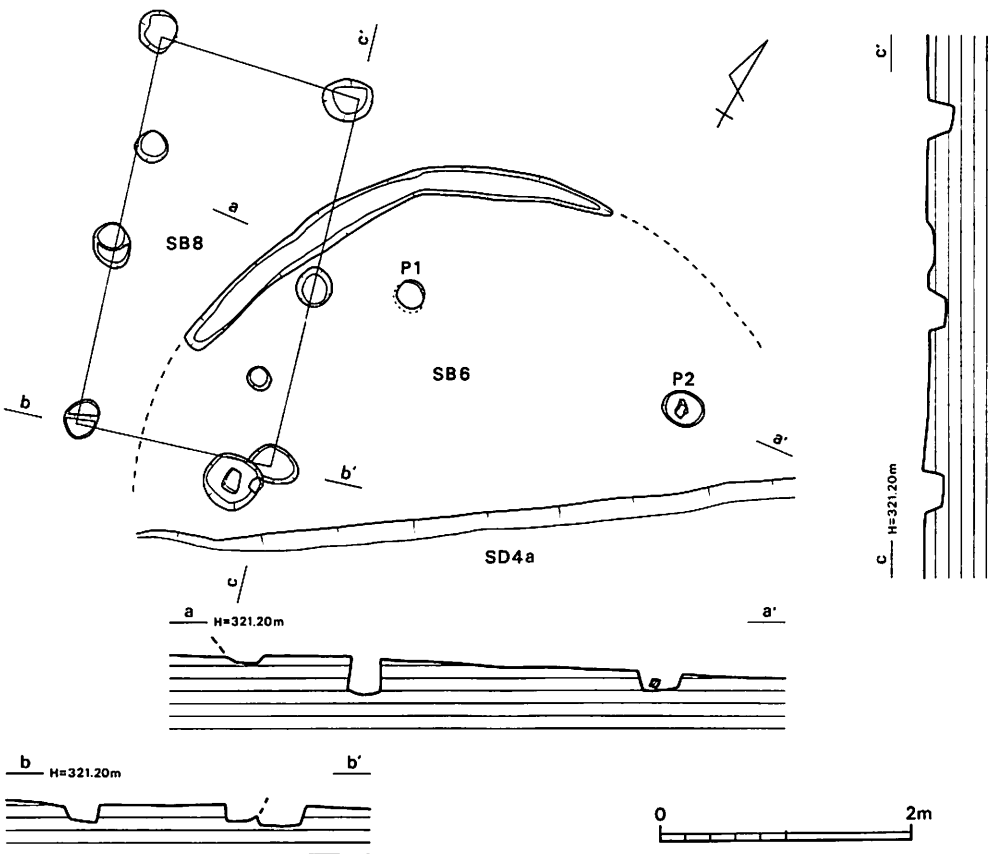
出土遺物（第32図）

33は壁溝から出土した。壺形土器の口縁部片で，復元口径は11.8cmである。口縁部は外反して立ち上り，端部は丸くおわる。口縁部，頸部にヘラ状工具による刺突文がめぐる。調整は摩滅のため不明である。胴部内面はヘラケズリである。

SB7（第23・38図）

調査区の中央よりやや西側に位置し，SD4a・4bと重複している。上面はかなり削平を受け，また調査区外に延びているため全容は明らかでないが，平面形は円形で，規模は径約6～7mになるものと思われる。壁溝の規模は幅30cm，深さ10cmであるが，主柱穴等については不明である。

SD4aの上部に灰黄褐色粘質土を5～10cm貼って床面を形成しており，本住居跡は，SD4a・4bより新しい。遺物は出土していない。



第34図　SB6・8実測図（1/60）

(2) 掘立柱建物跡

SB 8（第 34 図）

調査区の西側に位置し，SB 1・6 と重複している。桁行の方向は N18°W で，規模は桁行 2 間（3.0 m），梁行 1 間（1.6 m）で，柱間は 1.5～1.6 m である。柱穴の規模は，径 35～40 cm，深さ 10～17 cm である。遺物は出土していない。

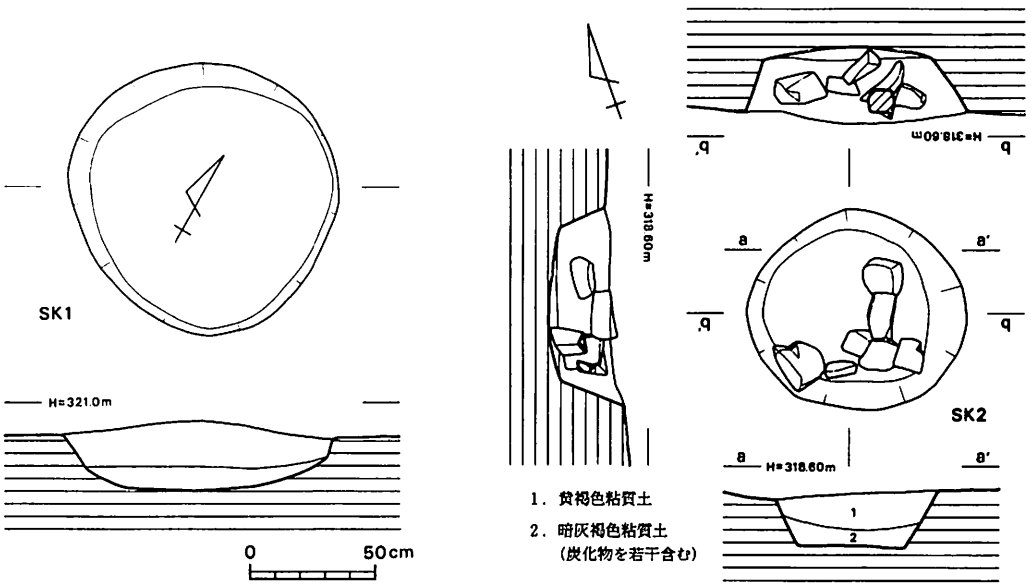
(3) 土壙

SK 1（第 35 図）

調査区の中央よりやや西側に位置し，SD 1・2 の約 2.0 m 南側に存在する。平面形は円形で，規模は径 1.0 m，深さ約 20 cm で，底面はほぼ平坦である。土壙内の覆土は黒褐色粘質土の単一層で，遺物は出土していない。

SK 2（第 35 図）

調査区の北東に位置し，SB 4 と重複している。平面形は楕円形で，規模は長径 88 cm，短径 80 cm，深さ 20～30 cm，底面はほぼ平坦である。土壙内には 10～20 cm 大の 7 個の礫を「T」字状に配している。出土遺物は，土壙内覆土中から弥生時代後期の壺形土器，底部片が出土した。SB 4 との新旧関係は，土壙上部に黄褐色粘質土を約 15 cm 貼って SB 4 の床面を形成しており，本土壙より SB 4 が新しい。

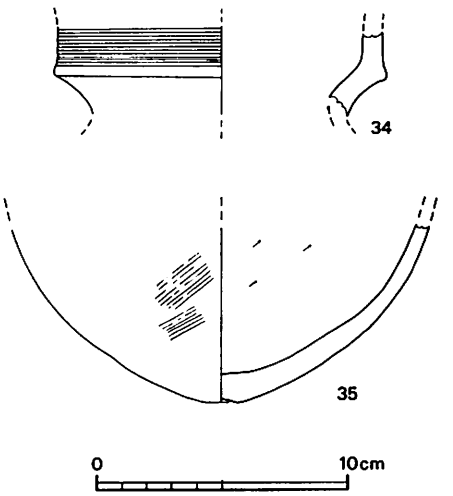


第 35 図　SK 1・2 実測図 (1/30)

出土遺物（第 36 図）

34 は二重口縁の甕形土器である。口縁端部を欠くが，外面には櫛描文がある。調整は外面はヨコナデである。

35 は僅かに凹む底部片である。調整は外面は斜め方向のハケメで，内面はヘラケズリである。

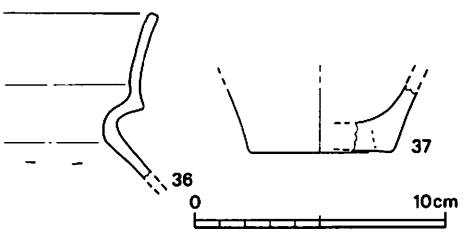


第 36 図　ＳＫ２出土遺物実測図 (1/3)

(4)　溝

ＳＤ１・２（第 23 図）

調査区の北西側に位置し，ＳＢ１の約１ｍ北側に存在する溝で，２本は平行している。後世の削平のためＳＢ１付近で一旦途切れ，さらに斜面下方に続いている。ＳＤ１の規模は，長さが推定で 9.0 m，幅は 30～50 cm，深さ 5～7 cm である。ＳＤ２の規模は長さが推定で 14 m，幅は 30～40 cm，深さ 5 cm 前後である。両溝とも底面は比較的平坦である。溝内の覆土は黒褐色土の単一層で，遺物は出土していない。



第 37 図　ＳＤ３出土遺物実測図 (1/3)

ＳＤ３（第 26 図）

調査区のほぼ中央に位置し，ＳＢ2a・2b・3 を取り囲むように西から東へ弧状にめぐる溝で，ＳＤ4a・4b と重複している。斜面下方の調査区外へも延びるため長さは不明であるが，規模は現存長約 20 m，幅 30～60 cm，深さ 10～25 cm である。断面は「U」字状で底面は比較的平坦である。覆土は上から黒褐色粘質土，黄褐色粘質土，黒褐色粘質土の順で，上層には炭化物を若干含み，黄褐色粘質土で埋めているようである。ＳＤ4a・4b との新旧関係は本溝がＳＤ4a・4b を切っており，本溝が新しい。遺物は上層から弥生時代終末から古墳時代初頭の甕形土器口縁部，弥生土器の底部片が出土している。

出土遺物（第 37 図）

36 は二重口縁の甕形土器の口縁部片である。擬口縁から外反して立ち上り，端部は矩形である。調整は口縁部内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。

37 は平底の底部片である。調整は内面がナデで，外面は摩滅のため不明である。

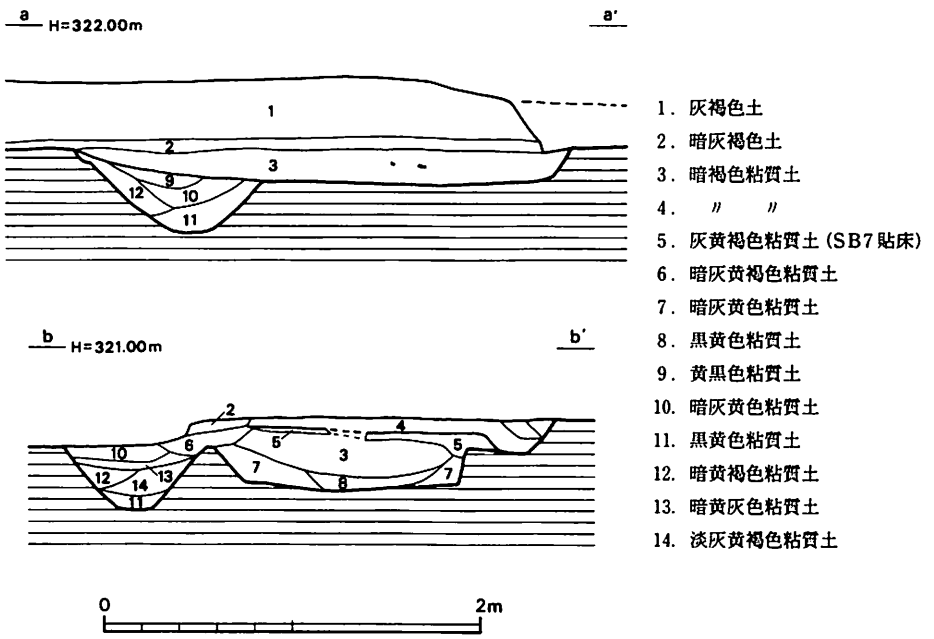
SD4a・4b（第26図）

調査区の西端から東端にかけて弧状にめぐる溝である。調査区の西側部分では2条が重複して存在する。SB2aの北東付近は削平のため確認できず一旦途切れるが，調査区東側のSB4付近では，2条の溝は約0.8m離れて調査区外に延びている。SB2a・2b・4・6・7及びSD3と重複している。

SD4aの規模は，確認できた長さが72mで，調査区の西側部分で幅2.5m，深さ13～15cm，東側部分では幅1.5m，深さ5～10cmである。底面はほぼ平坦で，斜面に沿って傾斜する。覆土は自然堆積で，遺物は弥生時代後期の土器が覆土中から出土したほか，SB4と重複する部分の底面付近から出土した。SB4・7との新旧関係は，SD4aの上面にSB4・7の床面を形成していることから，本溝がSB4・7よりも古い。

SD4bの規模は確認できた長さが60mで，調査区の西側部分では幅1.0m，深さ25～40cm，調査区の東側部分では幅1.0～1.5m，深さ約5cmで，SB2a・2bの東側付近では削平のため確認できなかった。底面はほぼ平坦で，斜面に沿って傾斜する。覆土は人為的に埋めたような状況を示し，遺物は弥生時代後期の土器が覆土中から出土した。

SD4a・4bの新旧関係は土層の堆積状況からSD4bが古い。また，SB2a・2bとの新旧関係は本溝がSB2a・2bに切られており，本溝が古い。



第38図　SD4a・4b土層断面実測図（1/40）

出土遺物（第39・40図）

38～57は甕形土器で，口縁部～胴部上半の破片である。

38・39・43は口縁部外面に凹線文を施すもので，38・39は3条，43は2条である。38は頸部にヘラ状工具による刺突文が，43は頸部に4条の櫛描波状文がめぐる。調整は口縁部内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。38の口縁部外面には煤の付着がみられる。

40～42は口縁部外面に幅の広い櫛歯状工具による凹線状のもので，断面は明瞭な凹みを残さない。40・41は4条，42は3条である。41は口縁部が外反するもので，端部は丸い。頸部には櫛歯状工具による刺突文がめぐる。調整は内外面ともナデであるが，42の胴部内面は横方向のヘラミガキである。

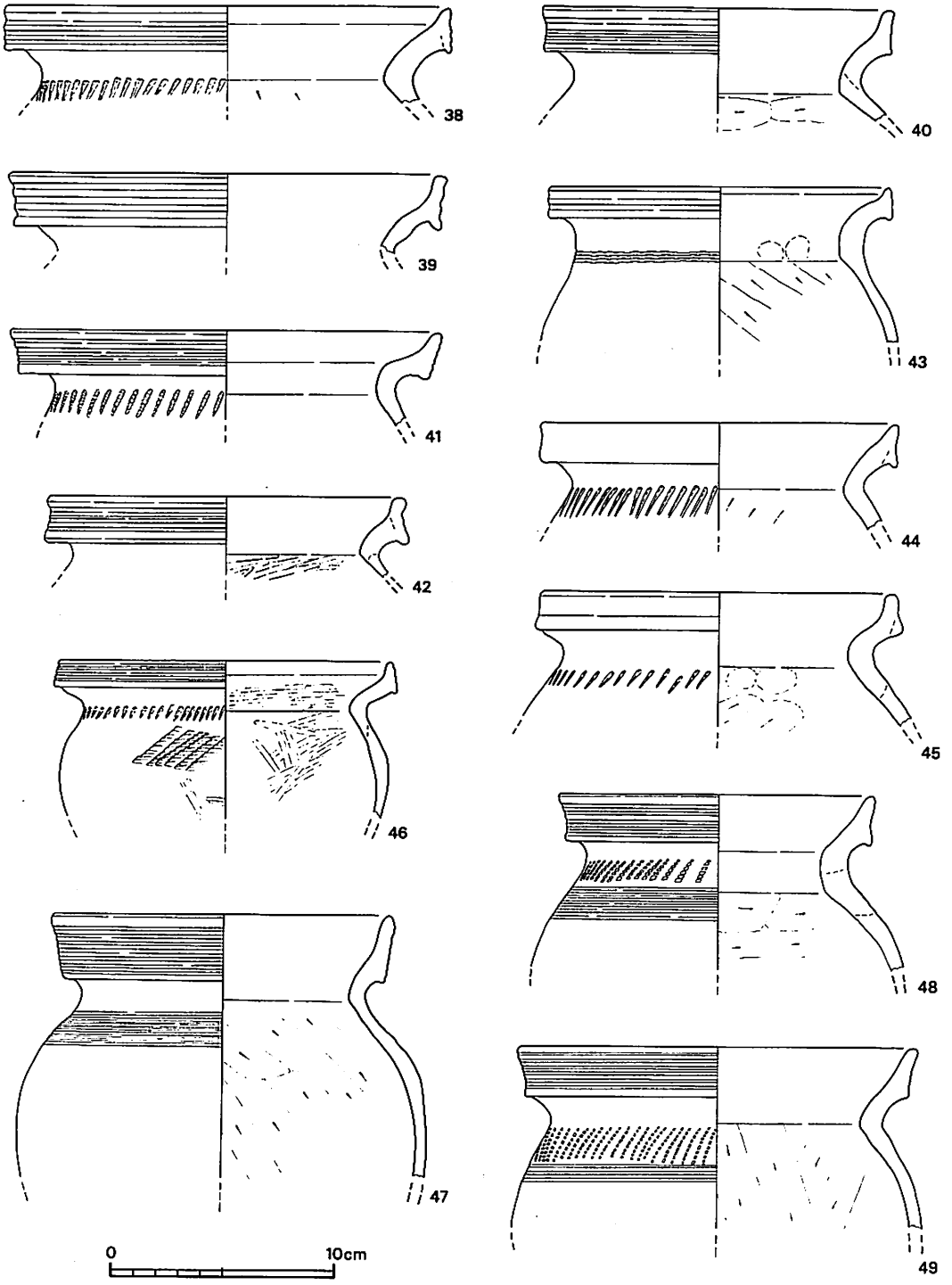
44・45は口縁部外面がナデのものである。44はほぼ直立する。また45はやや内傾する口縁部で，端部は丸い。いずれも頸部下にヘラ状工具による刺突文がめぐる。調整は内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリで，45の頸部内面には指頭圧痕が残る。

46～57は口縁部外面に5条～9条の櫛描文がめぐる。46は口縁部が内傾，立ち上りは短い。胴部最大径は上位にある。頸部にヘラ状工具による刺突文を，その下にはハケ状工具による押引文を施す。調整は口縁端部がヨコナデで，口縁部内面は横方向の，胴部内面及び外面の一部は斜め方向のヘラミガキである。47～57は口縁部が直立または外反し，立ち上りが長い。頸部～頸部下にヘラや櫛歯状工具による直線文を施すもの（47・50），ヘラ状工具による刺突文がめぐるもの（51）や貝殻腹縁による刺突文がめぐるもの（54），櫛描波状文がめぐるもの（52），櫛歯状工具による刺突文がめぐるもの（53・57），またその下に櫛描直線文を施すもの（48・49），ヨコナデのみのもの（55・56）などがある。調整は口縁部は内外面ともヨコナデであるが，内面がヘラミガキのもの（50）もある。胴部内面は横～縦方向のヘラケズリである。57の調整は胴部内面の上方と外面がヘラミガキである。胴部下半はヘラケズリである。

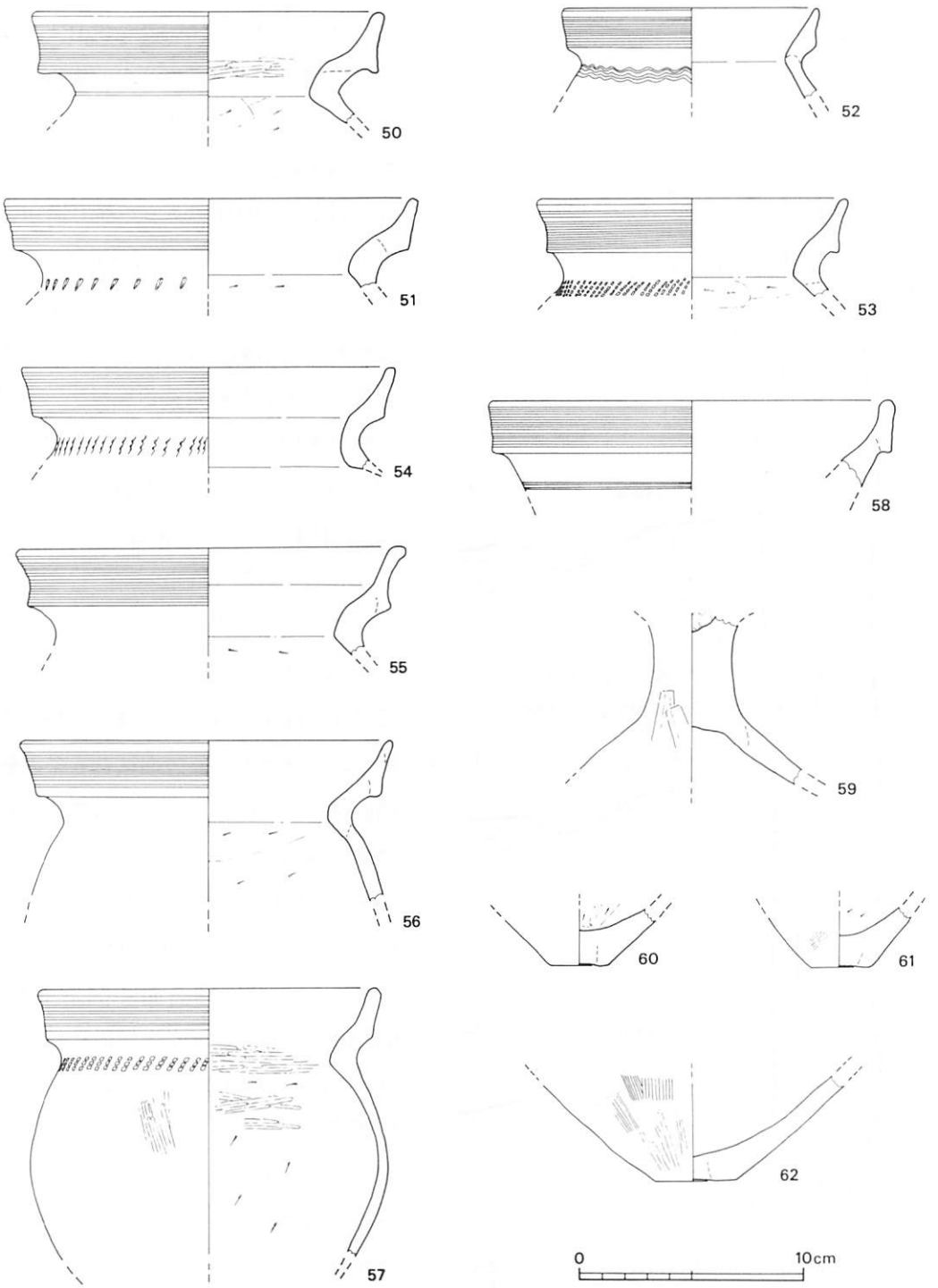
58は器台形土器の口縁部で，口縁部外面に8条と口縁部下に2条の櫛描文がめぐる。調整は内外面ともヨコナデである。

59は高杯形土器の脚部で，端部を欠く。裾部は緩やかに拡がり，柱状部は中実である。調整は摩滅のため不明であるが，外面には赤色顔料が見られる。

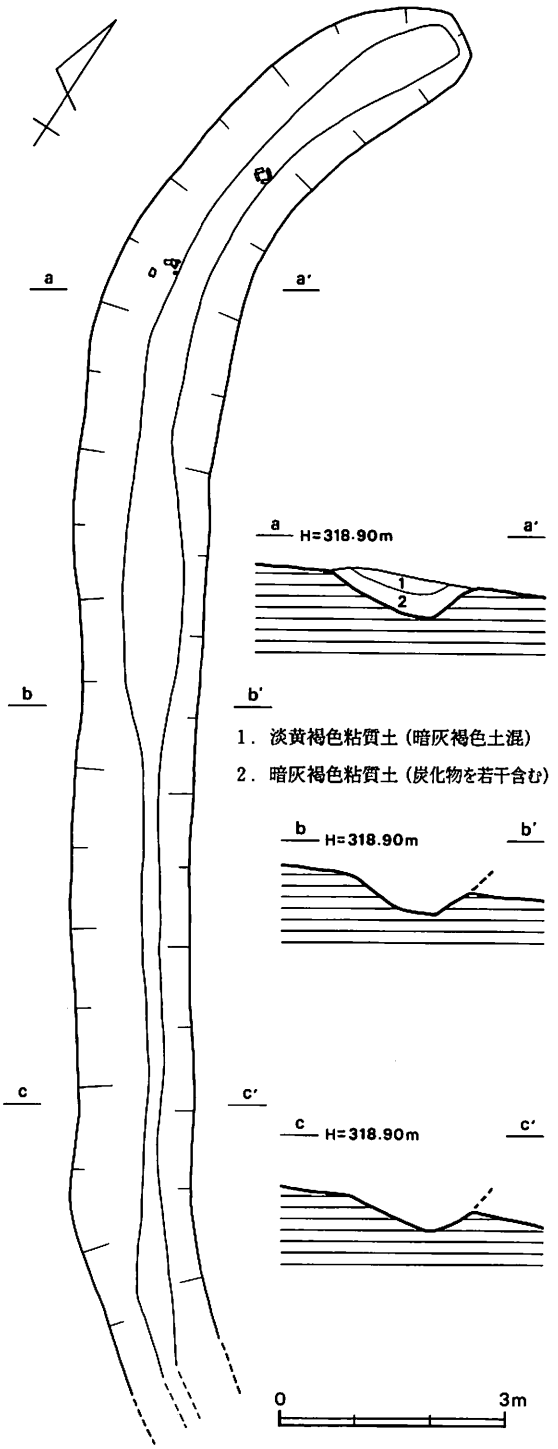
60～62は底部片である。いずれもやや凹み底で，径は60が1.6 cm，61が2.6 cm，62が3.4 cmである。調整は外面は61・62がハケメで，62はハケメの下方はヘラミガキである。内面はヘラケズリである。



第39図　SD4a・4b出土遺物実測図Ⅰ (1/3)



第40図　ＳＤ４ａ・４ｂ出土遺物実測図 II (1/3)



第41図　SD5実測図（1/100）

SD5（第41図）

調査区の東端に位置し，SB4と重複する溝である。調査区の北東端で始まり，南東部分は調査区外に延びる。規模は現存長19m，幅1.6～2.0m，深さは35～50cmである。溝の横断面は「V」字状で，底面はSB4のP4付近がもっとも高く，斜面に沿って北側と南東側に次第に低くなっている。溝の覆土は上層が淡黄褐色粘質土，下層が暗灰褐色粘質土で，遺物は弥生時代後期の土器がほとんど上層から出土した。SB4との新旧関係は不明である。

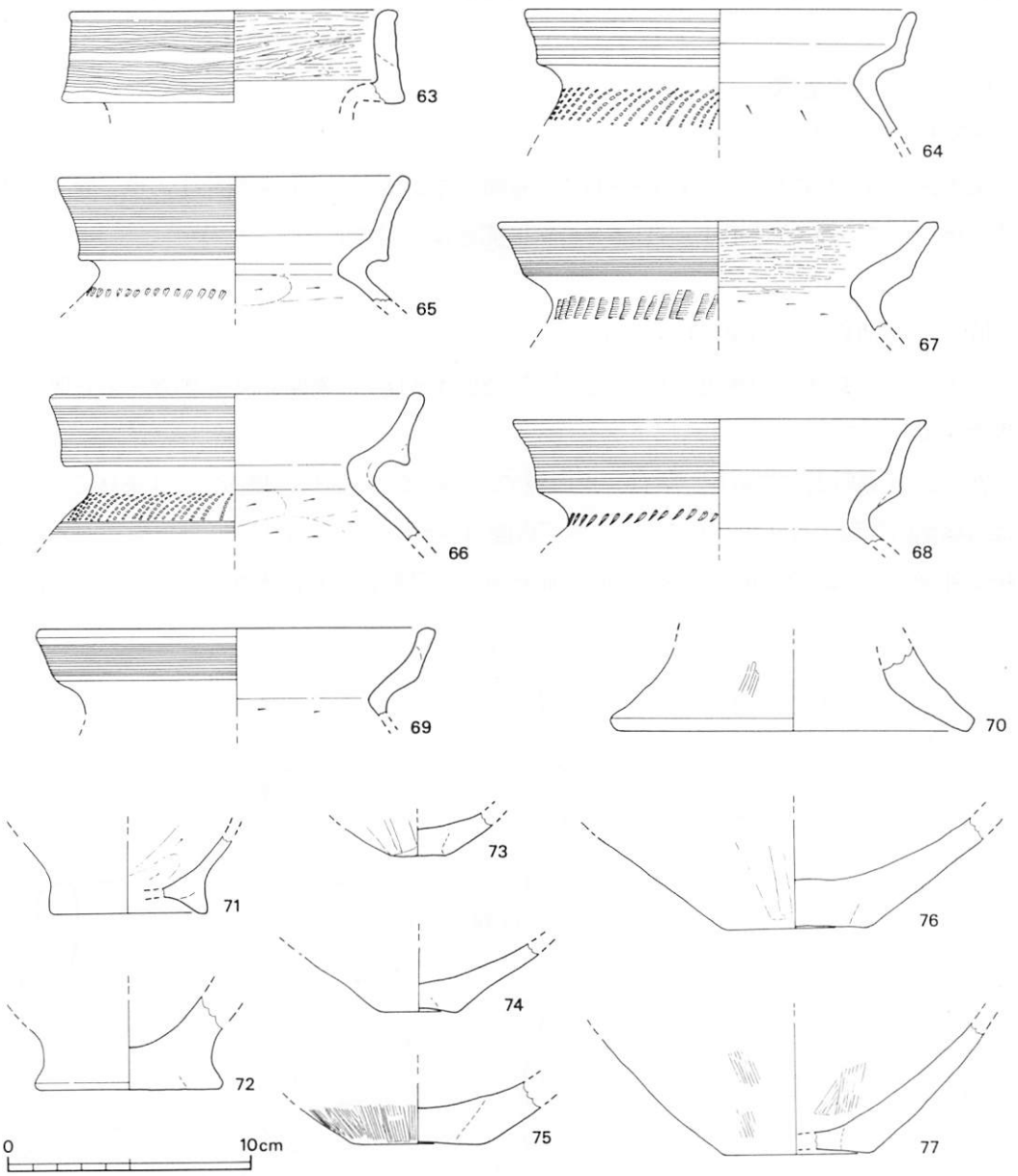
出土遺物（第42図）

いずれも覆土中から出土した。

63は壺形土器の口縁部片で，復元口径は13.4cmである。口縁部はやや内傾し，端部は丸い。外面には6条の櫛描直線文が2段にめぐる。調整は内面は横方向のヘラミガキである。

64～69は二重口縁の甕形土器の口縁部～頸部片で，64～66は口縁部がやや外反する。口縁部外面に64は5条，65は9条，66は13条の櫛描文がめぐり，口縁端部は丸い。64・66は頸部下に櫛歯状工具，65はヘラ状工具による刺突文を施す。また，66には刺突文の下方に櫛描直線文が3条残る。調整は内外面ともヨコナデで，64・65の外面には煤が付着している。胴部内面はヘラケズリである。67～69は口縁部が大

きく外方に開き，69はやや短い。口縁部外面に67は8条，68は9条，69は6条の櫛描文がめぐる。口縁端部は69が丸く，67は面を持つ。施文は67が頸部に櫛歯状工具による押引文，68は頸部にヘラ状工具による刺突文を施す。調整は内外面ともヨコナデで，67の内面は横方向のヘラミガキである。胴部内面はヘラケズリで，68の外面には煤が付着している。70は器台形土器の裾部で，底径は14.2cmである。端部は丸く，調整は外面にヘラミ



第42図　SD5出土遺物実測図(1/3)

ガキが一部残る。

71～77 は底部である。71 は貼付けによる上げ底，72 は突出した平底である。底径は 71 が 6.4 cm，72 が 7.6 cm で，調整は内外面ともナデである。71 の内面はヘラケズリである。73 は平底で，74～77 はやや凹み底である。調整は，外面は 73・76 が板状工具によるナデで，75・77 はハケメである。内面は 77 がハケメで，そのほかは摩滅のため不明である。底径は 73 が 2.2 cm，74 が 3.0 cm，75 が 5.4 cm，76 が 6.0 cm，77 が 6.2 cm である。

(5) 性格不明遺構

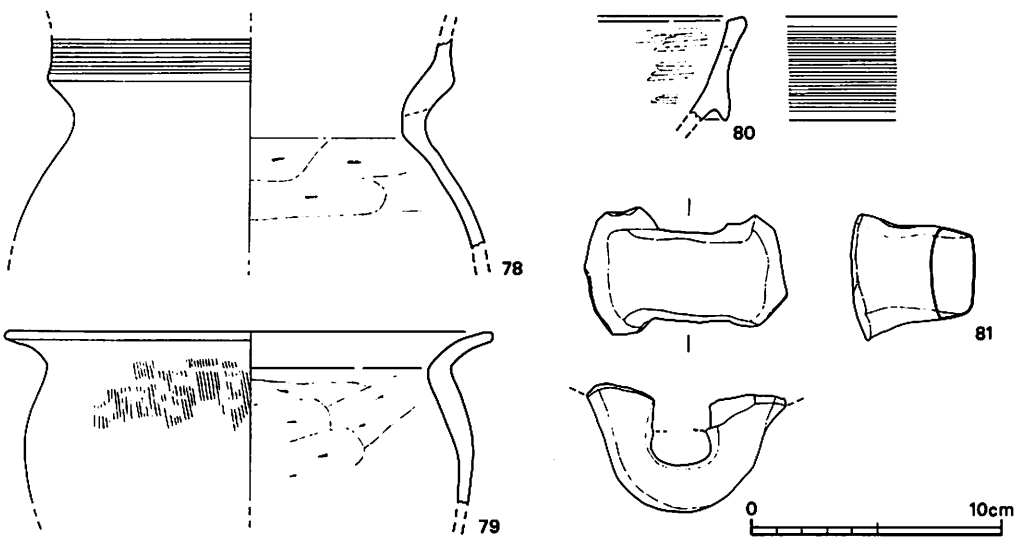
ＳＸ１（第 23 図）

調査区の西側に位置し，ＳＢ１・ＳＤ２と重複している。覆土は黒褐色土の単一層で，遺物は出土していない。ＳＢ１・ＳＤ２との新旧関係は不明である。

(6) その他の遺物（第 43・44 図）

78・79 は調査区内の覆土中からの出土で，80 はＳＤ４の南側，81 は調査区の北側での表面採集である。

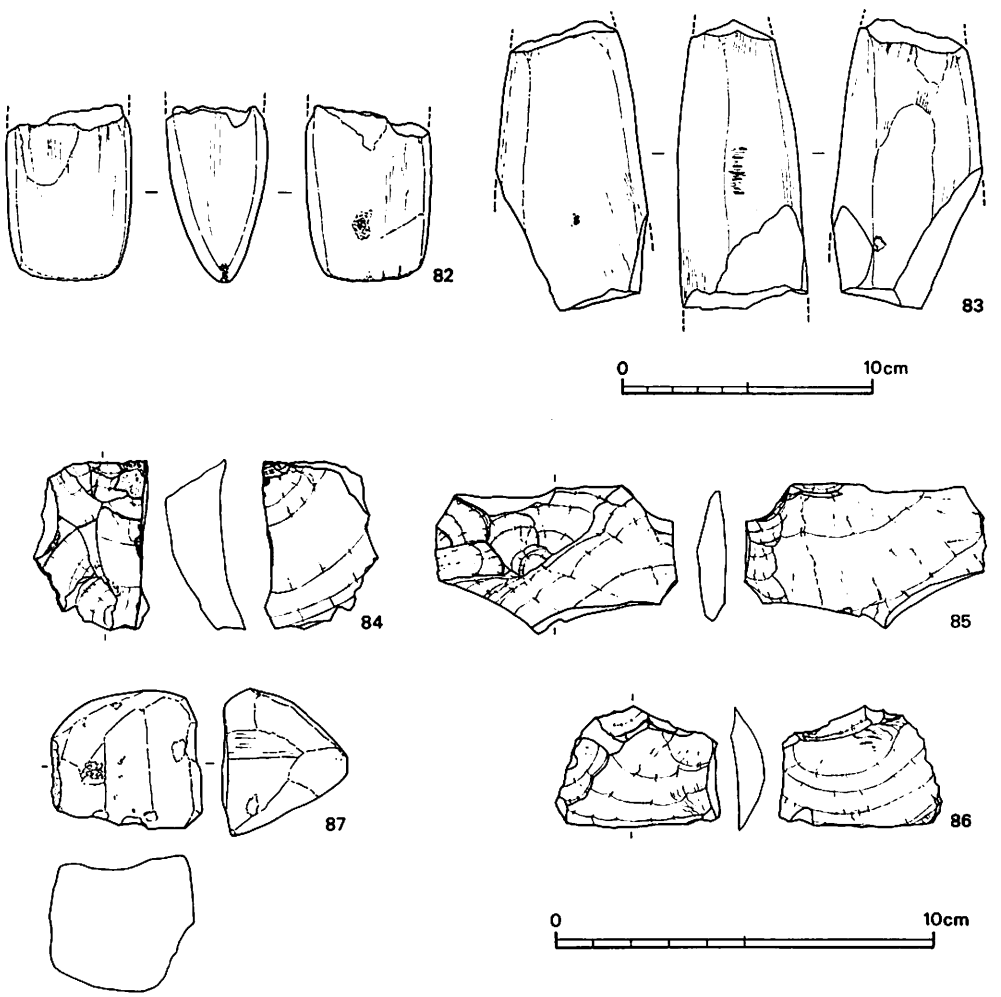
78・79 は甕形土器である。78 は二重口縁で，口縁部の外面には櫛描文が 4 条残る。調整は口縁部内外面ともヨコナデである。胴部内面はヘラケズリである。79 は口縁部が水平気味に外反するもので，復元口径は 19.2 cm である。調整は口縁部内外面がヨコナデで，胴



第 43 図　調査区内外出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

部外面は縦方向のハケメ，内面はヘラケズリである。80 は弥生土器器台と思われる口縁部で，外面には 14 条の櫛描文がめぐる。調整は内面がヘラミガキで，内外面に赤色顔料の塗布が見られる。81 は土師器の甑形土器の把手で，環状をなす。断面形は台形状で，調整はナデである。

82・83 は磨製石斧で，82 は調査区の覆土中から，83 は試掘の際に出土した。82 は定角式の刃部で，基部を欠損する。現存長 6.8 cm，幅 4.9 cm で，断面形は楕円形である。先端に敲打痕が残る。83 は基部及び刃部を欠損する。長さ 11.3 cm，幅 4.6 cm で，断面形は楕円形である。上部に紐擦れがみられる。84～86 は剝片で，いずれも調査区西側の覆土中から出土した。84 は長さ 4.4 cm，幅 2.9 cm，85 は長さ 3.5 cm，幅 6.2 cm，86 は長さ 3.2 cm，幅 4.3 cm である。87 は軽石製の石製品で，幅 1.2 cm と幅 0.8 cm の摩滅痕が 2 面残る。



第 44 図　調査区内外出土遺物実測図 II (1/3，84～87 は 1/2)

第V章　ま　と　め

1　本郷遺跡

(1)　弥生時代前期の土器について

本遺跡から出土した土器には壺・甕形土器などがあり，量的には壺形土器の占める割合が多い。とりわけＳＫ１からは多量に一括で出土したが，破片が多く器形を窺える土器は少ない。この土器群の壺形土器の特徴を見ると，大型と小型のものがあり，前者の口縁部内面には貼付の突帯が付く。後者は「削出突帯＋ヘラ描沈線」手法とヘラ描沈線のみの土器が主体を占める。「削出突帯＋ヘラ描沈線」のなかには，沈線を３～４条入れ，その上下の沈線を押さえて消し，削出突帯とするものを含んでいる。さらに，沈線を押さえて低い削出突帯を浮き上がらせる削出突帯手法の退化したものがある。沈線数は１～３条が主体をなし，５・６条と多条化するが，６条を超えることはない。また，一部に削出突帯のみ，貼付突帯手法のものもあるが量的には極く僅かである。文様を見ると，頸部・胴部のヘラ描沈線に縦方向の沈線を加え，格子目状とするもの，頸部のヘラ描沈線間に円形刺突文，胴部に２～４条の「x」字状重弧文及びやや退化した重弧文を施すものがある。次にＳＫ２出土土器について見ることにする。壺形土器はヘラ描沈線のみで，削出突帯手法のものはない。沈線数は２～４条である。甕形土器は口縁端部に刻目を持つものと持たないものがあり，頸部下位に３～５条のヘラ描沈線をめぐらす。壺形土器の技法から見ると，ＳＫ２出土土器群は削出突帯はみられないことから，ＳＫ１出土土器群よりやや後出といえる。しかし，資料的に少ないことやＳＫ１出土土器群では，削出突帯とヘラ描沈線が共伴していることからここでは同時期としてとらえておきたい。

以上，このような土器の特徴から周辺地域に類例を求めると，山県郡大朝町横路遺跡[1]，同町岡ノ段Ａ及びＣ地点遺跡[2]，同郡千代田町青木原遺跡[3]，同町塚迫遺跡[4]などから出土した土器群がある。青木原遺跡出土の土器群は，貼付突帯手法や沈線の多条化がみられることから，本遺跡出土土器群と類似している。また，横路遺跡では，「段」手法の土器や木葉文のある土器などやや古い様相を示す土器群と本遺跡出土の土器群と類似した土器群の二者があり，後者が主体をなしている。したがって本遺跡出土の土器群は，横路遺跡出土の一部の土器群より後出であり，横路遺跡出土の削出突帯手法の土器群と青木原遺跡，塚迫遺跡出土土器群などとほぼ同時期に位置づけられよう。

ところで，最近，県内東部の遺跡から出土した弥生時代前期の土器を中心に，伊藤実氏

によって編年案[5]が提示されている。それによると，弥生時代前期の土器をヘラ描沈線技法の変化をもとに1期から4期に分け，「『段』の盛行→『段』の退化・ヘラ描文様の盛行→『削出突帯』の出現・盛行→『削出突帯』の退化・ヘラ描沈線の盛行」という四段階を設定している。この編年案に本遺跡出土の土器群を当てはめると，重弧文や削出突帯を持つ土器の存在などから，3期に相当すると考えられる。因みに，藤田憲司氏の中部瀬戸内地域の編年[6]では「後半a」，井藤暁子氏の畿内編年[7]では「Ic」に相当する。

また，瀬戸内地域で見られる貼付突帯と多条沈線の壺形土器，逆「L」字状口縁と多条化沈線の甕形土器を特徴とする土器群，言い換えれば弥生時代中期に繋がる土器群は，山間部地域では現在のところ発見されておらず，4期とされる土器群の様相は依然不明である。今後資料の増加が待たれるところである。

(2) 古墳時代の土器について

本遺跡で検出した竪穴住居跡については，第III章で述べたとおりである。ここでは竪穴住居跡から出土した土器群について位置づけを行ってみたい。

本遺跡の土器は，SB1a，SB2a，SB3の各住居跡から出土した壺・甕・高杯・鉢形土器の土師器とSB3から土師器に伴って出土した須恵器（杯蓋・杯身）などある。しかし，量的には少なく，しかも器形を窺えるものも僅かで，時期や土器の組成を考える場合に困難な作業を伴う。これら出土土器群の特徴をみると，SB1aから出土した土師器甕形土器は，口縁端部が内厚する畿内の「布留式[8]」土器に類似するものがある。また，二重口縁を持つ土器が見られる。SB2aからは二重口縁を持つ土器が出土している。SB3出土の土師器は，須恵器を共伴し，二重口縁を持つ土器は見られない。甕形土器の口縁部は，端部付近で屈曲しさらに外方へ拡がり，やや新しい様相を持っている。須恵器の杯身は，底部が丸くなり小型化していることから，陶邑古窯跡群の「TK23型式[9]」のものに類似している。したがって，SB2aは住居跡の新旧関係からもSB3に先行し，「布留式」に相当する時期，SB3は「TK23型式」並行ということになり，SB1a・2aは古墳時代前期後半，SB3は古墳時代中期後半に位置づけられよう。

上記のような土器の類例を求めると，県内では当該期の土師器の資料はあまり発見されておらず深安郡神辺町御領遺跡[10]，庄原市大成遺跡[11]，同市鍬寄遺跡[12]，同市境ヶ谷遺跡[13]などで出土している。とりわけSB1a出土の「布留式」に類似の甕形土器は，ほとんど類例がなく御領遺跡SD7出土土器群のなかに見出されるにすぎない。なお，高田郡高宮町寸志名遺跡[14]では，いわゆる布留式の甕形土器は出土していないが，本遺跡SB1a・2aの時期を類推するてがかりとなる資料が見られる。即ち，同遺跡では10数軒の住居跡が検出さ

れ，2号住居跡は，本遺跡ＳＢ1a・2aなどと類似する隅丸方形を呈し，出土した土師器は，山陰地方の影響を強く受けた土器（II類）で，報告者は「鍵尾II」並行，また，4・5・13号住居跡から出土した土師器（III類）は，「地域色が消滅し畿内的色彩が現れいわゆる布留式土器の範疇に入る」とし，そして，1号住居跡は方形の住居跡で，出土した土師器をIV類とし，II類→III類→IV類の変遷を設定している。このような状況から，本遺跡ＳＢ1a・2a出土の土師器は，II類の「鍵尾II」に後出し，概ねIII類に比定されよう。次にＳＢ3出土の須恵器について見ることにする。大成遺跡では，ＳＢ34から「ＴＫ208型式[9]」相当の須恵器が土師器と共伴して出土している。また，境ヶ谷遺跡では，「Ｉ期」とするＳＢ18出土土師器群に「ＴＫ47型式[9]」相当の須恵器が共伴している。したがって，本遺跡ＳＢ3は，「ＴＫ23型式」の須恵器が出土していることから，大成遺跡ＳＢ34より後出し，境ヶ谷遺跡ＳＢ18に先行すると考えられよう。

以上，出土土器について位置づけを行ってみたが，資料的に乏しいため充分な比較・検討を加えることができず，さらに，調査範囲が限定されたこともあって，当該期の集落構造などに迫ることも不可能であった。ただ，調査区外で当該期の住居跡や土壙を確認していることから，周辺も含めて弥生時代から古墳時代にいたる集落が営まれていたと推定されよう。（道上）

註

(1) 横路遺跡調査団編『横路遺跡』 昭和57(1982)年

(2) 平成元(1989)年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し，袋状竪穴などの遺構を検出している。

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『青木原遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集　昭和61(1986)年

(4) 広島県教育委員会「塚迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57(1982)年

(5) 広島県立埋蔵文化財センター編『亀山遺跡―第5・6次発掘調査概報―』 広島県教育委員会　昭和61(1986)年

(6) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号　倉敷考古館　昭和57(1982)年

(7) 井藤暁子「入門講座弥生土器―近畿1―」『考古学ジャーナル』№155　ニュー・サイエンス社　昭和56(1981)年

(8) ここでいう「布留式」土器は，寺沢氏編年の「布留1式」である。奈良県立橿原考古学研究所編『矢部遺跡』 奈良県教育委員会　昭和61(1986)年

(9) 田辺昭三編『陶邑古窯址群Ｉ』 平安学園考古学クラブ　昭和41(1966)年

(10) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡 —神辺農業協同組合御野支所建設にかかる—』 昭和55(1980)年

(11) a 三玉浩正編『庄原市大成遺跡の発掘調査』大成遺跡調査団 昭和61(1986)年

b 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第82集 平成元(1989)年

(12) 潮見 浩「広島県庄原市鍬寄遺跡の調査」『私たちの考古学』第5巻 第1号 考古学研究会 昭和33(1958)年

(13) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群』 昭和58(1983)年

(14) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 昭和54(1979)年

2　焼け遺跡

(1)　出土土器について

本遺跡から出土した土器は住居跡や溝の覆土中から主に出土したもので，遺構に直接伴うものは少量である。また完形に復元できるものは僅かで，破片のものが多い。さらに出土量は，遺構が削平を受けていることもあってさほど多くない。出土土器は口縁部の特徴から次のようにⅠ～Ⅲ類に分類が可能である。

Ⅰ類は口縁部が上下に拡張するものである。外面に凹線文や幅の広い櫛描文がめぐるもの，または無文のものなどがみられ，口縁部が外反気味のものとやや内傾するものとがある。頸部に櫛歯状工具やヘラ状工具による刺突文を施すもの，櫛描波状文をめぐらすものもある。口縁部はヨコナデ調整，内面はヘラミガキのものもみられる。胴部内面はヘラケズリである。SB 4・SK 2・SD 4 出土の 28・34・38～46 がこれにあたる。Ⅱ類は二重口縁のもので，口縁部が直立または外傾するものである。外面には 5～9 条の櫛描文がめぐり頸部～頸部下に櫛歯状工具・ヘラ状工具・貝殻腹縁による刺突文や櫛描直線文・波状文がめぐる。SB 1・SD 4・SD 5 出土の 1・2・47～58・64～69 がこれにあたる。このうち 65～69 は口縁部が長く外反しており，Ⅱ類の中では新しい様相を示すものと思われる。Ⅲ類は長く外反する二重口縁で，口縁部外面はヨコナデ調整である。胴部は倒卵形をなし，底部は丸底である。外面はハケメ調整で，頸部下に櫛描直線文・波状文がめぐる。胴部内面はヘラケズリで，底部内面には指頭圧痕がみられる。SB 2a・2b，SD 3 出土の 8・17～20・22・24・25・36 がこれにあたる。

以上のように大きく 3 類に分けたが，県内での類例を求めると，Ⅰ類には山県郡大朝町横路遺跡 SK 50[1]出土のもの，Ⅱ類には高田郡高宮町白鳥遺跡[2]，横路遺跡 SK 42 出土のもの，Ⅲ類は該当する資料が少ない。安芸北部の弥生時代後期前半の土器についてみると，上下に拡張した口縁部はやや内傾し，外面に凹線文がめぐるが，Ⅰ類については口縁部は直立～外反気味で，口縁部外面の凹線文も退化したものや櫛描文が施されているなど，後期前半のものよりも新しい様相を示している。また，Ⅱ類については，口縁部は上方に延びて二重口縁となるが，白鳥遺跡出土のものよりも口縁部が長く外反するものなど，新しい様相を持つものもみられることから，弥生時代後期中葉～後半頃と考えられ，山陰地方の九重式から的場式[3]に併行するものと思われる。Ⅲ類については，県外では鳥取県福市遺跡吉塚 SB 53[4]出土のものなどと形態，手法的に類似し，小谷式[5]よりは古く位置付けられるものと考えられる。

以上のように出土土器を大まかに分類した。当地域においては当該期の土器の分類例が少ないこともあり問題点もあるが，将来的にはさらに細分される可能性を含んでいる。

本遺跡で確認した遺構のうち，Ⅰ類出土のものはSD4，Ⅱ類はSB1・4，SD4・5，SK2で弥生時代後期中葉～後葉，Ⅲ類はSB2a・2b，SD3で弥生時代終末～古墳時代初頭と思われるが，Ⅰ～Ⅲ類は遺構の重複関係からみると，さらに3～4期に分れるものと思われる。

このほか，特徴的な土器として，SB2aの壁溝内から山陰系の甑形土器が出土しているが，県内ではこの他，高田郡高宮町寸志名遺跡[6]，同町向原遺跡[7]，庄原市永宗遺跡[8]，高田郡吉田町明官地廃寺跡[9]，三次市[10]等で確認されている。一部のものを除いては，いずれも古墳時代初頭の住居跡から，一個体が押しつぶされたような状況で見つかっており，特徴的なあり方を示している。

(2) 竪穴住居跡について

本遺跡で確認した竪穴住居跡は7軒あるが，削平が著しく，調査区外に拡がるものが多いことなどから，全容が明らかなものは少ない。平面形はいずれも円形と思われ，主柱穴は4・6・9個である。山間部の弥生時代後期～古墳時代初頭の住居跡の平面形を概観すると，山県郡千代田町歳ノ神遺跡群[11]では弥生時代後期前～中葉が円形，甲奴郡上下町行年遺跡[12]では弥生時代後期前半が隅丸方形，高田郡高宮町名広遺跡[13]では弥生時代後期前半は円形，古墳時代初頭は隅丸方形，古墳時代初頭の永宗遺跡，寸志名遺跡，高田郡美土里町上里遺跡[14]では円形となっており，円形や隅丸方形のもので構成されているが，本遺跡も同様なあり方を示している。県内では弥生時代後期の住居跡の平面形は円形・隅丸方形・方形と多様化しており，古墳時代には次第に定型化し，方形になるようであるが，山間部においても同様なあり方が窺え，古墳時代初頭までは円形のものがみられるようである。

SB2a・2bはそれぞれ屋外に延びる溝を伴っており，SB2aは中央の炉跡から，SB2bは壁溝からはじまる。それぞれ斜面下方に延びること，底面が斜面の下方に向かって次第に低くなっていることなどから，本遺跡では住居跡に伴う排水溝と考えられる。同様な排水溝を持つものは，県内では福山市手坊谷遺跡[15]，同市池の内遺跡[16]，広島市山手遺跡A地点[17]，東広島市浄福寺2号遺跡[18]，三次市三段畑遺跡[19]などでみられる。いずれも住居跡中央の炉跡や壁溝から延びており，本遺跡と同様なあり方を示している。また，岡山県小中遺跡[20]，同県天神原遺跡[21]，同県旦原遺跡[22]などでは住居の外側で暗渠状になっているものも確認されている。本遺跡では排水溝を伴う住居跡を2軒検出したが，天神原遺跡のようにほとんどの住居跡に排水溝を伴った遺跡もみうけられる。全国的には北部九州から畿内・

中部，特に中国地方山間部に多くみられるようで，時期的には弥生時代中期～古墳時代まで存在しているようである。

(3) 溝について

SD3はSB2a・2b・3を囲むように斜面の上方に存在し，底面は斜面下方の東側にむかって低くなる。3軒の住居跡のうちSB3が最も古く，SD3は形状から見ると最も西側のSB3を意識しているようで，SB3に伴うものと思われる。ただ，SD3の土層堆積状況をみると，一旦人為的に埋めてさらに掘削しているようにも窺え，SB3より新しいSB2a・2bの時期でも存続していた可能性もある。県内では手坊谷遺跡，寸志名遺跡で類例が求められ，本遺跡のものと同様に斜面の上方に設け，住居跡を取り囲んでいる。斜面下方に向かって延びていることなどから，住居への防水を目的とした溝と考えられる。

次に，大溝SD4a・4bについては，溝の東側部分がSB2a・bに切られ，また後世の削平のため一旦途切れるなど，不明な部分が多い。確認できた規模はSD4aが長さ72m，幅1.5～2.5m，深さ5～15cm，SD4bは長さ60m，幅1～1.5m，深さ5～40cmであるが，SD4a又はSD4bに続くとみられる溝状の落ち込みが西側へ弧状になって約50m続いていることを確認しており，本来の規模はこれ以上あったものと思われる。なお，SB4と重複する部分の底面からSD4bよりも新しいII類の土器が出土している。前述のようにSD4a・4bの新旧関係はSD4b→4aであるが，2条の溝はほとんど時期差はないものと思われる。遺物は大部分が覆土中から出土しているが，SD4bの底面からI類の土器が，SD4aからはII類の土器が出土しており，弥生時代後期中葉～後葉のものと考えられる。

県内においては深安郡神辺町大宮遺跡[23]，同町亀山遺跡[24]で集落を囲む環濠が確認されている。環濠の時期は，亀山遺跡が前期，大宮遺跡が前期と中期のもので，環濠の性格や機能については防衛的性格や，一集落内における集団間を区別する性格が見られるようである。本遺跡は河岸段丘上にあって，西側高所は湧水や河川などは全くなく，大溝SD4a・4bが水利用とは考え難い。また，大溝SD4a・4bが弧状を描いて西側に続くことや，調査区の北側に住居跡が多く確認されていることからすると，大溝SD4a・4bは集落を囲んでいる可能性が高い。なお，これにかかわる集落の規模・内容等については明らかでなく，また，後世の削平を受けているため，不明な部分も多い。しかし，以上のような状況からすると，大溝SD4a・4bは環濠の範疇に入るものと考えられよう。なお，その性格については，一部を確認したのみのため不明である。

以上，主な遺構と出土遺物についての若干の検討を行った。

しかし，今回の調査では調査区が限られていたこともあって，遺跡の全容については明らかではないが，本遺跡では弥生時代後期中葉～古墳時代初頭の集落が確認できた。出土遺物をみると山陰地方の影響を強く窺うことができる。また，調査区の中央の大溝ＳＤ４a・4b は前述のように集落を囲む環濠の可能が考えられるが，調査区内ではこの溝に伴う集落は確認できなかった。しかし，試掘調査の際に調査区外の北側で住居跡が多数確認されていることや，ほ場整備事業施工中に調査区外の北側や西側にも住居跡と思われる部分が認められることなどから，これらの住居跡が大溝に関係する可能性が考えられる。

なお，試掘調査の際に確認されている遺構の位置や，このたび確認した大溝，ほ場整備事業施工中の調査区周辺で採集される遺物の状況などからすると，本遺跡は調査区の北側を中心に南西側へも拡がり，現在確認されているよりもさらに広範囲であると考えられる。

前述のように遺跡の全容を知ることはできないが，本遺跡のこのような規模・状況からすると，当地域における母村的な性格の集落で，眼下に流れる今田川によって開かれた耕地を生産基盤とする安定した集落であったと考えられる。なお，墳墓は確認されていないが，付近の丘陵上にその存在を考える必要があろう。

当地域において，この時期の集落について明らかになった遺跡としては，歳ノ神遺跡群，三段田遺跡[25]などがあるが類例が少なく，また墳墓については歳ノ神遺跡群，中出勝負峠墳墓群[26]，壬生西谷遺跡[27]などがあるが相対的に類例が少ない。そのため本遺跡を含めて集落と墳墓の関係等について述べることは困難である。今後の調査例の増加に伴って当時期の集落のあり方や，集落と墳墓の関係について明らかになるであろう。　　（沢元）

註

(1) 横路遺跡調査団『横路遺跡』 昭和57(1982)年

(2) 広島県教育委員会「白鳥遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 昭和54(1979)年

(3) 島根県教育委員会「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II 昭和52(1977)年

(4) 米子市教育委員会　米子市福市遺跡調査団『福市遺跡』 昭和43(1968)年

(5) 註(3)と同じ

(6) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 昭和54(1979)年

(7) 高宮町教育委員会『向原遺跡発掘報告会資料』 平成元(1989)年

(8) 広島県教育委員会　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗』 昭和57

(1982)年

(9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター編『明官地廃寺跡ー第4次発掘調査概報ー』 広島県教育委員会　平成2(1990)年

(10) 桑原隆博「三次市内出土の所謂「山陰型の甑形土器」について」『芸備』 第10集　昭和55(1980)年

(11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『歳ノ神遺跡群　中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集　昭和61(1986)年

(12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『行年遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第46集　昭和60(1985)年

(13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『名広遺跡ーB調査区ー』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第56集　昭和62(1987)年

(14) 上里遺跡・奥垣内城跡発掘調査団『上里遺跡・奥垣内城跡発掘調査概報』 昭和54(1979)年

(15) 広島県教育委員会「手坊谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 昭和51(1976)年

(16) 広島県教育委員会「池の内遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 昭和51(1976)年

(17) 広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 昭和52(1977)年

(18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが昭和61年度に調査を行い，現在整理中である。

(19) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三段畑遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第86集　平成2(1990)年

(20) 岡山県教育委員会「小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4　昭和50(1975)年

(21) 岡山県教育委員会「天神原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4　昭和50(1975)年

(22) 岡山県教育委員会「旦原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』8　昭和52(1977)年

(23) 広島県教育委員会広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『大宮遺跡第1次発掘調査概報』 昭和53(1978)年

広島県教育委員会『大宮遺跡第2～4次発掘調査概報』 昭和54～56(1979～1981)年

神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告』V 昭和61(1985)年

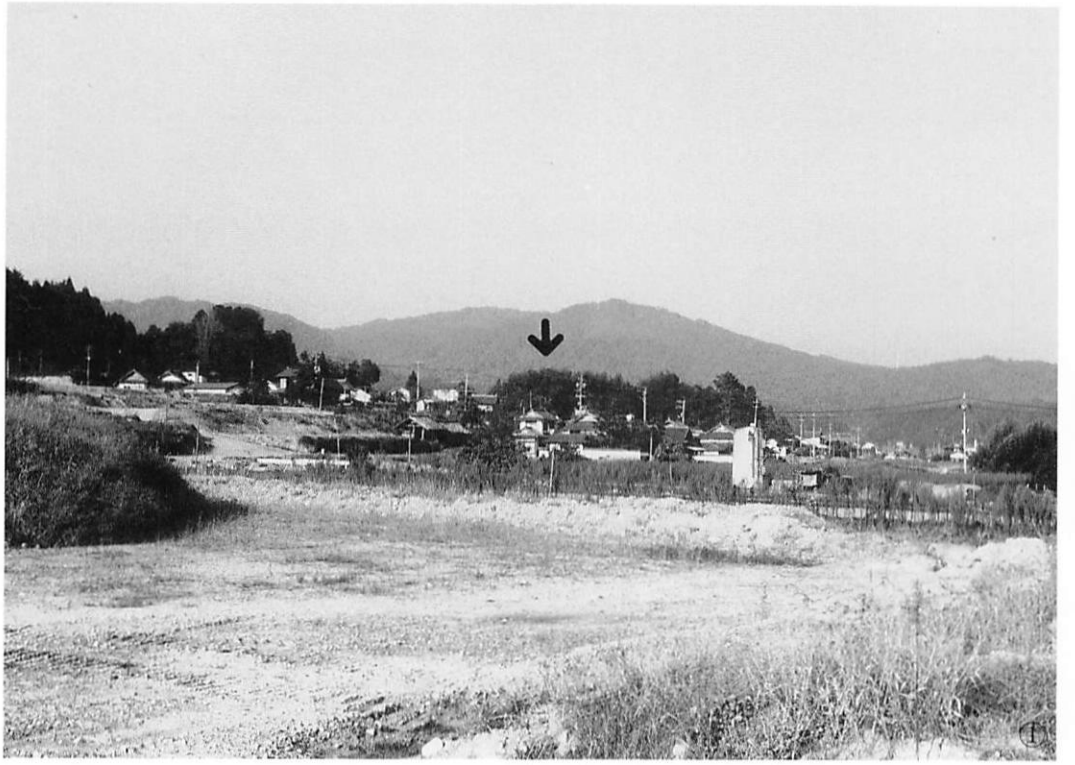
(24) 広島県教育委員会『亀山遺跡ー第1・2次発掘調査概報ー』 昭和57・58(1982・1983)年

広島県立埋蔵文化財センター編『亀山遺跡ー第3～6次発掘調査概報ー』広島県教育委員会　昭和59～61(1984～1986)年

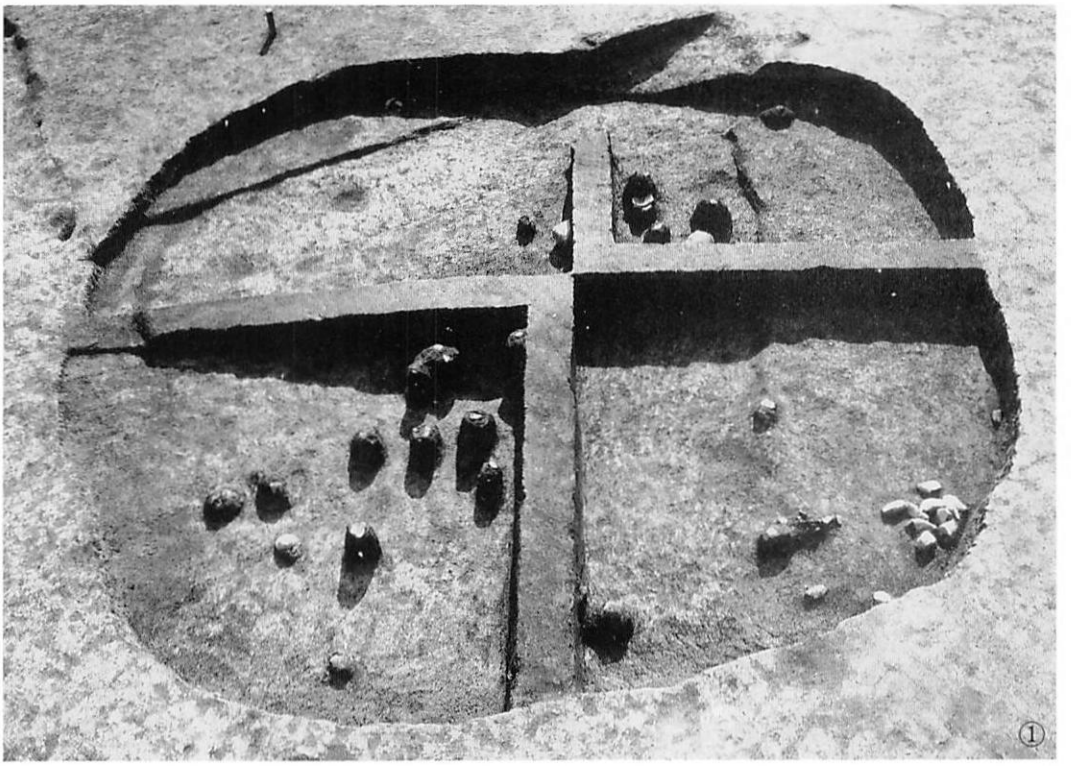
(25) 昭和63年に千代田町教育委員会の調査による。

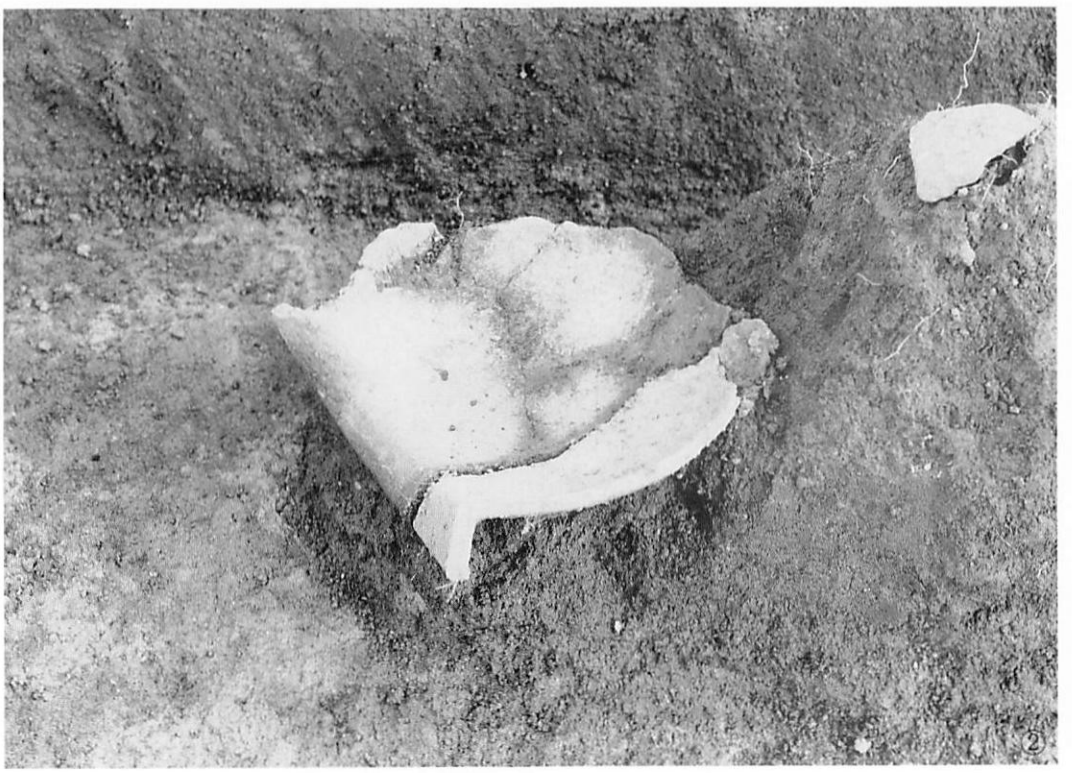
(26) 註(11)と同じ

(27) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『壬生西谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集　平成元(1989)年

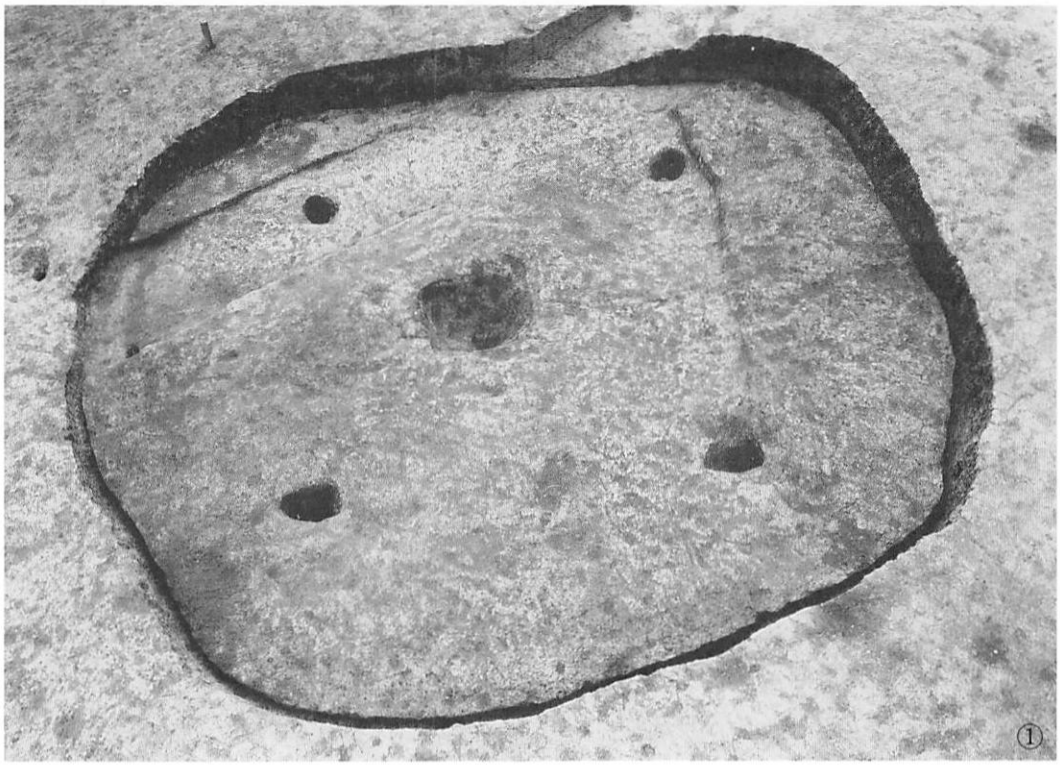


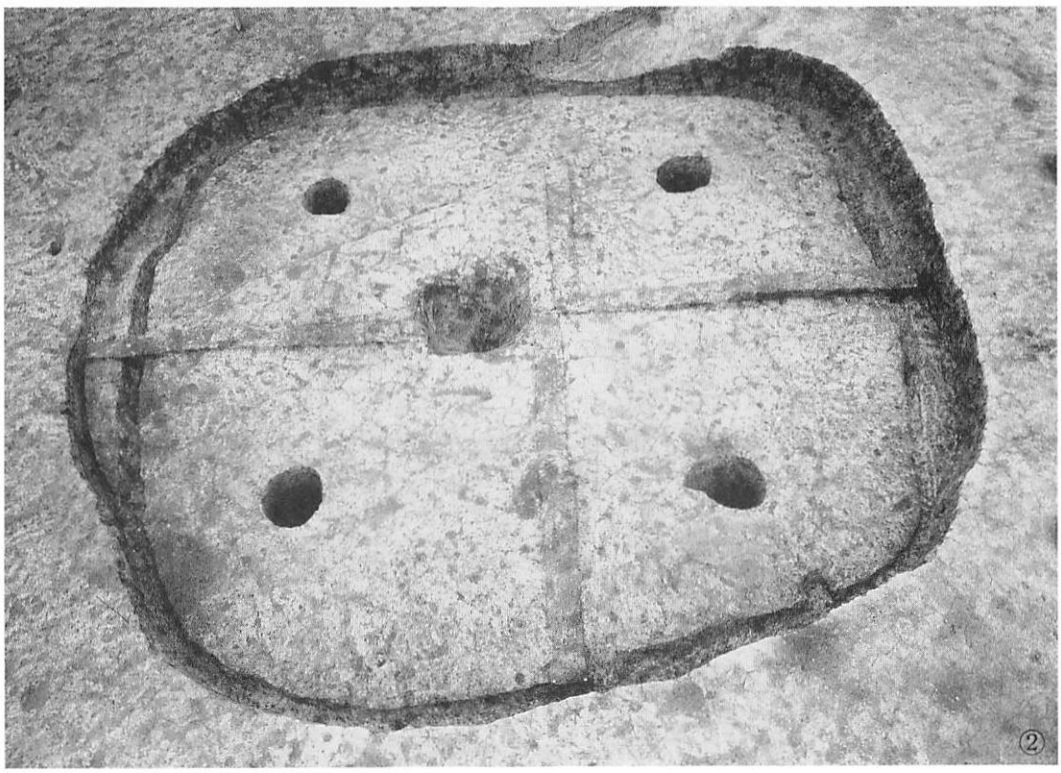
① 遺跡遠景　　② 遺跡調査区全景



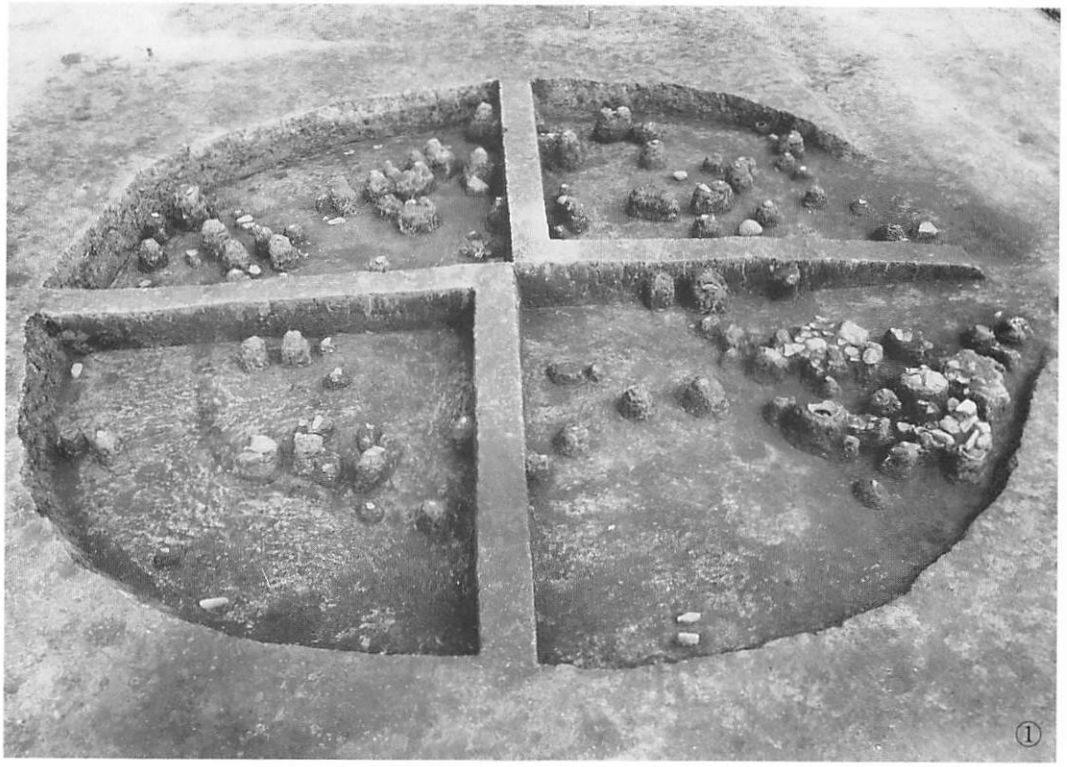


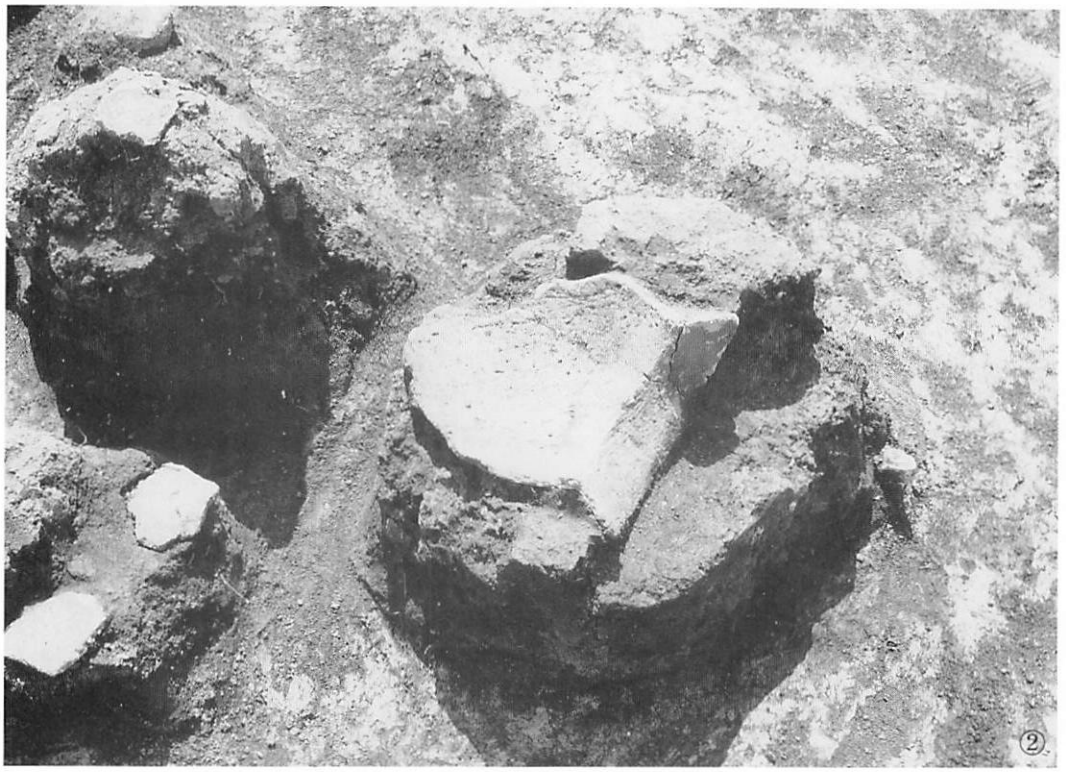
① SB1a 検出状況　　② SB1a 遺物出土状況



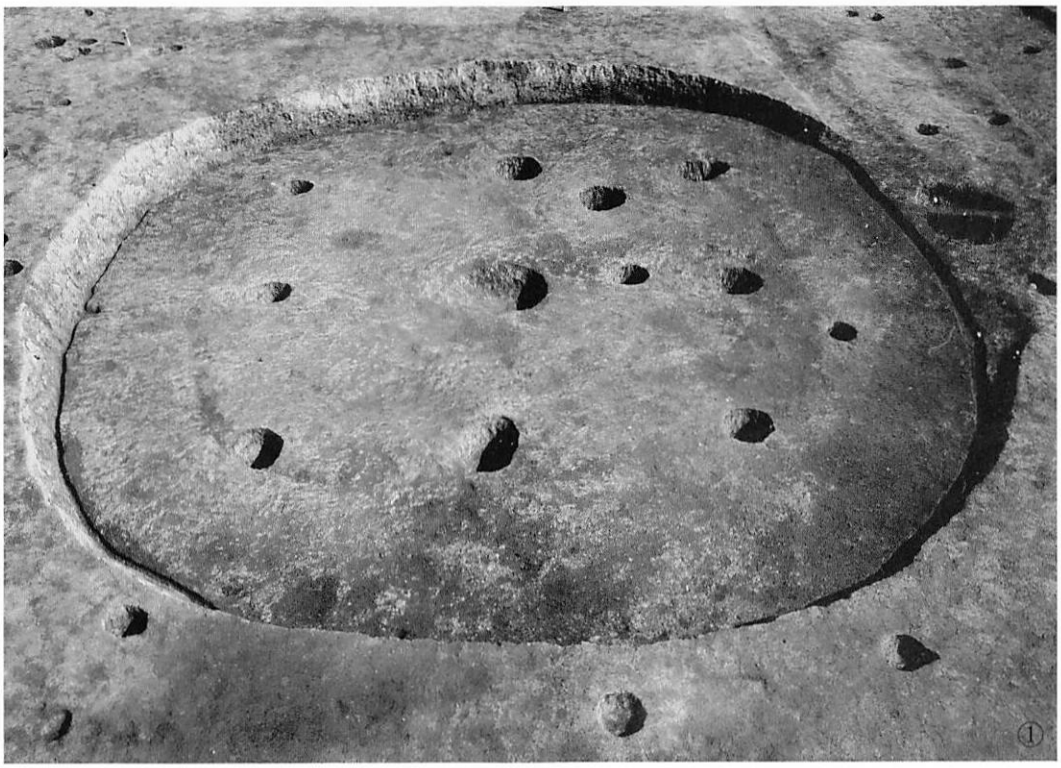


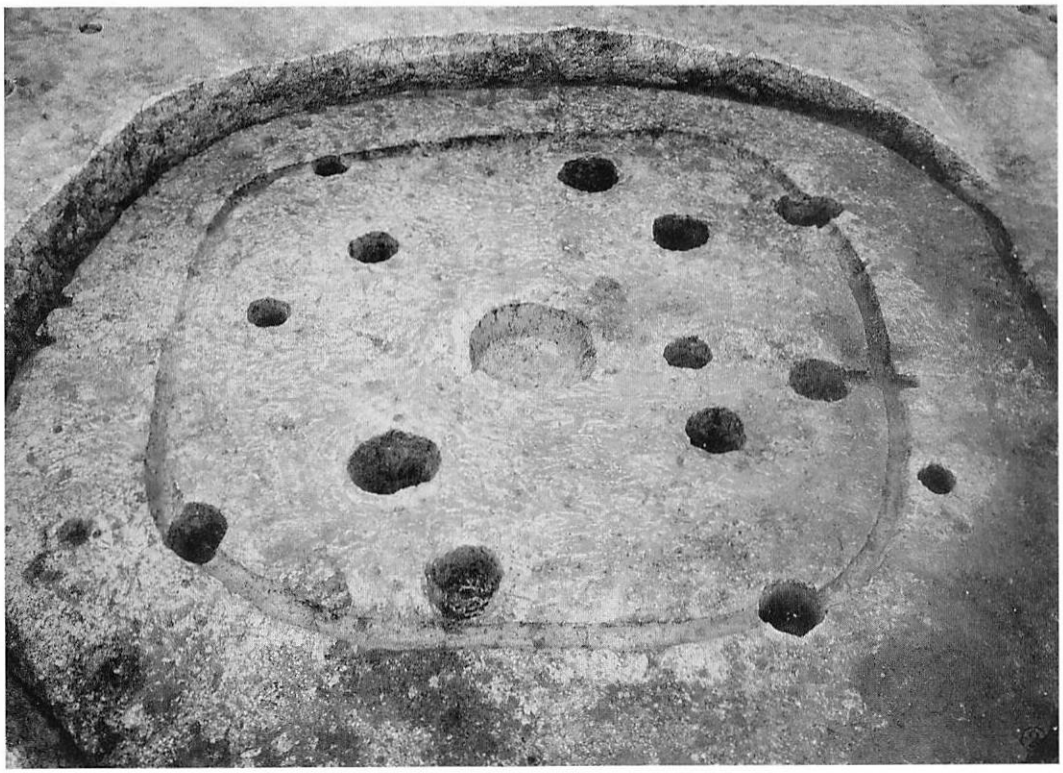
① ＳＢ１ａ完掘状況　　② ＳＢ１ｂ完掘状況



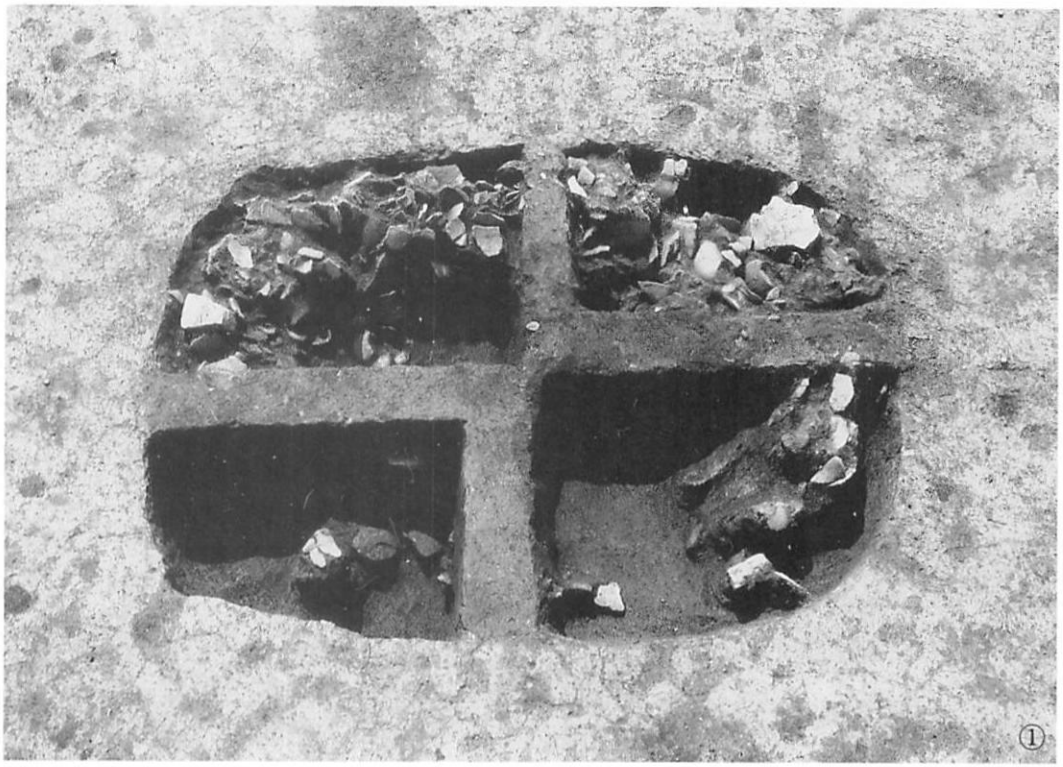


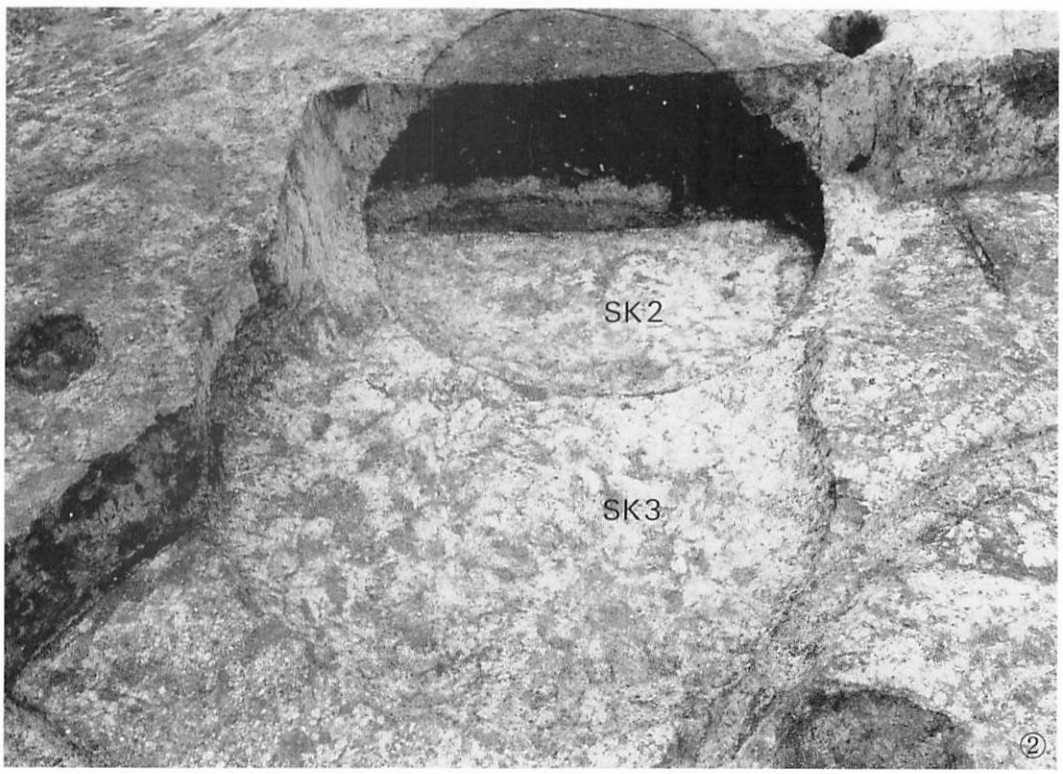
① ＳＢ２ａ検出状況　　② ＳＢ２ａ遺物出土状況



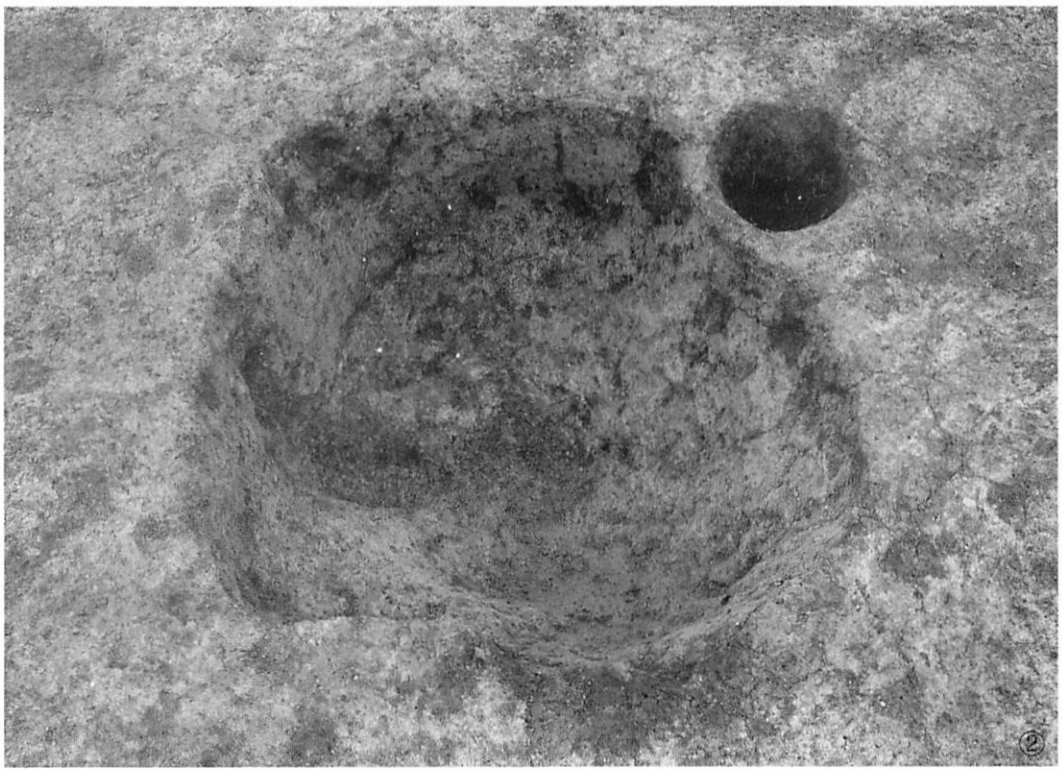


① SB 2a 完掘状況　　② SB 2b 完掘状況





① SK１検出状況　　② SK２・３検出状況

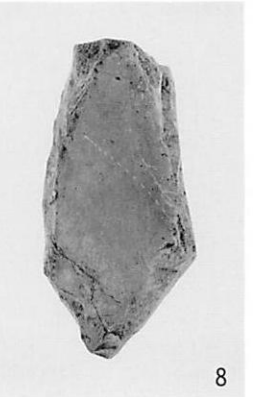


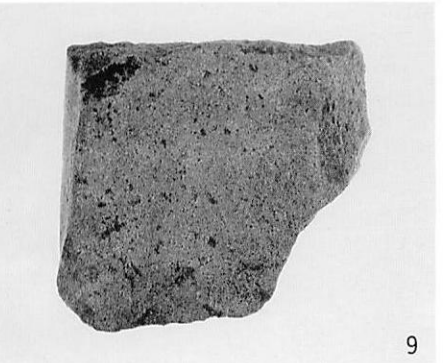
① ＳＫ４完掘状況　　② ＳＫ６完掘状況

出　土　遺　物　Ⅰ

31

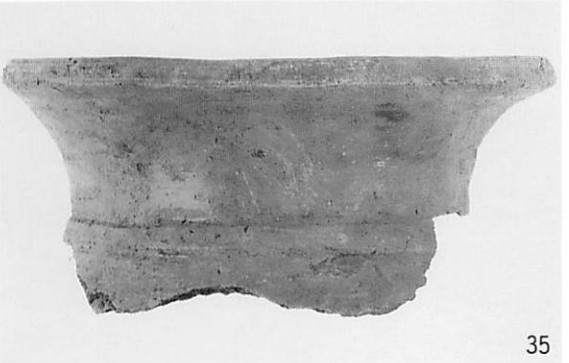
32


8


9

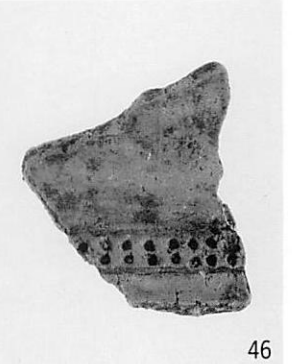
33

34


35

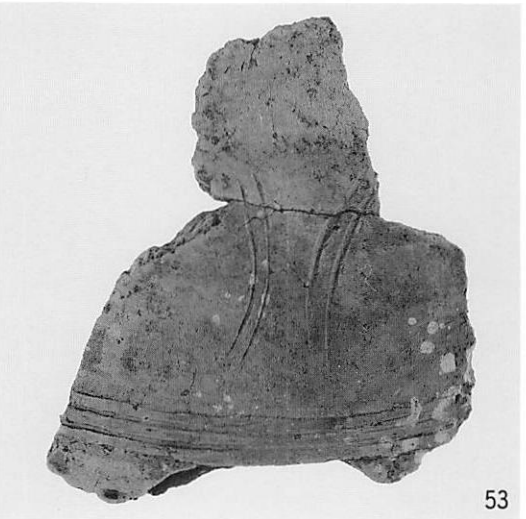
37

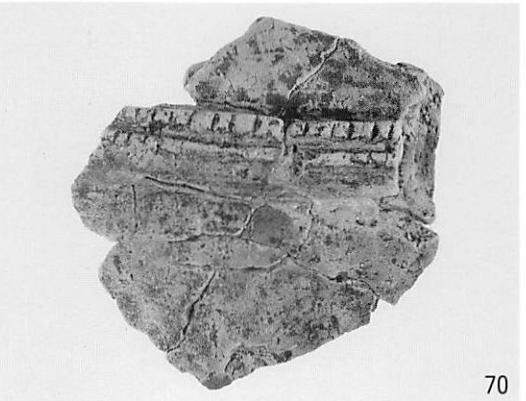
43

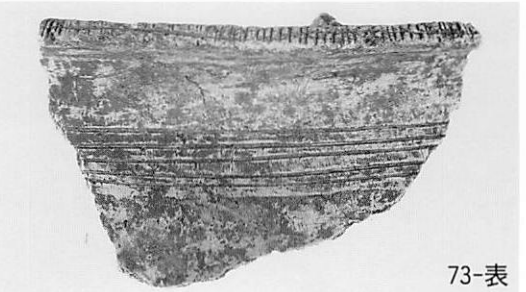

46

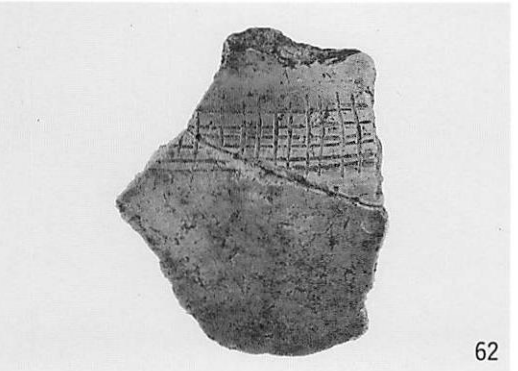
出　土　遺　物　II

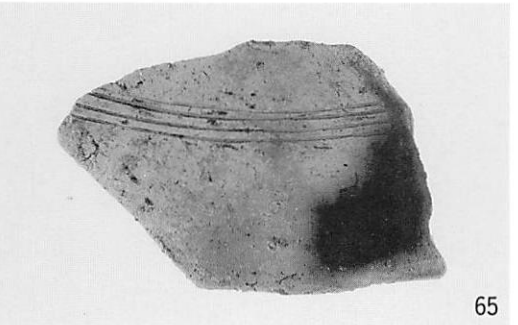
52

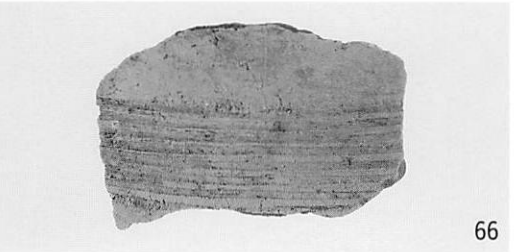

53

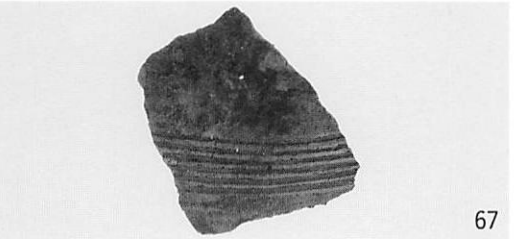

70

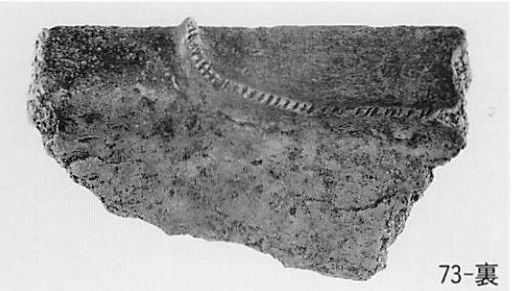

73-表


62


65


66


67


73-裏

出 土 遺 物 III

76

77

78

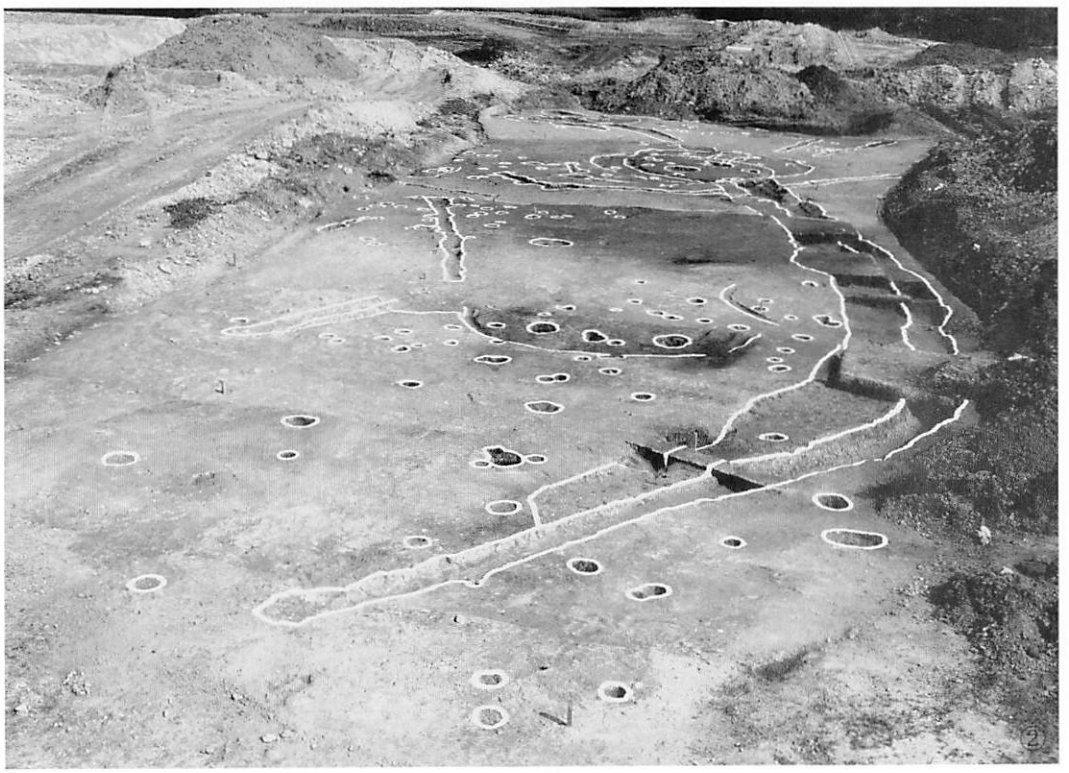
89

90

86

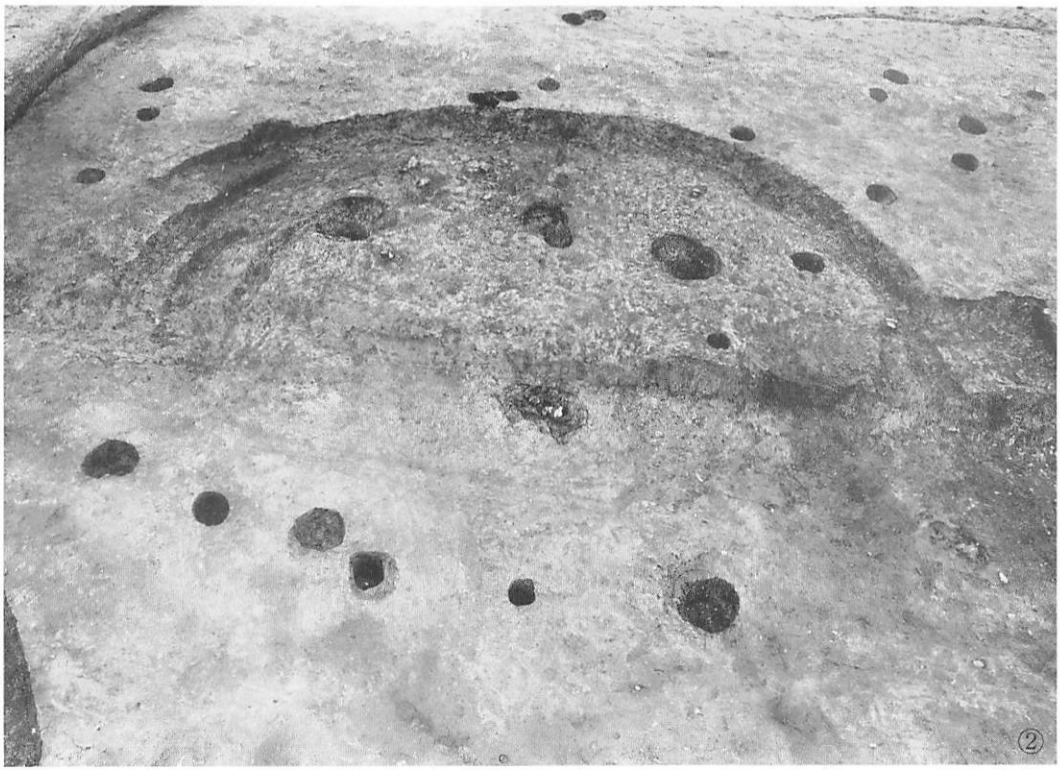
87

出 土 遺 物 IV

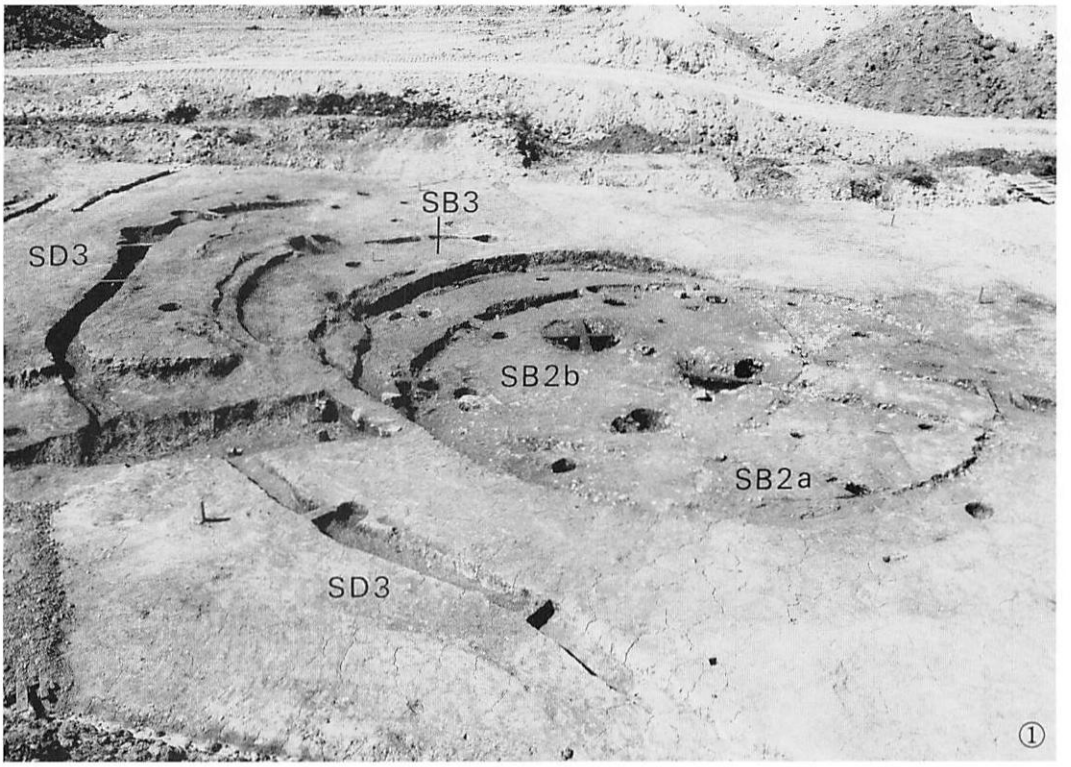


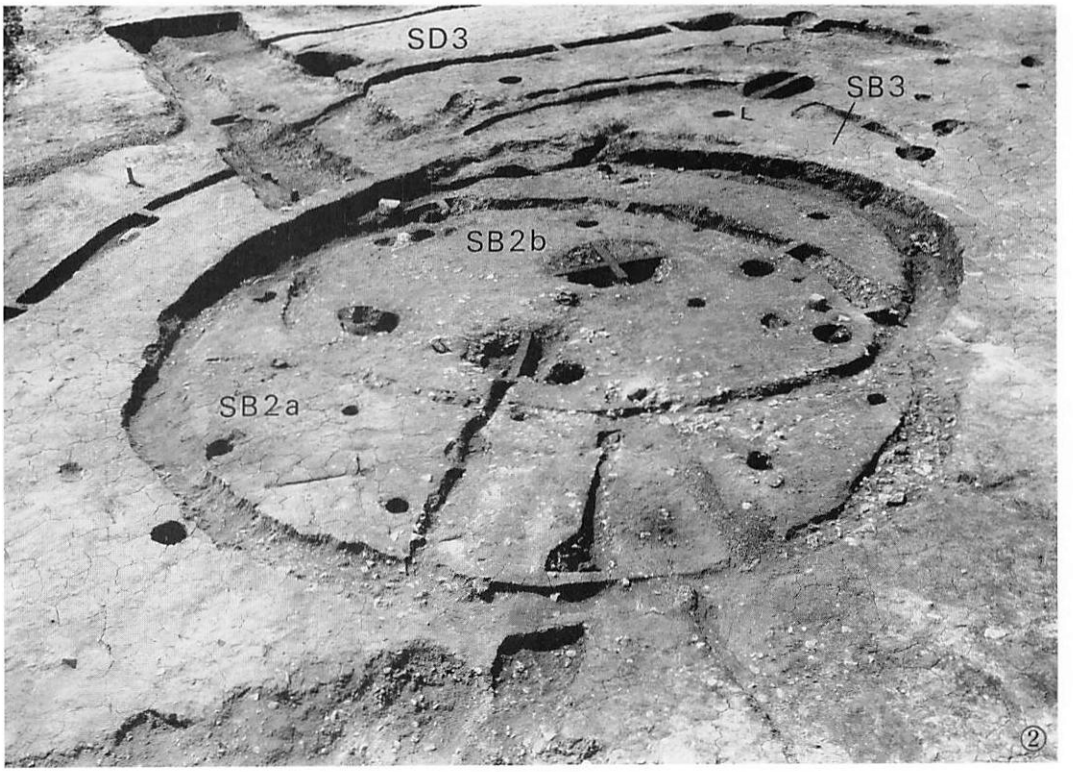
① 遺跡遠景　　② 遺跡調査区全景

① 調査区西半部　　② 調査区東半部

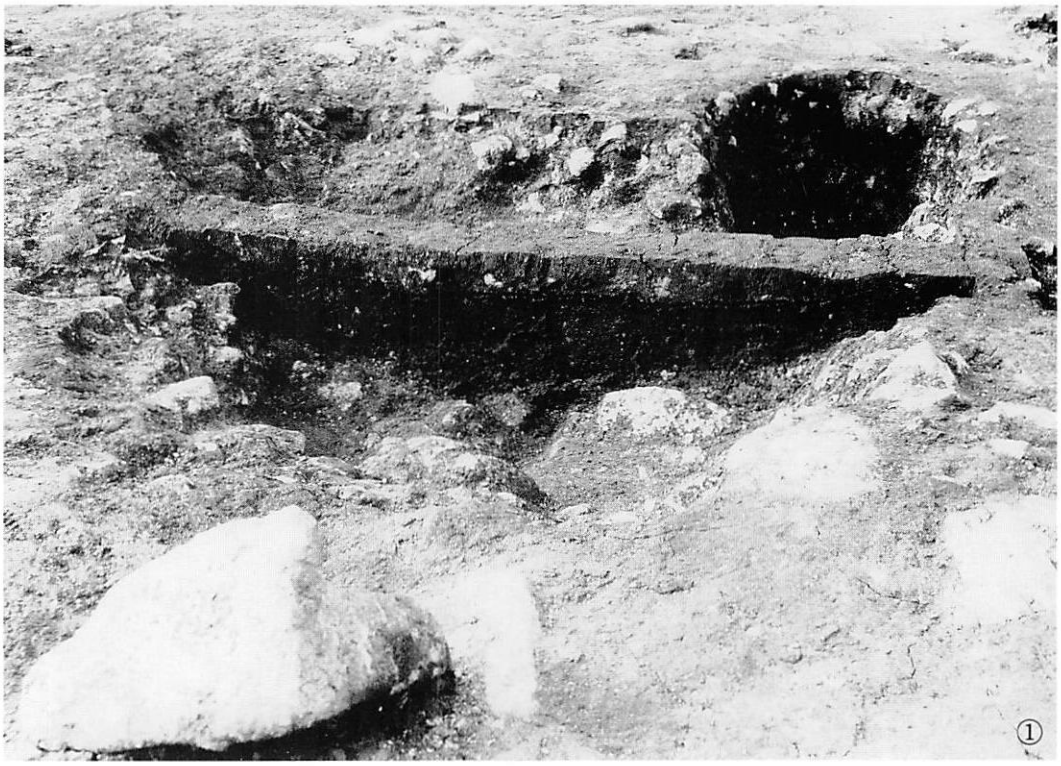


① 調査区東半部　　② ＳＢ１完掘状況

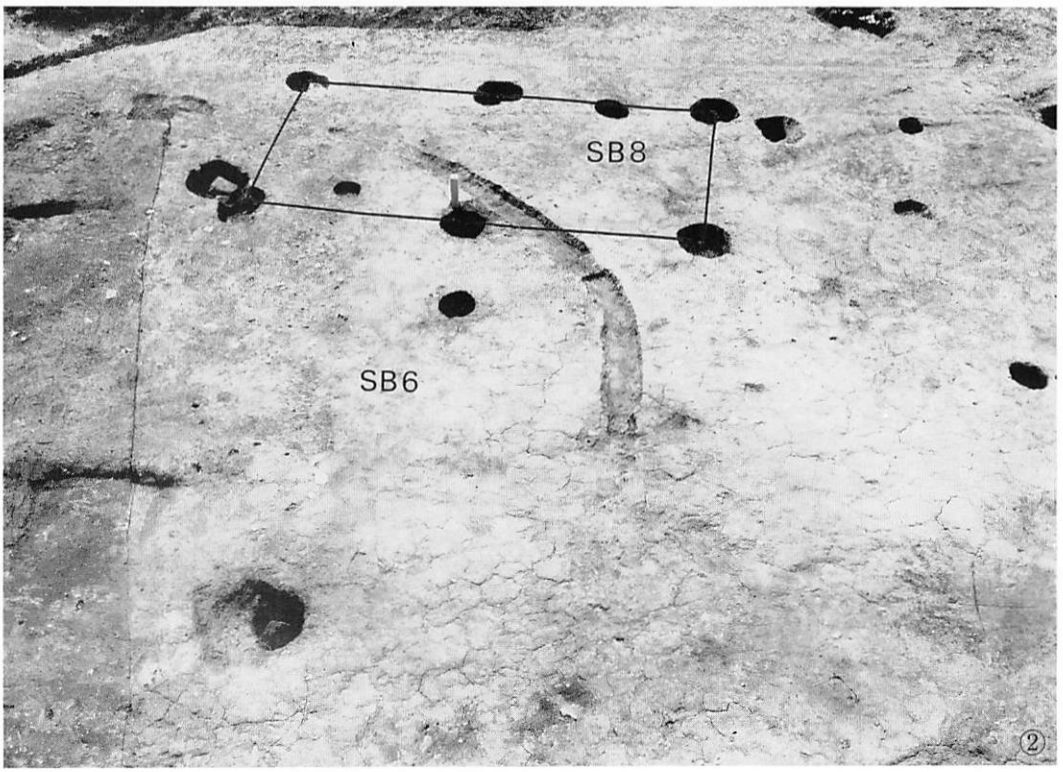




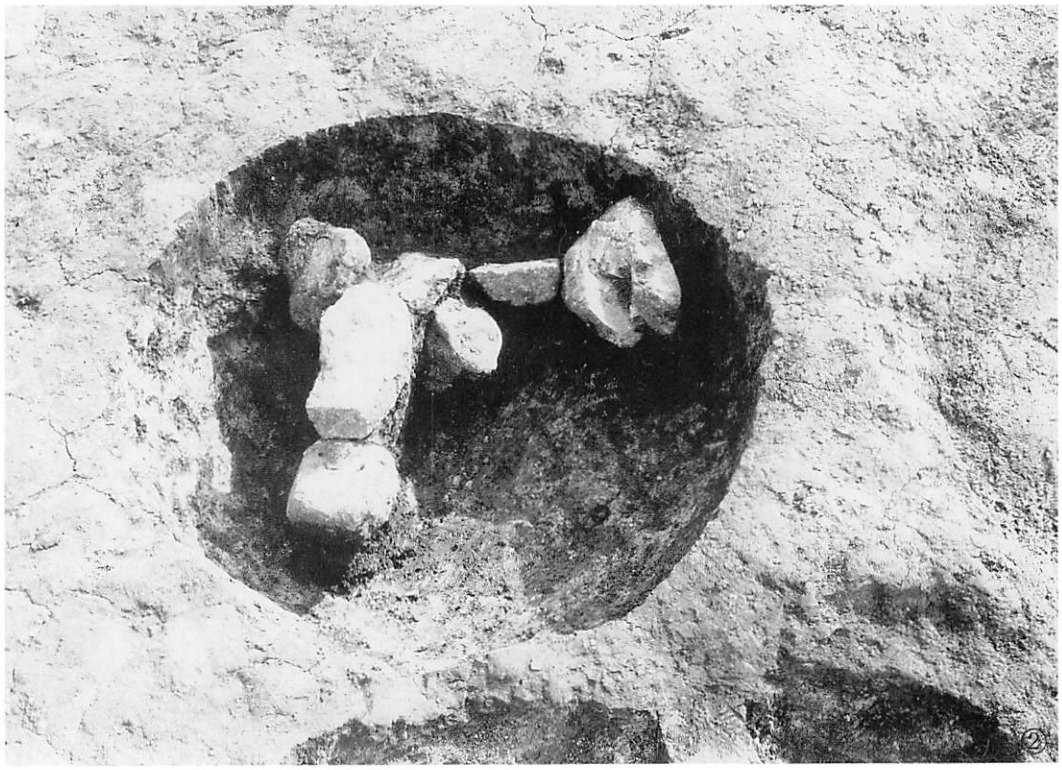
① SB2a・2b・3，SD3完掘状況　　② 同上



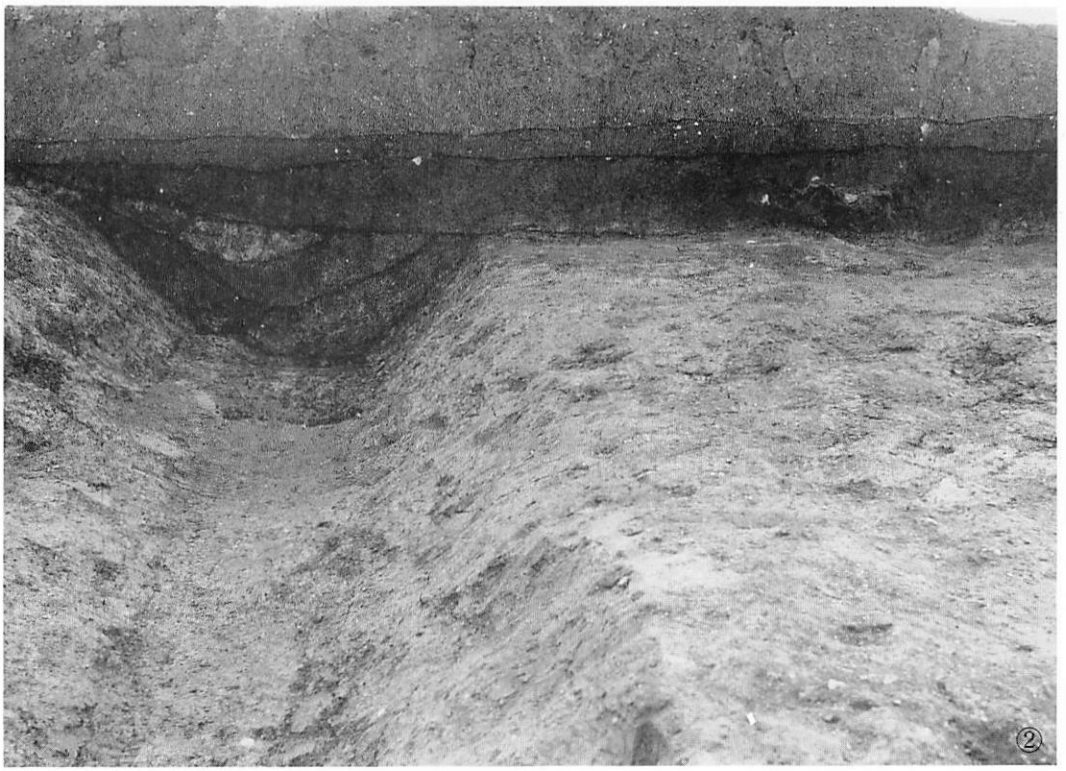
① SB 2a 炉跡土層断面　　② SB 2b 遺物出土状況



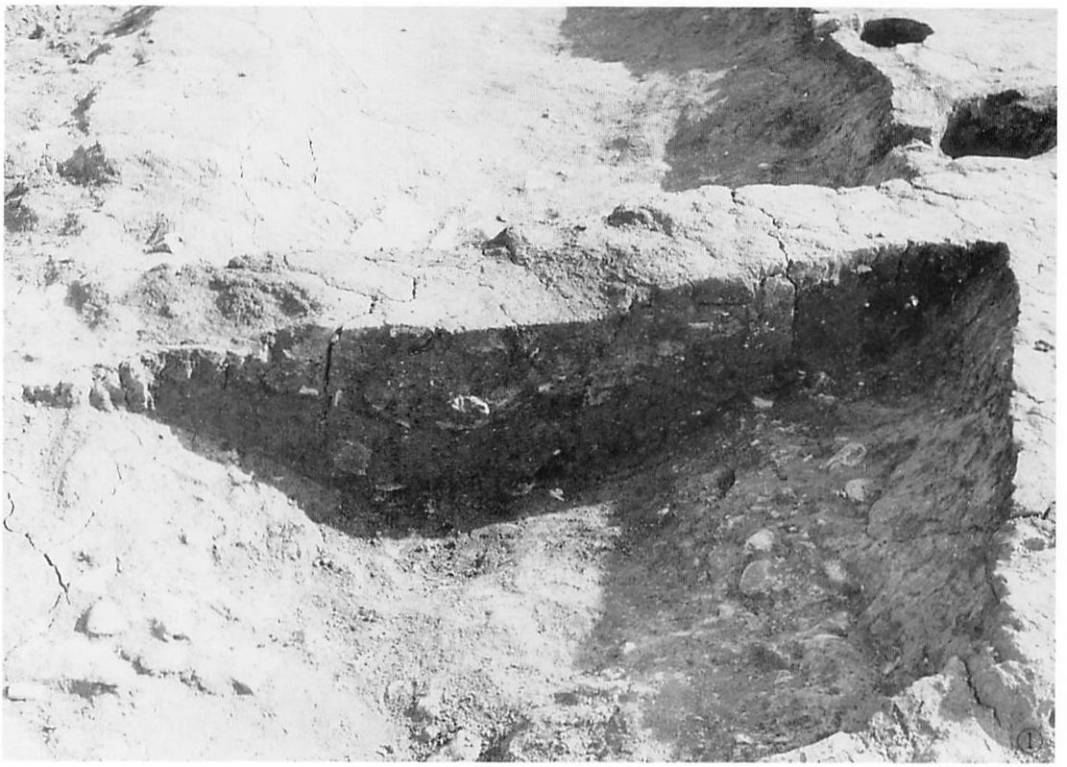
① SB 4 遺物出土状況　　② SB 6・8 完掘状況

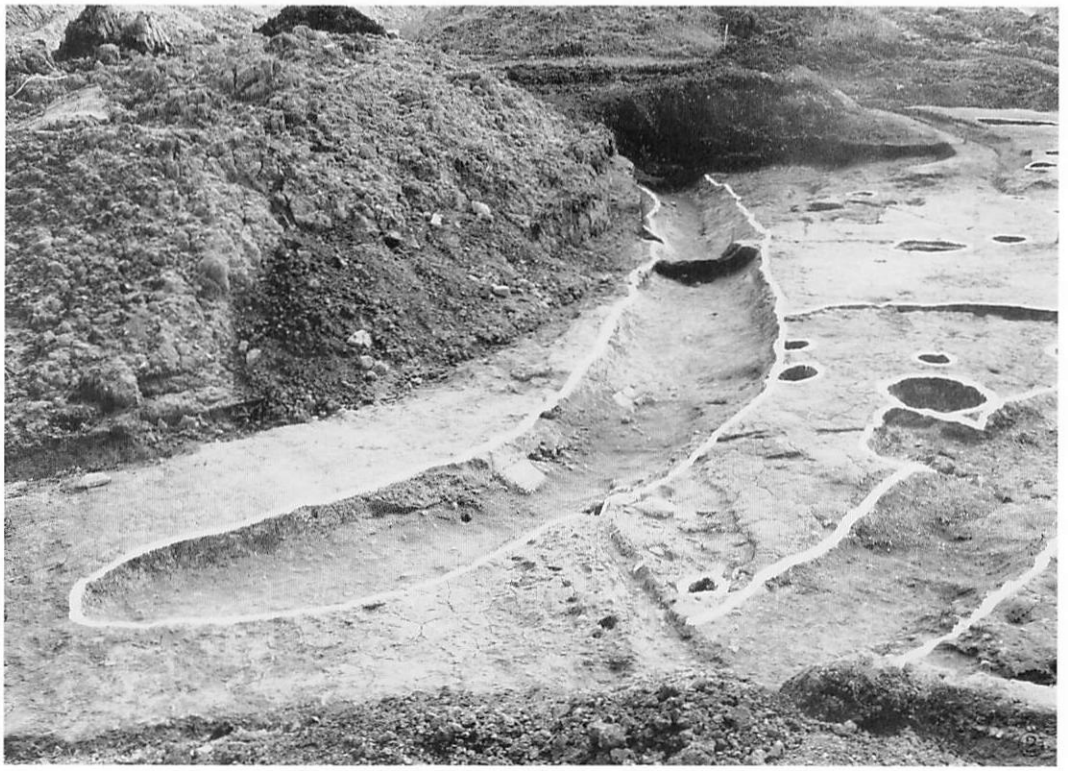


① SK1 土層断面　　② SK2 検出状況



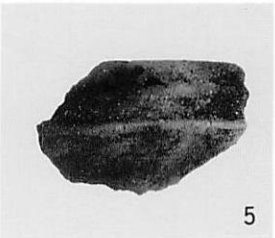
① SD 4a・4b 遺物出土状況　　② SD 4a・4b 土層断面

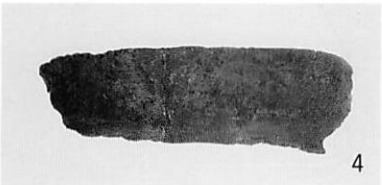


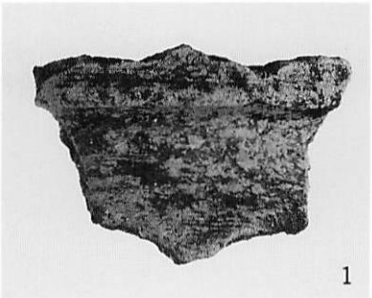


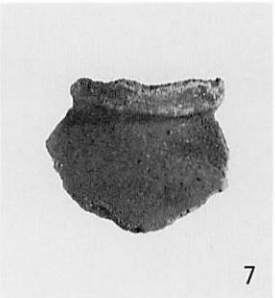
① SD 5 土層断面　　② SD 5 完掘状況

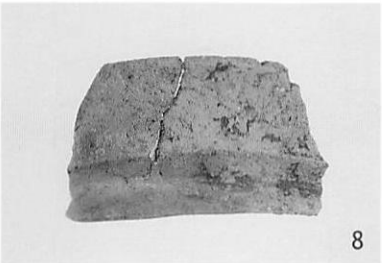
2


5

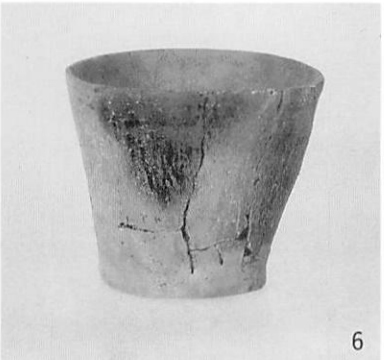

4

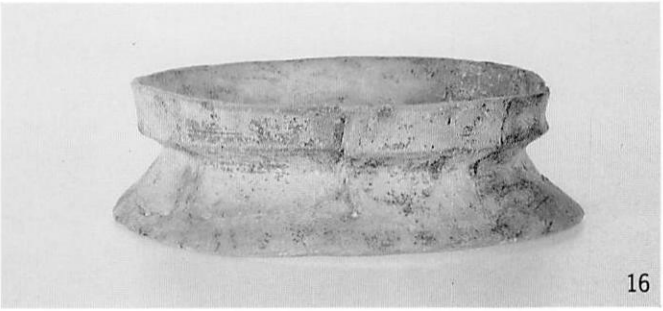

1

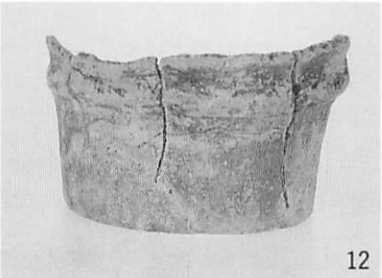

7

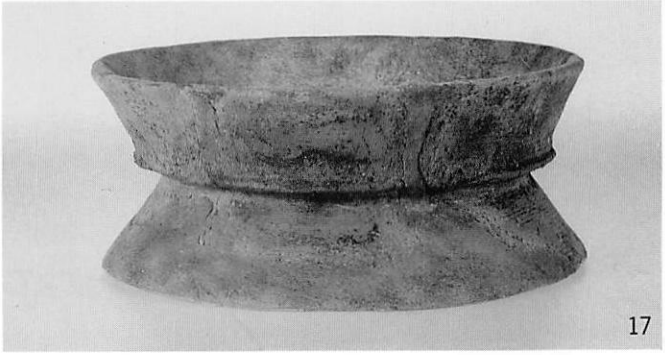

8

10


6

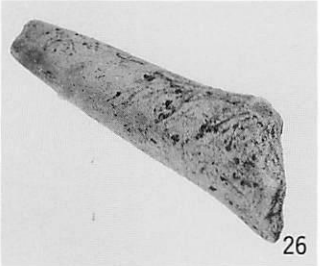

16

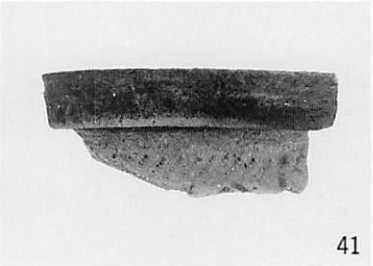

12

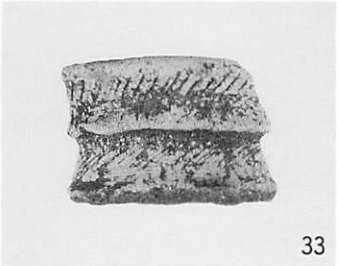

17

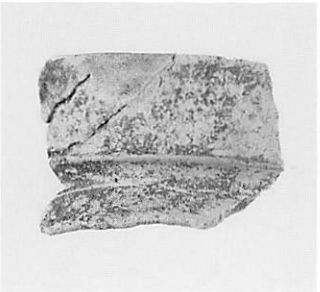
9

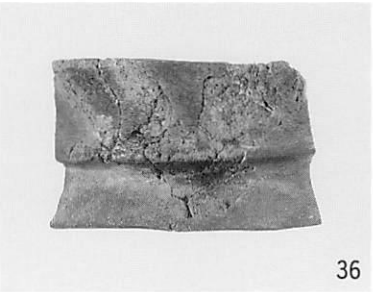
出　土　遺　物　I

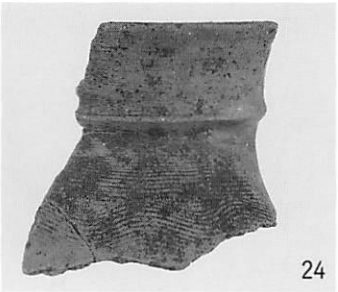

26

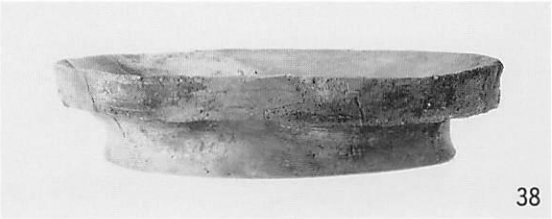

41

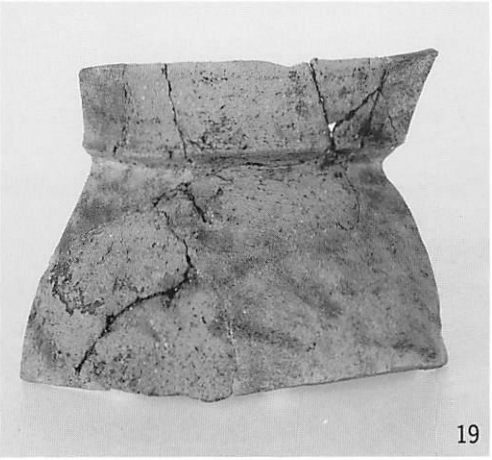

33




36


24

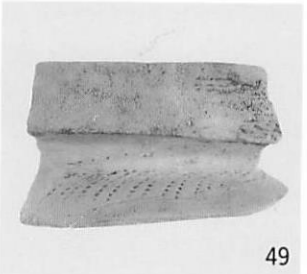

38


19

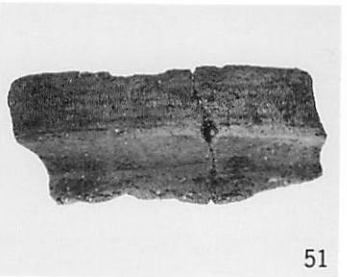
20

18

出　土　遺　物　II


49

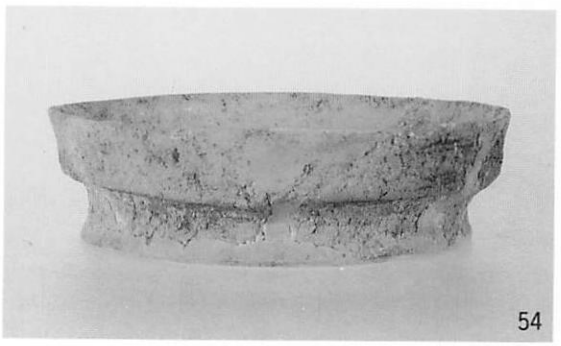
50


51

48

46

43

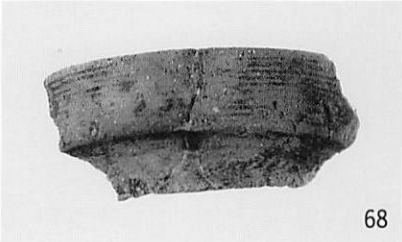

54

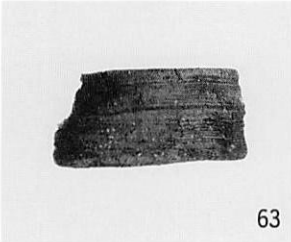
56

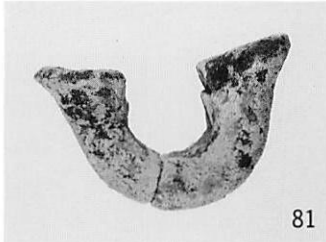
47

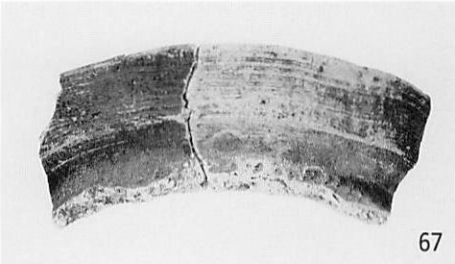
57

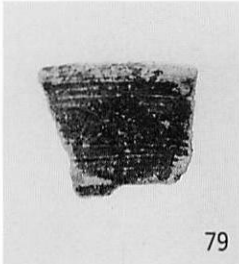
出　土　遺　物　III

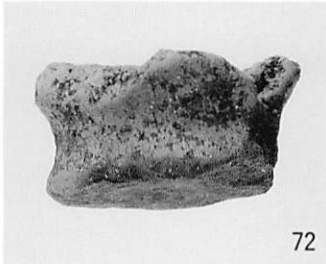

68


63


81


67

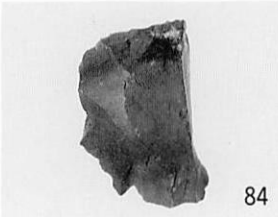

79


72

80

65

85


84

86

83

82

27

87

出　土　遺　物　IV

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告 第88集

本 郷 遺 跡
焼 け 遺 跡

発 行 平成 2 (1990) 年 3 月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8－49
☎ (082) 295－5751

印刷所 電 子 印 刷 株 式 会 社